

(19) 日本国特許庁 (J P)

## (12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開2000-112673

(P 2 0 0 0 - 1 1 2 6 7 3 A)

(43) 公開日 平成12年4月21日 (2000.4.21)

(51) Int. Cl. <sup>7</sup>	識別記号	F I	テマコード (参考)
G06F 3/06	306	G06F 3/06	306 B 5B065
G11B 7/004		G11B 7/00	626 A 5D044
7/005			636 Z 5D090
20/10		20/10	C
20/12		20/12	
審査請求 未請求 請求項の数10 F D (全86頁)			

(21) 出願番号 特願平10-292823

(22) 出願日 平成10年9月30日 (1998.9.30)

(71) 出願人 000003078

株式会社東芝

神奈川県川崎市幸区堀川町72番地

(72) 発明者 安東 秀夫

神奈川県川崎市幸区柳町70番地 株式会社  
東芝柳町工場内

(72) 発明者 伊藤 精悟

神奈川県川崎市幸区柳町70番地 株式会社  
東芝柳町工場内

(74) 代理人 100058479

弁理士 鈴江 武彦 (外6名)

最終頁に続く

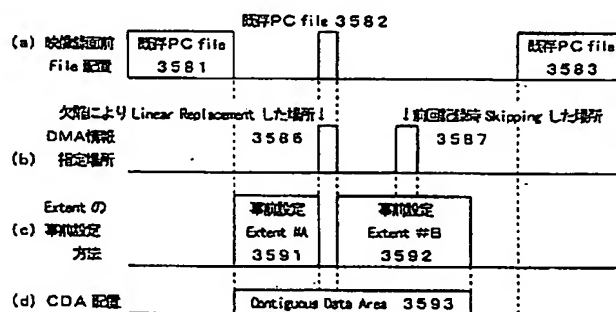
(54) 【発明の名称】 情報記憶媒体に対する情報記録方法及び情報記録装置及び再生方法

(57) 【要約】

【課題】 欠陥領域が多数存在しても情報記憶媒体上に安定した連続記録が可能となる。

【解決手段】 情報記憶媒体上にファイル単位で情報を記録すると共に、光学ヘッドのアクセス頻度を低下させ、もって情報記憶媒体への連続記録を可能にするための連続記録領域であるコンティギアスデータエリア (Contiguous Data Area) が定義される。このコンティギアスデータエリアは、情報記憶媒体上に既に記録されている別のファイル記録領域または情報記憶媒体上の欠陥領域のいずれか一方をまたがって設定し、別のファイル記録領域または情報記憶媒体上の欠陥領域により分割される領域に対して情報記録場所としてのエクステン

ト (extent) を設定している。

LBN/XXX における Contiguous Data Area 設定方法と記録前の  
Extent 事前設定方法

## 【特許請求の範囲】

【請求項 1】 情報の記録再生可能な情報記憶媒体に対して情報記録場所を設定する場合、

使用時の前記情報記憶媒体に対して情報を記録可能な領域を第 1 の領域とし、この第 1 の領域に対して情報記憶媒体上の物理的な位置を示す物理アドレス (PSN) と、前記情報記憶媒体上に記録される情報を論理的に管理するための論理アドレス (LBN) を設定すると共に、

前記論理アドレス空間上に連続して情報が記録された単位であり、かつこの単位の中では連続した論理アドレス番号 (LBN) が付与されている単位をエクステント (Extent) と定義し、

前記エクステントの単位で情報を記録できるようにすると共に、前記情報記憶媒体上の上記第 1 の領域 (User Area) 内に発生した欠陥領域に対しても上記論理アドレス番号を付与するが、情報が記録される場所と前記欠陥領域との間では、上記エクステントが分かれ、前記情報が記録された場所が情報記録用のエクステントを形成していることを特徴とした情報記憶媒体に対する情報記録方法。

【請求項 2】 情報を記録する時に情報記憶媒体上の欠陥領域を避けて次から記録する方式であるスキッピングリプレースメント (Skipping Replacement) 処理を行い、記録終了後に上記欠陥領域との間で分けてエクステント (Extent) を設定するようにしたことを特徴とする請求項 1 記載の情報記憶媒体に対する情報記録方法。

【請求項 3】 集束光を用いて情報記憶媒体に対して情報の記録再生を行う情報記録再生方法であり、前記情報記憶媒体に対して集束光を照射する光学ヘッドと、前記光学ヘッドを情報記憶媒体に対して移動させる光学ヘッド移動機構と前記光学ヘッドの移動を制御する制御部とを用いて情報記憶媒体に情報を記録する情報記録方法であって、

前記情報記憶媒体上に情報を記録するための第 1 の単位であるファイル単位で情報を記録すると共に、光学ヘッドのアクセス頻度を低下させ、もって前記情報記憶媒体への連続記録を可能にするための連続記録領域であるコンティギューアスデータエリア (Contiguous Data Area) が第 2 の単位として定義され、

かつ前記コンティギューアスデータエリア (Contiguous Data Area) 単位で記録し、しかも前記コンティギューアスデータエリア (Contiguous Data Area) 単位の集合体として前記ファイル単位が構成され、かつ少なくとも前記情報記憶媒体上に既に記録されている別のファイル記録領域または情報記憶媒体上の欠陥領域のいずれか一方をまたがって前記コンティギューアスデータエリア (Contiguous Data Area) 単位を設定して情報記録場所を設定していることを特徴とする情報記憶媒体に対する情報記録方法。

【請求項 4】 前記コンティギューアスデータエリアのサイズ CDAS は

$$CDAS \geq \frac{STR \times PTR \times (Ta + Tskip + Tpc)}{(PTR - STR)}$$

但し、STR は平均システム転送レート、PTR は物理転送レート、Ta は情報記憶媒体上の記録領域を読取り手段がアクセスする 1 回の平均アクセス時間、Tskip は、コンティギューアスデータエリア内で今回記録時に初めて発見されたスキッピング処理が必要となる欠陥領域の総合計箇所を通過する合計時間、Tpc は、既存の別ファイルと以前リニアリプレースメント処理あるいは前回記録時スキッピングリプレースメント処理した欠陥領域を避けるために必要な合計アクセス時間、となるように設定することを特徴とする請求項 3 記載の情報記憶媒体に対する情報記録方法。

【請求項 5】 1 個のコンティギューアスデータエリア内に含まれる別ファイル記録領域と欠陥領域の総和サイズ Lskip は、

$$Lskip \leq \{ [CDAS \times (PTR - STR) / (STR \times PTR)] - Ta - Tpc \} \times PTR$$

但し、PTR は物理転送レート、STR は平均システム転送レート、Ta は 1 回の平均アクセス時間、CDAS はコンティギューアスデータエリアのサイズ、Tpc はコンティギューアスデータエリア内の別ファイルと以前リニアリプレースメント処理した欠陥領域を避けるために必要な合成アクセス時間、となるように設定することを特徴とする請求項 3 記載の情報記憶媒体に対する情報記録方法。

【請求項 6】 情報の記録再生可能な情報記憶媒体に対して情報記録場所を設定する場合、

使用時の前記情報記憶媒体に対して情報を記録可能な領域を第 1 の領域とし、この第 1 の領域に対して情報記憶媒体上の物理的な位置を示す物理アドレス (PSN) と、前記情報記憶媒体上に記録される情報を論理的に管理するための論理アドレス (LBN) を設定すると共に、前記論理アドレス空間上に連続して情報が記録された単位であり、かつこの単位の中では連続した論理アドレス番号 (LBN) が付与されている単位をエクステント (Extent) と定義しており、

前記エクステントの単位で情報を記録できるようにすると共に、前記情報記憶媒体上の上記第 1 の領域 (User Area) 内に発生した欠陥領域に対しても上記論理アドレス番号を付与するが、情報が記録される場所と前記欠陥領域との間では、上記エクステントが分かれ、前記情報が記録された場所が情報記録用のエクステントを形成したことを特徴とする情報記憶媒体に対する情報記録装置。

【請求項 7】 集束光を用いて情報記憶媒体に対して情

報の記録再生を行う情報記録再生装置であり、前記情報記憶媒体に対して集束光を照射する光学ヘッドと、前記光学ヘッドを情報記憶媒体に対して移動させる光学ヘッド移動機構と前記光学ヘッドの移動を制御する制御部とを用いて情報記憶媒体に情報を記録する情報記録装置であって、

前記情報記憶媒体上に情報を記録するための第 1 の単位であるファイル単位で情報を記録すると共に、光学ヘッドのアクセス頻度を低下させ、もって前記情報記憶媒体への連続記録を可能にするための連続記録領域であるコンティギアスデータエリア (Contiguous Data Area) が第 2 の単位として定義し、

かつ前記コンティギアスデータエリア (Contiguous Data Area) 単位で記録し、しかも前記コンティギアスデータエリア (Contiguous Data Area) 単位の集合体として前記ファイル単位が構成され、かつ少なくとも前記情報記憶媒体上に既に記録されている別のファイル記録領域または情報記憶媒体上の欠陥領域のいずれか一方をまたがって前記コンティギアスデータエリア (Contiguous Data Area) 単位を設定して情報記録場所を設定する手段を有したことを特徴とする情報記憶媒体に対する情報記録装置。

【請求項 8】 情報の記録再生可能な情報記憶媒体に対して情報記録場所を設定する場合、

使用時の前記情報記憶媒体に対して情報を記録可能な領域を第 1 の領域とし、この第 1 の領域に対して情報記憶媒体上の物理的な位置を示す物理アドレス (PSN) と、前記情報記憶媒体上に記録される情報を論理的に管理するための論理アドレス (LBN) を設定すると共に、前記論理アドレス空間上に連続して情報が記録された単位であり、かつこの単位の中では連続した論理アドレス番号 (LBN) が付与されている単位をエクステント (Extent) と定義しており、

前記エクステントの単位で情報を記録できるようにすると共に、前記情報記憶媒体上の上記第 1 の領域 (User Area) 内に発生した欠陥領域に対しても上記論理アドレス番号を付与するが、情報が記録される場所と前記欠陥領域との間では、上記エクステントが分かれ、前記情報が記録された場所が情報記録用のエクステントを形成していることを特徴とする情報記憶媒体。

【請求項 9】 集束光を用いて情報記憶媒体に対して情報の記録再生を行う情報記録再生装置であり、前記情報記憶媒体に対して集束光を照射する光学ヘッドと、前記光学ヘッドを情報記憶媒体に対して移動させる光学ヘッド移動機構と前記光学ヘッドの移動を制御する制御部とを用いて情報記憶媒体に情報を記録される情報記録媒体であって、

前記情報記憶媒体上に情報を記録するための第 1 の単位であるファイル単位で情報を記録すると共に、光学ヘッドのアクセス頻度を低下させ、もって前記情報記憶媒体

への連続記録を可能にするための連続記録領域であるコンティギアスデータエリア (Contiguous Data Area) が第 2 の単位として定義し、

かつ前記コンティギアスデータエリア (Contiguous Data Area) 単位で記録し、しかも前記コンティギアスデータエリア (Contiguous Data Area) 単位の集合体として前記ファイル単位が構成され、かつ少なくとも前記情報記憶媒体上に既に記録されている別のファイル記録領域または情報記憶媒体上の欠陥領域のいずれか一方をまたがって前記コンティギアスデータエリア (Contiguous Data Area) 単位を設定して情報記録場所を設定していることを特徴とする情報記憶媒体。

【請求項 10】 情報の記録再生可能な情報記憶媒体に対して情報記録場所を設定する場合、

使用時の前記情報記憶媒体に対して情報を記録可能な領域を第 1 の領域とし、この第 1 の領域に対して情報記憶媒体上の物理的な位置を示す物理アドレス (PSN) と、前記情報記憶媒体上に記録される情報を論理的に管理するための論理アドレス (LBN) を設定すると共に、

前記論理アドレス空間上に連続して情報が記録された単位であり、かつこの単位の中では連続した論理アドレス番号 (LBN) が付与されている単位をエクステント (Extent) と定義し、

前記エクステントの単位で情報を記録できるようにすると共に、前記情報記憶媒体上の上記第 1 の領域 (User Area) 内に発生した欠陥領域に対しても上記論理アドレス番号を付与するが、情報が記録される場所と前記欠陥領域との間では、上記エクステントが分かれ、前記情報が記録された場所のみが情報記録用のエクステントが形成されている情報記録媒体の上記情報を再生することを特徴とする情報再生方法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は映像情報及び又は音声情報などの情報を論理的に間欠する事無く、情報記憶媒体上に連続的に記録するための情報記録場所の設定方法、情報記録方法、およびその記録を可能にする情報記録再生装置に関する。また本発明は上記記録方法に基いて記録された情報を連続的に再生可能にするためのデータ構造を有する情報記憶媒体に関する内容も含む。

【0002】

【従来の技術】 映像情報または音声情報が記録されている情報記憶媒体として LD (レーザーディスク) や DVD ビデオディスクが存在する。しかし上記の情報記憶媒体は再生専用であり、情報記憶媒体上での欠陥領域は存在しない。コンピュータ情報を記録する媒体として DVD-RAM ディスクが現存する。この媒体は追加記録が可能であり、情報記憶媒体上に発生した欠陥領域に対する代替え処理方法も確立されている。

10

20

30

40

50

【0003】RAMディスクに対するコンピューター情報記録時の欠陥領域に対する代替え処理方法としてリニアリプレイメント (Linear Replacement) 処理と言われるものがある。

【0004】この処理は、欠陥領域があった場合、ユーザエリア (User Area) とは物理的に離れた別の領域に確保されているスペアエリア (Spare Area) 内の代替領域を確保して、ここに論理ブロック番号 (LBN) を設定する方法である。この方法は、ディスク上への情報記録や再生時において、ディスク上で光ヘッドは記録又は再生の途中に欠陥領域があると、物理的に離れた位置のスペアエリアにデータを記録したりあるいは記録したりし、その後、中断した位置に戻って続きのデータを記録しなければならない。このために光ヘッドの動きを頻繁にしなければならない (図16 (d) を参照)。

【0005】またコンピューターシステムにおいて情報処理や情報の記録再生をおこなう担当部門は、録画再生アプリケーションソフト (以後、録再アプリと略する) 1 レイヤー、ファイルシステム (File System) 2 レイヤー、オプティカルディスクドライブ (Optical Disk Drive ; ODD) 3 レイヤーと、制御階層が分割されている。

【0006】そして、それぞれの階層間にはインターフェースとなるコマンドが定義されている。またそれぞれの階層で扱うアドレスも異なる。つまり録再アプリ1は、AVAddressを取り扱い、File System2は、AV Addressに基き論理セクタ番号 (LSN) または論理ブロック番号 (LBN) を取り扱い、ODD3は、論理セクタ番号 (LSN)、論理ブロック番号 (LBN) に基き物理セクタ番号 (PSN) を扱うようになっている (図6を参照)。

【0007】

【発明が解決しようとする課題】例えば、DVDビデオディスクの記録フォーマットに従った映像情報あるいは音声情報をDVD-RAMディスクに記録する場合を考える。前述したように欠陥処理 (代替え) 方法として、Linear Replacement 処理を行った場合、記録時に欠陥ECCブロックに遭遇すると光学ヘッドはその都度後述するUser Area 723 と Spare Area 724 間を往復する必要性が生じる。このように記録時に頻繁に光学ヘッドのアクセス動作を行うと、入力データの転送速度及びデータ量、記録のためのアクセスタイム及びバッファメモリ容量等の関係から、バッファメモリ内に保存される映像情報量がメモリ容量を超えてしまい、連続記録が不可能になる。

【0008】また、録画再生アプリケーションソフト1レイヤーでは情報記憶媒体上の欠陥管理に悩殺されることなく記録する映像情報の管理を行いたいが、情報記憶媒体上に多量の欠陥領域が発生した場合には、従来の方法では録画再生アプリケーションソフトレイヤー1にも情報記憶媒体上の欠陥の影響が波及し、安定な映像情報

管理が困難になる。

【0009】そこでこの発明の目的とするところは、情報記憶媒体上に多量の欠陥領域が存在しても影響を受けることなく安定に連続記録を行うことが可能な記録場所の設定方法、記録方法およびそれを行う情報記録再生装置を提供することにある。また上記安定した連続記録に最も適した形式で情報が記録されている情報記憶媒体 (およびそこに記録されている情報のデータ構造) を提供することにある。

【0010】

【課題を解決するための手段】この発明は上記の目的を達成するために、(1) この発明は、情報記憶媒体上の欠陥領域に対しても論理アドレスを設定すると共に欠陥領域を分割してエクステント (Extent) を設定する。

(2) またこの発明は、オーディオビデオ (AV) 情報記録時に欠陥領域に対してスキッピング (Skipping) を行い、記録終了後に欠陥領域を避けて Extent 設定する。(3) 又この発明は、欠陥領域および既に存在する別ファイル記録領域をまたがってコンティギアスデータエリア (Contiguous Data Area) を設定する。(4) 更にまたこの発明は、上記コンティギアスデータエリアのサイズを規定する。またこの発明は、(5) コンティギアスデータエリア内に含まれる別ファイルの記録領域と欠陥領域の総和のサイズを規定するものである。

【0011】上記 (1) の手段により、File System 2 上で欠陥領域を避けた Extent の設定が可能となる。つまり、欠陥領域に対して論理アドレス (LBN) が設定されているのでFile System 2 側で光学ヘッドのアクセス回数を低減させる処理が行える。また欠陥領域を分割して設定した Extent をファイルエントリー (File Entry) 上に設定してあるため、File System 2 側では欠陥管理情報 (TDM3472) を参照することなく、File Entry に記録された情報に従って直接再生したい場所にアクセス出来るので、File System 2 上の処理も簡単に行える。上記 (2) の手段により、Extent配置情報を半導体メモリに一時保管し、映像情報全体の記録終了後にまとめて File Entry 情報を書き換えることになり光学ヘッドのアクセス頻度が減り、映像情報の連続記録が容易となる。上記の (3) の手段のContiguous Data Area の設定方法を採用することにより、欠陥領域にLinear Replacement 処理を行ったPCファイルが入り込んでも、Extentの削除後に再度 Contiguous Data Area の設定が行え、情報記憶媒体上の記録領域の有効利用が可能となる。

【0012】

【発明の実施の形態】以下この発明の実施の形態を図面を参照して説明する。

【0013】図1はこの発明の代表的な特徴部を示している。なお、各図においては符号はブロック内に記入して説明している。本発明は、次に述べる点に特徴を備え



ている。

【0014】即ち、図1は、情報記憶媒体（光ディスク）に記録されるコンティギアスデータエリア（Contiguous Data Area）の設定方法と記録前のエクステン（extent）の事前設定方法を説明する図である。

【0015】図1（a）に示すように、前記情報記憶媒体上にファイル単位で情報を記録すると共に、図1

（d）に示すように、光学ヘッドのアクセス頻度を低下させ、もって前記情報記憶媒体への連続記録を可能にするための連続記録領域であるコンティギアスデータエリア（Contiguous Data Area）が定義される。このコンティギアスデータエリアは、図1（b）に示すように、前記情報記憶媒体上に既に記録されている別のファイル記録領域または情報記憶媒体上の欠陥領域のいずれか一方をまたがって設定し、図1（c）に示すように、別のファイル記録領域または情報記憶媒体上の欠陥領域により分割される領域に対して情報記録場所としてのエクステント（extent）を設定していることを特徴とするものである。

【0016】先ず始めに本発明における情報記録再生装置の概略構造について説明する。図2に示すように、情報再生装置もしくは情報記録再生装置103は大きく2つのブロックから構成される。情報再生部もしくは情報記録再生部（物理系ブロック）101は情報記憶媒体（光ディスク）を回転させ、光学ヘッドを用いて情報記憶媒体（光ディスク）にあらかじめ記録して有る情報を読み取る（または情報記憶媒体（光ディスク）に新たな情報を記録する）機能を有する。具体的には情報記憶媒体（光ディスク）を回転させるスピンドルモーター、情報記憶媒体（光ディスク）に記録して有る情報を再生する光学ヘッド、再生したい情報が記録されている情報記憶媒体（光ディスク）上の半径位置に光学ヘッドを移動させるための光学ヘッド移動機構、や各種サーボ回路などから構成されている。なお図3を用いたこのブロックに関する詳細説明は後述する。

【0017】応用構成部（アプリケーションブロック）102は情報再生部もしくは情報記録再生部（物理系ブロック）101から得られた再生信号cに処理を加えて情報再生装置もしくは情報記録再生装置103の外に再生情報aを伝送する働きをする。情報再生装置もしくは情報記録再生装置103の具体的用途（使用目的）に応じてこのブロック内の構成が変化する。この応用構成部（アプリケーションブロック）102の構成に付いても後述する。

【0018】また情報記録再生装置の場合には以下の手順で外部から与えられた記録情報bを情報記憶媒体（光ディスク）に記録する。

・外部から与えられた記録情報bは直接応用構成部（アプリケーションブロック）102に転送される。

・応用構成部（アプリケーションブロック）102内で

記録情報bに処理を加えた後、記録信号dを情報記録再生部（物理系ブロック）101へ伝送する。

・伝送された記録信号dを情報記録再生部（物理系ブロック）101内で情報記憶媒体に記録する。

【0019】次に、情報記録再生装置103内の情報記録再生部（物理系ブロック）101の内部構造を説明する。

【0020】図3は情報記録再生装置の情報記録再生部（物理系ブロック）内の構成の一例を説明するブロック図である。

【0021】情報記録再生部の基本機能の説明。

【0022】情報記録再生部では、情報記憶媒体（光ディスク）201上の所定位置に、レーザビームの集光スポットを用いて、新規情報の記録あるいは書き替え（情報の消去も含む）を行う。また情報記憶媒体201上の所定位置から、レーザビームの集光スポットを用いて、既に記録されている情報の再生を行う。

【0023】情報記録再生部の基本機能達成手段の説明。

【0024】上記基本機能を達成するために、情報記録再生部では、情報記憶媒体201上のトラックに沿って集光スポットをトレース（追従）させる。情報記憶媒体201に照射する集光スポットの光量（強さ）を変化させて情報の記録／再生／消去の切り替えを行う。外部から与えられる記録信号dを高密度かつ低エラー率で記録するために最適な信号に変換する。

【0025】機構部分の構造と検出部分の動作の説明。

【0026】＜光ヘッド202基本構造と信号検出回路＞

＜光ヘッド202による信号検出＞光ヘッド202は、基本的には、光源である半導体レーザ素子と光検出器と対物レンズから構成されている。半導体レーザ素子から発光されたレーザ光は、対物レンズにより情報記憶媒体（光ディスク）201上に集光される。情報記憶媒体201の光反射膜または光反射性記録膜で反射されたレーザ光は光検出器により光電変換される。

【0027】光検出器で得られた検出電流は、アンプ213により電流－電圧変換されて検出信号となる。この検出信号は、フォーカス・トラックエラー検出回路217あるいは2値化回路212で処理される。

【0028】一般的に、光検出器は、複数の光検出領域に分割され、各光検出領域に照射される光量変化を個々に検出している。この個々の検出信号に対してフォーカス・トラックエラー検出回路217で和・差の演算を行い、フォーカスずれおよびトラックずれの検出を行う。この検出とサーボ動作によりフォーカスずれおよびトラックずれを実質的に取り除いた後、情報記憶媒体201の光反射膜または光反射性記録膜からの反射光量変化を検出して、情報記憶媒体201上の信号を再生する。

【0029】＜フォーカスずれ検出方法＞フォーカスず

れ量を光学的に検出する方法としては、たとえば次のようなものがある：

〔非点収差法〕…情報記憶媒体 201 の光反射膜または光反射性記録膜で反射されたレーザ光の検出光路に非点収差を発生させる光学素子（図示せず）を配置し、光検出器上に照射されるレーザ光の形状変化を検出する方法である。光検出領域は対角線状に 4 分割されている。各検出領域から得られる各検出信号に対し、フォーカス・トラックエラー検出回路 217 内で対角上の検出領域からの信号の和を取り、その和間の差を取ってフォーカスエラー検出信号を得る。

〔ナイフエッジ法〕…情報記憶媒体 201 で反射されたレーザ光に対して非対称に一部を遮光するナイフエッジを配置する方法である。光検出領域は 2 分割され、各検出領域から得られる検出信号間の差を取ってフォーカスエラー検出信号を得る。

〔0030〕通常、上記非点収差法あるいはナイフエッジ法のいずれかが採用される。

〔0031〕＜トラックずれ検出方法＞情報記憶媒体（光ディスク）201 はスパイラル状または同心円状のトラックを有し、トラック上に情報が記録される。このトラックに沿って集光スポットをトレースさせて情報の再生または記録／消去を行う。安定して集光スポットをトラックに沿ってトレースさせるため、トラックと集光スポットの相対的位置ずれを光学的に検出する必要がある。

〔0032〕トラックずれ検出方法としては一般に、次の方法が用いられている：

〔位相差検出（Differential Phase Detection）法〕…情報記憶媒体（光ディスク）201 の光反射膜または光反射性記録膜で反射されたレーザ光の光検出器上での強度分布変化を検出する。光検出領域は対角線上に 4 分割されている。各検出領域から得られる各検出信号に対し、フォーカス・トラックエラー検出回路 217 内で対角上の検出領域からの信号の和を取り、その和間の差を取ってトラックエラー検出信号を得る。

〔0033〕〔プッシュプル（Push-Pull）法〕…情報記憶媒体 201 反射されたレーザ光の光検出器上での強度分布変化を検出する。光検出領域は 2 分割され、各検出領域から得られる検出信号間の差を取ってトラックエラー検出信号を得る。

〔0034〕〔ツインスポット（Twin-Spot）法〕…半導体レーザ素子と情報記憶媒体 201 間の送光系に回折素子などを配置して光を複数に波面分割し、情報記憶媒体 201 上に照射する  $\pm 1$  次回折光の反射光量変化を検出する。再生信号検出用の光検出領域とは別に  $+1$  次回折光の反射光量と  $-1$  次回折光の反射光量を個々に検出する光検出領域を配置し、それぞれの検出信号の差を取ってトラックエラー検出信号を得る。

〔0035〕＜対物レンズアクチュエータ構造＞半導体

レーザ素子から発光されたレーザ光を情報記憶媒体 201 上に集光させる対物レンズ（図示せず）は、対物レンズアクチュエータ駆動回路 218 の出力電流に応じて 2 軸方向に移動可能な構造になっている。この対物レンズの移動方向には、次の 2 つがある。すなわち、フォーカスずれ補正のために、情報記憶媒体 201 に対して垂直方向に移動し、トラックずれ補正のために情報記憶媒体 201 の半径方向に移動する方向である。

〔0036〕対物レンズの移動機構（図示せず）は対物レンズアクチュエータと呼ばれる。対物レンズアクチュエータ構造には、たとえば次のようなものがよく用いられる：

〔軸摺動方式〕…中心軸（シャフト）に沿って対物レンズと一体のブレードが移動する方式で、ブレードが中心軸に沿った方向に移動してフォーカスずれ補正を行い、中心軸を基準としたブレードの回転運動によりトラックずれ補正を行う方法である。

〔0037〕〔4本ワイヤ方式〕…対物レンズ一体のブレードが固定系に対し 4 本のワイヤで連結されており、ワイヤの弾性変形を利用してブレードを 2 軸方向に移動させる方法である。

〔0038〕上記いずれの方式も永久磁石とコイルを持ち、ブレードに連結したコイルに電流を流すことによりブレードを移動させる構造になっている。

〔0039〕＜情報記憶媒体 201 の回転制御系＞スピンドルモータ 204 の駆動力によって回転する回転テーブル 221 上に情報記憶媒体（光ディスク）201 を装着する。

〔0040〕情報記憶媒体 10 の回転数は、情報記憶媒体 201 から得られる再生信号によって検出する。すなわち、アンプ 213 出力の検出信号（アナログ信号）は 2 値化回路 212 でデジタル信号に変換され、この信号から PLL 回路 211 により一定周期信号（基準クロック信号）を発生させる。情報記憶媒体回転速度検出回路 214 では、この信号を用いて情報記憶媒体 201 の回転数を検出し、その値を出力する。

〔0041〕情報記憶媒体 201 上で再生あるいは記録／消去する半径位置に対応した情報記憶媒体回転数の対応テーブルは、半導体メモリ 219 に予め記録されている。再生位置または記録／消去位置が決まると、制御部 220 は半導体メモリ 219 情報を参照して情報記憶媒体 201 の目標回転数を設定し、その値をスピンドルモータ駆動回路 215 に通知する。

〔0042〕スピンドルモータ駆動回路 215 では、この目標回転数と情報記憶媒体回転速度検出回路 214 の出力信号（現状での回転数）との差を求め、その結果に応じた駆動電流をスピンドルモータ 204 に与えて、スピンドルモータ 204 の回転数が一定になるように制御する。情報記憶媒体回転速度検出回路 214 の出力信号は、情報記憶媒体 201 の回転数に対応した周波数を有

するパルス信号であり、スピンドルモータ駆動回路215では、このパルス信号の周波数およびパルス位相の両方に対して、制御（周波数制御および位相制御）を行なう。

【0043】＜光ヘッド移動機構＞この機構は、情報記憶媒体201の半径方向に光ヘッド202を移動させるため光ヘッド移動機構（送りモータ）203を持っている。

【0044】光ヘッド202を移動させるガイド機構としては、棒状のガイドシャフトを利用する場合が多い。このガイド機構では、このガイドシャフトと光ヘッド202の一部に取り付けられたブッシュ間の摩擦を利用して、光ヘッド202を移動させる。それ以外に回転運動を使用して摩擦力を軽減させたベアリングを用いる方法もある。

【0045】光ヘッド202を移動させる駆動力伝達方法は、図示していないが、固定系にピニオン（回転ギヤ）の付いた回転モータを配置し、ピニオンとかみ合う直線状のギヤであるラックを光ヘッド202の側面に配置して、回転モータの回転運動を光ヘッド202の直線運動に変換している。それ以外の駆動力伝達方法としては、固定系に永久磁石を配置し、光ヘッド202に配置したコイルに電流を流して直線方向に移動させるリニアモータ方式を使う場合もある。

【0046】回転モータ、リニアモータいずれの方式でも、基本的には送りモータに電流を流して光ヘッド202移動用の駆動力を発生させている。この駆動用電流は送りモータ駆動回路216から供給される。

【記録時の光量】＞【消去時の光量】＞【再生時の光量】…(1)  
の関係が成り立ち、光磁気方式を用いた情報記憶媒体に

【記録時の光量】 【消去時の光量】＞【再生時の光量】…(2)  
の関係がある。光磁気方式の場合では、記録／消去時には情報記憶媒体201に加える外部磁場（図示せず）の極性を変えて記録と消去の処理を制御している。情報再生時では、情報記憶媒体201上に一定の光量を連続的に照射している。

【0051】新たな情報を記録する場合には、この再生時の光量の上にパルス状の断続的光量を上乘せる。半導体レーザ素子が大きな光量でパルス発光した時に情報記憶媒体201の光反射性記録膜が局所的に光学的変化または形状変化を起こし、記録マークが形成される。すでに記録されている領域の上に重ね書きする場合も同様に半導体レーザ素子をパルス発光させる。

【0052】すでに記録されている情報を消去する場合には、再生時よりも大きな一定光量を連続照射する。連続的に情報を消去する場合にはセクタ単位など特定周期毎に照射光量を再生時に戻し、消去処理と平行して間欠的に情報再生を行う。これにより、間欠的に消去するトラックのトラック番号やアドレスを再生することで、消去トラックの誤りがないことを確認しながら消去処理を

【0047】＜各制御回路の機能＞

＜集光スポットトレース制御＞フォーカスずれ補正あるいはトラックずれ補正を行うため、フォーカス・トラックエラー検出回路217の出力信号（検出信号）に応じて光ヘッド202内の対物レンズアクチュエータ（図示せず）に駆動電流を供給する回路が、対物レンズアクチュエータ駆動回路218である。この駆動回路218は、高い周波数領域まで対物レンズ移動を高速応答させるため、対物レンズアクチュエータの周波数特性に合わせた特性改善用の位相補償回路を、内部に有している。

【0048】対物レンズアクチュエータ駆動回路218では、制御部220の命令に応じて、

(イ) フォーカス／トラックずれ補正動作（フォーカス／トラックループ）のオン／オフ処理と；

(ロ) 情報記憶媒体201の垂直方向（フォーカス方向）へ対物レンズを低速で移動させる処理（フォーカス／トラックループオフ時に実行）と；

(ハ) キックパルスを用いて、対物レンズを情報記憶媒体201の半径方向（トラックを横切る方向）にわずかに動かして、集光スポットを隣のトラックへ移動させる処理とが行なわれる。

【0049】＜レーザ光量制御＞

＜再生と記録／消去の切り替え処理＞再生と記録／消去の切り替えは情報記憶媒体201上に照射する集光スポットの光量を変化させて行う。

【0050】相変化方式を用いた情報記憶媒体に対しては、一般的に

【再生時の光量】…(1)

に対しては、一般的に

【再生時の光量】…(2)

を行っている。

【0053】＜レーザ発光制御＞図示していないが、光ヘッド202内には、半導体レーザ素子の発光量を検出するための光検出器が内蔵されている。レーザ駆動回路205では、その光検出器出力（半導体レーザ素子発光量の検出信号）と記録・再生・消去制御波形発生回路206から与えられる発光基準信号との差を取り、その結果に基づき、半導体レーザへの駆動電流をフィードバック制御している。

【0054】＜機構部分の制御系に関する諸動作＞＜起動制御＞

情報記憶媒体（光ディスク）201が回転テーブル221上に装着され、起動制御が開始されると、以下の手順に従った処理が行われる。

(1) 制御部220からスピンドルモータ駆動回路215に目標回転数が伝えられ、スピンドルモータ駆動回路215からスピンドルモータ204に駆動電流が供給されて、スピンドルモータ204が回転を開始する。

(2) 同時に制御部220から送りモータ駆動回路21

6に対してコマンド（実行命令）が出され、送りモータ駆動回路216から光ヘッド駆動機構（送りモータ）203に駆動電流が供給されて、光ヘッド202が情報記憶媒体10の最内周位置に移動する。その結果、情報記憶媒体201の情報が記録されている領域を越えてさらに内周部に光ヘッド202が来ていることを確認する。

（3）スピンドルモータ204が目標回転数に到達すると、そのステータス（状況報告）が制御部220に出される。

（4）制御部220から記録・再生・消去制御波形発生回路206に送られた再生光量信号に合わせて半導体レーザ駆動回路205から光ヘッド202内の半導体レーザ素子に電流が供給されて、レーザ発光が開始する。

【0055】なお、情報記憶媒体（光ディスク）201の種類によって再生時の最適照射光量が異なる。起動時には、そのうちの最も照射光量の低い値に対応した値に、半導体レーザ素子に供給される電流値を設定する。

（5）制御部220からのコマンドに従って、光ヘッド202内の対物レンズ（図示せず）を情報記憶媒体201から最も遠ざけた位置にずらし、ゆっくりと対物レンズを情報記憶媒体201に近付けるよう対物レンズアクチュエータ駆動回路218が対物レンズを制御する。

（6）同時にフォーカス・トラックエラー検出回路217でフォーカスずれ量をモニターし、焦点が合う位置近傍に対物レンズがきたときにステータスを出して、「対物レンズが合焦点位置近傍にきた」ことを制御部220に通知する。

（7）制御部220では、その通知をもらうと、対物レンズアクチュエータ駆動回路218に対して、フォーカスループをオンにするようコマンドを出す。

（8）制御部220は、フォーカスループをオンにしたまま送りモータ駆動回路216にコマンドを出して、光ヘッド202をゆっくり情報記憶媒体201の外周部方向へ移動させる。

（9）同時に光ヘッド202からの再生信号をモニターし、光ヘッド202が情報記憶媒体201上の記録領域に到達したら、光ヘッド202の移動を止め、対物レンズアクチュエータ駆動回路218に対してトラックループをオンさせるコマンドを出す。

（10）続いて情報記憶媒体201の内周部に記録されている「再生時の最適光量」および「記録／消去時の最適光量」が再生され、その情報が制御部220を経由して半導体メモリ219に記録される。

（11）さらに制御部220では、その「再生時の最適光量」に合わせた信号を記録・再生・消去制御波形発生回路206に送り、再生時の半導体レーザ素子の発光量を再設定する。

（12）そして、情報記憶媒体201に記録されている「記録／消去時の最適光量」に合わせて記録／消去時の半導体レーザ素子の発光量が設定される。

【0056】＜アクセス制御＞情報記憶媒体201に記録されたアクセス先情報が再生情報記憶媒体201上のどの場所に記録されまたどのような内容を持っているかについての情報は、情報記憶媒体201の種類により異なる。たとえばDVDディスクでは、この情報は、情報記憶媒体201内のディレクトリ管理領域またはナビゲーションパックなどに記録されている。

【0057】ここで、ディレクトリ管理領域は、通常は情報記憶媒体201の内周領域または外周領域にまわって記録されている。また、ナビゲーションパックは、MPEG2のPS（プログラムストリーム）のデータ構造に準拠したVOBS（ビデオオブジェクトセット）中のVOBU（ビデオオブジェクトユニット）というデータ単位の中に含まれ、次の映像がどこに記録してあるかの情報を記録している。

【0058】特定の情報を再生あるいは記録／消去したい場合には、まず上記の領域内の情報を再生し、そこで得られた情報からアクセス先を決定する。

【0059】＜粗アクセス制御＞制御部220ではアクセス先の半径位置を計算で求め、現状の光ヘッド202位置との間の距離を割り出す。

【0060】光ヘッド202移動距離に対して最も短時間で到達できる速度曲線情報が事前に半導体メモリ219内に記録されている。制御部220は、その情報を読み取り、その速度曲線に従って以下の方法で光ヘッド202の移動制御を行う。

【0061】すなわち、制御部220から対物レンズアクチュエータ駆動回路218に対してコマンドを出してトラックループをオフした後、送りモータ駆動回路216を制御して光ヘッド202の移動を開始させる。

【0062】集光スポットが情報記憶媒体201上のトラックを横切ると、フォーカス・トラックエラー検出回路217内でトラックエラー検出信号が発生する。このトラックエラー検出信号を用いて情報記憶媒体201に対する集光スポットの相対速度を検出することができる。

【0063】送りモータ駆動回路216では、このフォーカス・トラックエラー検出回路217から得られる集光スポットの相対速度と制御部220から逐一送られる目標速度情報との差を演算し、その結果で光ヘッド駆動機構（送りモータ）203への駆動電流にフィードバック制御をかけながら、光ヘッド202を移動させる。前記＜光ヘッド移動機構＞の項で述べたように、ガイドシャフトとブッシュあるいはベアリング間には常に摩擦力が働いている。光ヘッド202が高速に移動している時は動摩擦が働くが、移動開始時と停止直前には光ヘッド202の移動速度が遅いため静止摩擦が働く。この静止摩擦が働く時には（特に停止直前には）、相対的に摩擦力が増加している。この摩擦力増加に対処するため、光ヘッド駆動機構（送りモータ）203に供給される電流

が大きくなるように、制御部 220 からのコマンドによって制御系の増幅率（ゲイン）を増加させる。

【0064】＜密アクセス制御＞光ヘッド 202 が目標位置に到達すると、制御部 220 から対物レンズアクチュエータ駆動回路 218 にコマンドを出して、トラックループをオンさせる。

【0065】集光スポットは、情報記憶媒体 201 上のトラックに沿ってトレースしながら、その部分のアドレスまたはトラック番号を再生する。

【0066】そこでアドレスまたはトラック番号から 10 現在の集光スポット位置を割り出し、到達目標位置からの誤差トラック数を制御部 220 内で計算し、集光スポットの移動に必要なトラック数を対物レンズアクチュエータ駆動回路 218 に通知する。

【0067】対物レンズアクチュエータ駆動回路 218 内で 1 組のキックパルスを発生させると、対物レンズは情報記憶媒体 201 の半径方向にわずかに動いて、集光スポットが隣のトラックへ移動する。

【0068】対物レンズアクチュエータ駆動回路 218 内では、一時的にトラックループをオフさせ、制御部 20 220 からの情報に合わせた回数のキックパルスを発生させた後、再びトラックループをオンさせる。

【0069】密アクセス終了後、制御部 220 は集光スポットがトレースしている位置の情報（アドレスまたはトラック番号）を再生し、目標トラックにアクセスしていることを確認する。

【0070】＜連続記録／再生／消去制御＞フォーカス・トラックエラー検出回路 217 から出力されるトラックエラー検出信号は、送りモータ駆動回路 216 に入力されている。上述した「起動制御時」と「アクセス制御時」には、送りモータ駆動回路 216 内では、トラックエラー検出信号を使用しないように制御部 220 により制御されている。

【0071】アクセスにより集光スポットが目標トラックに到達したことを確認した後、制御部 220 からのコマンドにより、モータ駆動回路 216 を経由してトラックエラー検出信号の一部が光ヘッド駆動機構（送りモータ）203 への駆動電流として供給される。連続に再生または記録／消去処理を行っている期間中、この制御は継続される。

【0072】情報記憶媒体 201 の中心位置は回転テーブル 221 の中心位置とわずかにずれた偏心を持って装着されている。トラックエラー検出信号の一部を駆動電流として供給すると、偏心に合わせて光ヘッド 202 全体が微動する。

【0073】また長時間連続して再生または記録／消去処理を行うと、集光スポット位置が徐々に外周方向または内周方向に移動する。トラックエラー検出信号の一部を光ヘッド移動機構（送りモータ）203 への駆動電流として供給した場合には、それに合わせて光ヘッド 20 50

2 が徐々に外周方向または内周方向に移動する。

【0074】このようにして対物レンズアクチュエータのトラックずれ補正の負担を軽減することにより、トラックループを安定化させることができる。

【0075】＜終了制御＞一連の処理が完了し、動作を終了させる場合には以下の手順に従って処理が行われる。

（１）制御部 220 から対物レンズアクチュエータ駆動回路 218 に対して、トラックループをオフさせるコマンドが出される。

（２）制御部 220 から対物レンズアクチュエータ駆動回路 218 に対して、フォーカスループをオフさせるコマンドが出される。

（３）制御部 220 から記録・再生・消去制御波形発生回路 206 に対して、半導体レーザ素子の発光を停止させるコマンドが出される。

（４）スピンドルモータ駆動回路 215 に対して、基準回転数として 0 が通知される。

【0076】＜情報記憶媒体への記録信号／再生信号の流れ＞

＜再生時の信号の流れ＞

＜２値化・PLL 回路＞先の＜光ヘッド 202 による信号検出＞の項で述べたように、情報記憶媒体（光ディスク）201 の光反射膜または光反射性記録膜からの反射光量変化を検出して、情報記憶媒体 201 上の信号を再生する。アンプ 213 で得られた信号は、アナログ波形を有している。２値化回路 212 は、コンパレータを用いて、そのアナログ信号を“１”および“０”からなる２値のデジタル信号に変換する。

【0077】こうして２値化回路 212 で得られた再生信号から、PLL 回路 211 において、情報再生時の基準信号が取り出される。すなわち、PLL 回路 211 は周波数可変の発振器を内蔵しており、この発振器から出力されるパルス信号（基準クロック）と２値化回路 212 出力信号との間で周波数および位相の比較が行われる。この比較結果を発振器出力にフィードバックすることで、情報再生時の基準信号を取り出している。

【0078】＜信号の復調＞復調回路 210 は、変調された信号と復調後の信号との間の関係を示す変換テーブルを内蔵している。復調回路 210 は、PLL 回路 211 で得られた基準クロックに合わせて変換テーブルを参照しながら、入力信号（変調された信号）を元の信号（復調された信号）に戻す。復調された信号は、半導体メモリ 219 に記録される。

【0079】＜エラー訂正処理＞エラー訂正回路 209 の内部では、半導体メモリ 219 に保存された信号に対し、内符号 P I と外符号 P O を用いてエラー箇所を検出し、エラー箇所のポインタフラグを立てる。その後、半導体メモリ 219 から信号を読み出しながらエラーポインタフラグに合わせて逐次エラー箇所の信号を訂正した



後、再度半導体メモリ 219 に訂正後情報を記録する。

【0080】情報記憶媒体 201 から再生した情報を再生信号 c として外部に出力する場合には、半導体メモリ 219 に記録されたエラー訂正後情報から内符号 P I および外符号 P O をはずして、バスライン 224 を経由してデータ I / O インターフェイス 222 へ転送する。データ I / O インターフェイス 222 が、エラー訂正回路 209 から送られてきた信号を再生信号 c として出力する。

【0081】＜情報記憶媒体 201 に記録される信号形式＞情報記憶媒体 201 上に記録される信号に対しては、以下のことを満足することが要求される：

(イ) 情報記憶媒体 201 上の欠陥に起因する記録情報エラーの訂正を可能とすること；

(ロ) 再生信号の直流成分を“0”にして再生処理回路の簡素化を図ること；

(ハ) 情報記憶媒体 201 に対してできるだけ高密度に情報を記録すること。

【0082】以上の要求を満足するため、情報記録再生部（物理系ブロック）では、「エラー訂正機能の付加」と「記録情報に対する信号変換（信号の変復調）」とを行っている。

【0083】＜記録時の信号の流れ＞

＜エラー訂正コード ECC 付加処理＞エラー訂正コード ECC 付加処理について説明する。情報記憶媒体 201 に記録したい情報 d が、生信号の形で、データ I / O インターフェイス 222 に入力される。この記録信号 d は、そのまま半導体メモリ 219 に記録される。その後、ECC エンコーダ 208 内において、以下のような ECC の付加処理が実行される。

【0084】以下、積符号を用いた ECC 付加方法の具体例について説明を行なう。

【0085】記録信号 d は、半導体メモリ 219 内で、172 バイト毎に 1 行ずつ順次並べられ、192 行で 1 組の ECC ブロックとされる（172 バイト行×192 バイト列でおよそ 32 k バイトの情報量になる）。この「172 バイト行×192 バイト列」で構成される 1 組の ECC ブロック内の生信号（記録信号 d）に対し、172 バイトの 1 行毎に 10 バイトの内符号 P I を計算して半導体メモリ 219 内に追加記録する。さらにバイト単位の 1 列毎に 16 バイトの外符号 P O を計算して半導体メモリ 219 内に追加記録する。

【0086】そして、10 バイトの内符号 P I を含めた 12 行分（12×（172+10）バイト）と外符号 P O の 1 行分（1×（172+10）バイト）の合計 2366 バイト（＝（12+1）×（172+10））を単位として、エラー訂正コード ECC 付加処理のなされた情報が、情報記憶媒体 10 の 1 セクタ内に記録される。

【0087】ECC エンコーダ 208 は、内符号 P I と外符号 P O の付加が完了すると、その情報を一旦半導体

メモリ 219 へ転送する。情報記憶媒体 201 に情報が記録される場合には、半導体メモリ 219 から、1 セクタ分の 2366 バイトずつの信号が、変調回路 207 へ転送される。

【0088】＜信号変調＞再生信号の直流成分（DSV : Digital Sum Value または Digital Sum Variation）を“0”に近付け、情報記憶媒体 201 に対して高密度に情報を記録するため、信号形式の変換である信号変調を変調回路 207 内で行う。変調回路 207 および復調回路 210 は、それぞれ、元の信号と変調後の信号との間の関係を示す変換テーブルを内蔵している。

【0089】変調回路 207 は、ECC エンコーダ 208 から転送されてきた信号を所定の変調方式に従って複数ビット毎に区切り、上記変換テーブルを参照しながら、別の信号（コード）に変換する。たとえば、変調方式として 8/16 変調（RL1（2, 10）コード）を用いた場合には、変換テーブルが 2 種類存在し、変調後の直流成分（DSV）が 0 に近付くように逐一参照用変換テーブルを切り替えている。

【0090】＜記録波形発生＞情報記憶媒体（光ディスク）201 に記録マークを記録する場合、一般的には、記録方式として、次のものが採用される：

【マーク長記録方式】記録マークの前端位置と後端末位置に“1”がくるもの。

【0091】【マーク間記録方式】記録マークの中心位置が“1”の位置と一致するもの。なお、マーク長記録を採用する場合、比較的長い記録マークを形成する必要がある。この場合、一定期間以上記録用の大きな光量を情報記憶媒体 10 に照射し続けると、情報記憶媒体 201 の光反射性記録膜の蓄熱効果によりマークの後部のみ幅が広がり、「雨だれ」形状の記録マークが形成されてしまう。この弊害を除去するため、長さの長い記録マークを形成する場合には、記録用レーザ駆動信号を複数の記録パルスに分割したり、記録用レーザの記録波形を階段状に変化させる等の対策が採られる。

【0092】記録・再生・消去制御波形発生回路 206 内では、変調回路 207 から送られてきた記録信号に応じて、上述のような記録波形を作成し、この記録波形を持つ駆動信号を、半導体レーザ駆動回路 205 に送っている。

【0093】次に、上記の記録再生装置におけるブロック間の信号の流れをまとめておく。

1) 記録すべき生信号の情報記録再生装置への入力  
情報記録再生装置内の情報記憶媒体（光ディスク）201 に対する情報の記録処理と再生処理に関連する部分をまとめた情報記録再生部（物理系ブロック）内の構成を例示している。PC（パーソナルコンピュータ）や EWS（エンジニアリングワークステーション）などのホストコンピュータから送られて来た記録信号 d はデータ I / O インターフェイス 222 を経由して情報記録再生部



(物理系ブロック) 101 内に入力される。

【0094】2) 記録信号dの2048バイト毎の分割処理

データI/Oインターフェイス222では記録信号dを時系列的に2048バイト毎に分割し、データID510などを付加した後、スクランブル処理を行う。その結果得られた信号はECCエンコーダ208に送られる。

【0095】3) ECCブロックの作成

ECCエンコーダ208では、記録信号に対してスクランブルを掛けた後の信号を16組集めて「172バイト×192列」のブロックを作った後、内符号PI(内部パリティコード)と外符号PO(外部パリティコード)の付加を行う。

4) インターリーブ処理

ECCエンコーダ208ではその後、外符号POのインターリーブ処理を行う。

【0096】5) 信号変調処理

変調回路207では、外符号POのインターリーブ処理した後の信号を変調後、同期コードを付加する。

【0097】6) 記録波形作成処理

その結果得られた信号に対応して記録・再生・消去制御波形発生回路206で記録波形が作成され、この記録波形がレーザ駆動回路205に送られる。

【0098】情報記憶媒体(DVD-RAMディスク)

201では「マーク長記録」の方式が採用されているため、記録パルスの立ち上がりタイミングと記録パルスの立ち下がりタイミングが変調後信号の“1”のタイミングと一致する。

【0099】7) 情報記憶媒体(光ディスク)10への記録処理

光ヘッド202から照射され、情報記憶媒体(光ディスク)201の記録膜上で集光するレーザ光の光量が断続的に変化して情報記憶媒体(光ディスク)201の記録膜上に記録マークが形成される。

【0100】図4は、たとえばDVD-RAMディスク等に対する論理ブロック番号の設定動作の一例を説明するフローチャートである。図3も参照しながら説明する。

【0101】ターンテーブル221に情報記憶媒体(光ディスク)201が装填されると(ステップST131)、制御部220はスピンドルモータ204の回転を開始させる(ステップST132)。

【0102】情報記憶媒体(光ディスク)201回転が開始したあと光学ヘッド202のレーザ発光が開始され(ステップST133)、光ヘッド202内の対物レンズのフォーカスサーボループがオンされる(ステップST134)。

【0103】レーザ発光後、制御部220は送りモータ203を作動させて光ヘッド202を回転中の情報記憶媒体(光ディスク)201のLead-in Area 607に移動

させる(ステップST135)。そして光ヘッド202内の対物レンズのトラックサーボループがオンされる(ステップST136)。

【0104】トラックサーボがアクティブになると、光ヘッド202は情報記憶媒体(光ディスク)201のLead-in Area 607内のControl data Zone 655(後述する図9参照)の情報を再生する(ステップST137)。このControl data Zone 655内のBook type and Part version 671を再生することで、現在回転駆動されている情報記憶媒体(光ディスク)201が記録可能な媒体(DVD-RAMディスクまたはDVD-Rディスク)であると確認される(ステップST138)。ここでは、媒体10がDVD-RAMディスクであるとする。

【0105】情報記憶媒体(光ディスク)201がDVD-RAMディスクであると確認されると、再生対象のControl data Zone 655から、再生・記録・消去時の最適光量(半導体レーザの発光パワーおよび発光期間またはデューティ比等)の情報が再生される(ステップST139)。

【0106】続いて、制御部220は、現在回転駆動中のDVD-RAMディスク201に欠陥がないものとして、物理セクタ番号と論理セクタ番号との変換表(後述する図11参照)を作成する(ステップST140)。

【0107】この変換表が作成されたあと、制御部220は情報記憶媒体(光ディスク)201のLead-in Area 607内の欠陥管理エリアDMA1/DMA2 663およびLead-out Area 609内の欠陥管理エリアDMA3/DMA4 691を再生して、その時点における情報記憶媒体(光ディスク)201の欠陥分布を調査する(ステップST141)。

【0108】上記欠陥分布調査により情報記憶媒体(光ディスク)201上の欠陥分布が判ると、制御部220は、ステップST140で「欠陥がない」として作成された変換表を、実際の欠陥分布に応じて修正する(ステップST142)。具体的には、欠陥があると判明したセクタそれぞれの部分で、物理セクタ番号PSNに対応していた論理セクタ番号LSNがシフトされる。

【0109】図5は、たとえばDVD-RAMディスク等における欠陥処理動作(ドライブ側の処理)の一例を説明するフローチャートである。以下図3も参照しながら、図5のフローチャートを説明する。

【0110】最初にたとえば制御部220内のMPUに対して、現在ドライブに装填されている媒体(たとえばDVD-RAMディスク)201に記録する情報の先頭論理ブロック番号LBNおよび記録情報のファイルサイズを指定する(ステップST151)。

【0111】すると、制御部220のMPUは、指定された先頭論理ブロック番号LBNから、記録する情報の先頭論理セクタ番号LSNを算出する(ステップST1

52)。こうして算出された先頭論理セクタ番号LSNおよび指定されたファイルサイズから、情報記憶媒体(光ディスク)201への書込論理セクタ番号が定まる。

【0112】次に制御部220のMPUはDVD-RAMディスク201の指定アドレスに記録情報ファイルを書き込むとともに、ディスク201上の欠陥を調査する(ステップST153)。

【0113】このファイル書込中に欠陥が検出されなければ、記録情報ファイルが所定の論理セクタ番号に異常なく(つまりエラーが発生せずに)記録されたことになり、記録処理が正常に完了する(ステップST155)。

【0114】一方、ファイル書込中に欠陥が検出されれば、所定の交替処理(たとえばニア交替処理(Linea  
r Replacement Algorithm)が実行される(ステップST156)。

【0115】この交替処理後、新たに検出された欠陥がディスクのLead-in Area 607のDMA1/DMA2 663およびLead-out Area 609のDMA3/DMA4 691に追加登録される(後述する図9と図10を参照)(ステップST157)。情報記憶媒体(光ディスク)201へのDMA1/DMA2 663およびDMA3/DMA4 691の追加登録後、このDMA1/DMA2 663およびDMA3/DMA4 691の登録内容に基づいて、図4のステップST140で作成した変換表の内容が修正される(ステップST158)。

【0116】図6は、本発明の実施例説明に必要なアプリケーション、ファイルシステム、ODDの関係を示す。

【0117】図6の情報記録再生装置(ODD:Optical Disk Drive)3はPCシステム(後述)の情報記録再生装置140と同一のものを示している。

【0118】図6のFile System 2と録画再生アプリケーションソフト(録再アプリ)1の両者のプログラムは通常はPCシステム中のHDD121内に保存されており、File System 2はパーソナルコンピュータシステム110の起動時にメインメモリー112に転送され、また録画再生アプリケーションソフトプログラム使用時に録画再生アプリケーションソフト(録再アプリ)1のプログラムがメインメモリー112上に転送される。

【0119】図7に情報再生装置を用いたパーソナルコンピュータシステム構成を示す。  
A…一般的なパーソナルコンピュータシステム110の内部構造説明。

【0120】A-1…メインCPUに直接接続されるデータ/アドレスライン説明。

【0121】パーソナルコンピュータ110内のメインCPU111はメインメモリー112との間の情報入出力を直接行うメモリーデータライン114と、メインメモ

リ112内に記録されている情報のアドレスを指定するメモリアドレスライン113を持ち、メインメモリー112内にロードされたプログラムに従ってメインCPU111の実行処理が進む。更にメインCPU111はI/Oデータライン146を通して各種コントローラーとの情報転送を行うと共に、I/Oアドレスライン145のアドレス指定により情報転送先コントローラーの指定と転送される情報内容の指定を行っている。

【0122】A-2…CRTディスプレイコントロールとキーボードコントロール説明。

【0123】CRTディスプレイ116の表示内容制御を行うLCDコントローラー115はメモリーデータライン114を介しメインCPU111間の情報交換を行っている。更に高解像度・豊富な表現色を実現するためCRTディスプレイ116専用のメモリーとしてビデオRAM117を備えている。LCDコントローラー115はメモリーデータライン114を経由してメインメモリー112から直接情報を入力し、CRTディスプレイ116に表示する事も出来る。

【0124】キーボード119から入力されたテンキー情報はキーボードコントローラー118で変換されてI/Oデータライン146を経由してメインCPU111に入力される。

【0125】A-3…内蔵型HDD/情報再生装置の制御システム説明。

【0126】パーソナルコンピュータ110内に内蔵されたHDD121やCD-ROMドライブ・DVD-ROMドライブなどの光学式の情報再生装置122にはIDEインターフェースが使われる場合が多い。HDD121や情報再生装置122からの再生情報、またはHDD121への記録情報はIDEコントローラー120を経由してI/Oデータライン146に転送される。

【0127】特にブートディスクとしてHDD121を用いた場合にはパーソナルコンピュータシステム110起動時にメインCPU111がHDD121にアクセスし、必要な情報がメインメモリー112に転送される。  
A-4…外部とのシリアル/パラレルインターフェース説明。

【0128】パーソナルコンピュータシステム110の外部機器との情報転送にはシリアルラインとパラレルラインがそれぞれ用意されている。

【0129】“セントロ”に代表されるパラレルラインを制御するパラレルI/Fコントローラー123は例えばネットワークを介さずに直接プリンター124やスキャナー125を駆動する場合に使われる。スキャナー125から転送される情報はパラレルI/Fコントローラー123を経由してI/Oデータライン146に転送される。またI/Oデータライン146上で転送される情報はパラレルI/Fコントローラー123を経由してプリンター124へ転送される。

【0130】例えばCRTディスプレイ116に表示されているビデオRAM117内の情報やメインメモリ112内の特定情報をプリントアウトする場合、これらの情報をメインCPU111を介してI/Oデータライン146に転送した後、パラレルI/Fコントローラ123でプロトコル変換してプリンター124に出力される。

【0131】外部に出力されるシリアル情報に関してはI/Oデータライン146で転送された情報がシリアルI/Fコントローラ130でプロトコル変換され、例えばRS-232C信号eとして出力される。

【0132】A-5…機能拡張用バスライン説明。

【0133】パーソナルコンピュータシステム110は機能拡張用に各種のバスラインを持っている。デスクトップのパーソナルコンピュータではバスラインとしてPCIバス133とEISAバス126を持っている場合が多い。各バスラインはPCIバスコントローラ143またはEISAバスコントローラ144を介してI/Oデータライン146とI/Oアドレスライン145に接続されている。バスラインに接続される各種ボードはEISAバス126専用ボードとPCIバス133専用ボードに分かれている。比較的PCIバス133の方が高速転送に向くため図ではPCIバス133に接続しているボードの数が多くなっているが、それに限らずEISAバス126専用ボードを使用すれば例えばLANボード139やSCSIボード138をEISAバス126に接続する事も可能である。

【0134】A-6…バスライン接続の各種ボードの概略機能説明。

【0135】・サウンドブラスターボード127：マイク128から入力された音声信号はサウンドブラスターボード127によりデジタル情報に変換され、EISAバス126、I/Oデータライン146を経由してメインメモリ112やHDD121、情報記録再生装置140に入力され、加工される。また音楽や音声を楽しみたい場合にはHDD121、141や情報再生装置122、情報記録再生装置140内に記録されているファイル名をユーザーが指定する事によりデジタル音源信号がI/Oデータライン146、EISAバス126を経由してサウンドブラスターボード127に転送され、アナログ信号に変換された後、スピーカー129から出力される。

【0136】・専用DSP137：ある特殊な処理を高速で実行したい場合、その処理専用のDSP137ボードをバスラインに接続する事が出来る。

【0137】・SCSIインターフェース：外部記憶装置との間の情報入出力にはSCSIインターフェースを利用する場合が多い。情報バックアップ用MT（磁気テープ）142、外部据置き型HDD141、情報記録再生装置140等の外部記憶装置との間で入出力されるS

CSIフォーマット情報をPCIバス133またはEISAバス126に転送するためのプロトコル変換や転送情報フォーマット変換をSCSIボード138内で実行している。

【0138】・情報圧縮・伸長専用ボード：音声、静止画、動画像などマルチメディア情報は情報圧縮してHDD121、141や情報記録再生装置140（情報再生装置122）に記録される。HDD121、141や情報記録再生装置140、情報再生装置122に記録されている情報を伸長してCRTディスプレイ116に表示したり、スピーカー129を駆動する。またマイク128から入力された音声信号などを情報圧縮してHDD121、141や情報記録再生装置140に記録する。

【0139】この情報の圧縮・伸長機能を各種専用ボードが受け持っている。音楽・音声信号の圧縮・伸長を音声符号化・復号化ボード136で行い、動画像（ビデオ映像）の圧縮・伸長をMPEGボード134で行い、静止画像の圧縮・伸長をJPEGボード135で行っている。

【0140】B…パーソナルコンピュータの外部ネットワークとの接続説明。

【0141】B-1…電話回線を用いたネットワーク接続説明。

【0142】電話回線fを経由して外部に情報転送したい場合には、モデム131を用いる。すなわち希望の相手先へ電話接続するには図示して無いがNCU（Network Control Unit）が電話回線fを介して電話交換機に相手先電話番号を伝達する。電話回線が接続されると、シリアルI/Fコントローラ130がI/Oデータライン146上の情報に対して転送情報フォーマット変換とプロトコル変換を行い、その結果得られるデジタル信号のRS-232C信号をモデム131でアナログ信号に変換して電話回線fに転送される。

【0143】B-2…IEEE1394を用いたネットワーク接続説明。

【0144】音声、静止画、動画像などマルチメディア情報を外部装置（図示して無い）へ転送する場合にはIEEE1394インターフェースが適している。

【0145】動画や音声では一定時間内に必要な情報を送り切れないと画像の動きがギクシャクしたり、音声途切れたりする。その問題を解決するためIEEE1394では125μs毎にデータ転送が完了するisochronous転送方式を採用している。IEEE1394ではこのisochronous転送と通常の非同期転送の混在も許しているが、1サイクルの非同期転送時間は最大63.5μsと上限が決められている。この非同期転送時間が長過ぎるとisochronous転送を保証できなくなるためである。IEEE1394ではSCSIのコマンド（命令セット）をそのまま使用する事が出来る。

【0146】PCIバス133を伝わって来た情報に対

し、isochronous 転送用の情報フォーマット変換やプロトコル変換、ノード設定のようなトポロジーの自動設定などの処理をIEEE1394 I/Fボード132が行っている。

【0147】このようにパーソナルコンピューターシステム110内で持っている情報をIEEE1394信号gとして外部に転送するだけで無く、同様に外部から送られて来るIEEE1394信号gを変換してPCIバス133に転送する働きもIEEE1394 I/Fボード132は持っている。

【0148】B-3…LANを用いたネットワーク接続説明。

【0149】企業内や官庁・学校など特定地域内のローカルエリア情報通信には図示して無いがLANケーブルを媒体としてLAN信号hの入出力を行っている。

【0150】LANを用いた通信のプロトコルとしてTCP/IP、NetBEUIなどが存在し、各種プロトコルに応じて独自のデータパケット構造（情報フォーマット構造）を持つ。PCIバス133上で転送される情報に対する情報フォーマット変換や各種プロトコルに応じた外部との通信手続き処理などをLANボード139が行う。

【0151】例としてHDD121内に記録してある特定ファイル情報をLAN信号hに変換して外部のパーソナルコンピューターやEWS、あるいはネットワークサーバー（図示して無い）に転送する場合の手続きと情報転送経路について説明する。IDEコントローラー120の制御によりHDD121内に記録されているファイルディレクトリーを出力させ、その結果のファイルリストをメインCPU111がメインメモリ112に記録すると共に、CRTディスプレイ116に表示させる。ユーザーが転送したいファイル名をキーボード119入力するとその内容がキーボードコントローラー118を介してメインCPU111に認識される。メインCPU111がIDEコントローラー120に転送するファイル名を通知すると、HDDが内部の情報記録場所を判定してアクセスし、再生情報がIDEコントローラー120を経由してI/Oデータライン146に転送される。I/Oデータライン146からPCIバスコントローラー143にファイル情報が入力された後、PCIバス133を経由してLANボード139へ転送される。LANボード139では一連の通信手続きにより転送先とセッションを張った後、PCIバス133からファイル情報を入力し、伝送するプロトコルに従ったデータパケット構造に変換後LAN信号hとして外部へ転送する。

【0152】C…情報再生装置または情報記憶再生装置（光ディスク装置）からの情報転送説明。

【0153】C-1…標準的なインターフェースと情報転送経路説明。

【0154】CD-ROM、DVD-ROMなどの再生

専用光ディスク装置である情報再生装置122やDVD-RAM、PD、MOなどの記録再生可能な光ディスクである情報記録再生装置140をパーソナルコンピューターシステム110内に組み込んで使用する場合、標準的なインターフェースとして“IDE”“SCSI”

“IEEE1394”などが存在する。

【0155】一般的にはPCIバスコントローラー143やEISAバスコントローラー144は内部にDMAを持っている。DMAの制御によりメインCPU111を介在させる事無く各ブロック間で直接情報を転送する事が出来る。

【0156】例えば情報記録再生装置140の情報をMPEGボード134に転送する場合メインCPU111からの処理はPCIバスコントローラー143へ転送命令を与えるだけで、情報転送管理はPCIバスコントローラー内のDMAに任せる。その結果、実際の情報転送時にはメインCPUは情報転送処理に悩殺される事無く並列して他の処理を実行できる。

【0157】同様に情報再生装置122内に記録されている情報をHDD141へ転送する場合もメインCPU111はPCIバスコントローラー143またはIDEコントローラー120へ転送命令を出すだけで、後の転送処理管理をPCIバスコントローラー143内のDMAまたはIDEコントローラー120内のDMAに任せている。

【0158】C-2…認証（authentication）機能説明。

【0159】情報記録再生装置140もしくは情報再生装置122に関する情報転送処理には上述したようにPCIバスコントローラー143内のDMA、EISAバスコントローラー144内のDMAまたはIDEコントローラー120内のDMAが管理を行っているが、実際の転送処理自体は情報記録再生装置140もしくは情報再生装置122が持つ認証（authentication）機能部が実際の転送処理を実行している。

【0160】DVDvideo、DVD-ROM、DVD-RなどのDVDシステムではビデオ、オーディオのビットストリームはMPEG2 Program streamフォーマットで記録されており、オーディオストリーム、ビデオストリーム、サブピクチャーストリーム、プライベートストリームなどが混在して記録されている。情報記録再生装置140は情報の再生時にプログラムストリーム（Program stream）からオーディオストリーム、ビデオストリーム、サブピクチャーストリーム、プライベートストリームなどを分離抽出し、メインCPU111を介在させる事無くPCIバス133を介して直接音声符号化復号化ボード136、MPEGボード134あるいはJPEGボード135に転送する。

【0161】同様に情報再生装置122もそこから再生されるプログラムストリーム（Program stream）を各

種のストリーム情報に分離抽出し、個々のストリーム情報を I/O データライン 146、PCI バス 133 を経由して直接（メイン CPU 111 を介在させる事無く）音声符号化復号化ボード 136、MPEG ボード 134 あるいは JPEG ボード 135 に転送する。

【0162】情報記録再生装置 140 や情報再生装置 122 と同様音声符号化復号化ボード 136、MPEG ボード 134 あるいは JPEG ボード 135 自体にも内部に認証（authentication）機能を持っている。情報転送に先立ち、PCI バス 133（および I/O データライン 146）を介して情報記録再生装置 140 や情報再生装置 122 と音声符号化復号化ボード 136、MPEG ボード 134、JPEG ボード 135 間で互いに認証し合う。相互認証が完了すると情報記録再生装置 140 や情報再生装置 122 で再生されたビデオストリーム情報は MPEG ボード 134 だけに情報転送する。同様にオーディオストリーム情報は音声符号化復号化ボード 136 のみに転送される。また静止画ストリームは JPEG ボード 135 へ、プライベートストリームやテキスト情報はメイン CPU 111 へ送られる。

【0163】次に、本発明の具体的実施例を説明するに当たり、情報記憶媒体として DVD-RAM ディスクを使用し、File System として UDF を利用した場合の実施例説明を行う。

【0164】本発明の具体的実施例を説明する前に前提とした DVD-RAM ディスクについての説明を行う。

【0165】図 8 は、DVD-RAM ディスク内の概略記録内容のレイアウトを説明する図である。

【0166】すなわち、ディスク内周側の Lead-in Area 607 は光反射面が凹凸形状をしたエンボスデータ領域（Embossed data Zone）611、表面が平坦（鏡面）なミラーゾーン（Mirror Zone）612 および書替可能なリライタブルデータゾーン（Rewritable data Zone）613 で構成される。Embossed data Zone 611 は図 9 のように基準信号を表すリファレンス信号ゾーン（Reference signal Zone）653 および制御データゾーン（Control data Zone）655 を含み、Mirror Zone 612 は Connection Zone 657 を含む。

【0167】Rewritable data Zone 613 は、ディスクテストゾーン（Disk test Zone）658 と、ドライブテストゾーン（Drive test Zone）660 と、ディスク ID（識別子）が示された Disc identification Zone 662 と、欠陥管理エリア DMA 1 および DMA 2 663 を含んでいる。

【0168】ディスク外周側の Lead-out Area 609 は、図 10 に示すように欠陥管理エリア DMA 3 および DMA 4 691 と、ディスク ID（識別子）が示されたディスク識別ゾーン（Disc identification Zone）692、Drive test Zone 694 と Disk test Zone 695 を含む書替可能な Rewritable data Zone 645 で構成される。

【0169】Lead-in Area 607 と Lead-out Area 609 との間の Data Area 608 は 24 個の年輪状の Zone 00 620 ～ Zone 23 643 に分割されている。各ゾーン（Zone）は一定の回転速度を持っているが、異なるゾーン間では回転速度が異なる。また、各ゾーンを構成するセクタ数も、ゾーン毎に異なる。具体的には、ディスク内周側の Zone 00 620 等は回転速度が早く構成セクタ数は少ない。一方、ディスク外周側の Zone 23 643 等は回転速度が遅く構成セクタ数が多い。このようなレイアウトによって、各ゾーン内では CAV のような高速アクセス性を実現し、ゾーン全体でみれば CLV のような高密度記録性を実現している。

【0170】図 9 と図 10 は図 8 のレイアウトにおける Lead-in Area 607 と Lead-out Area 609 の詳細を説明する図である。

【0171】Embossed data Zone 611 の Control data Zone 655 には、適用される DVD 規格のタイプ（DVD-ROM・DVD-RAM・DVD-R 等）およびパートバージョンを示すブックタイプ・アンド・パートバージョン（Book type and Part version）671 と、ディスクサイズおよび最小読出レートを示すディスクサイズ・アンド・ミニマムリードアウトレート（Disc size and minimum read-out rate）672 と、1 層 ROM ディスク、1 層 RAM ディスク、2 層 ROM ディスク等のディスク構造を示すディスク構成（Disc structure）673 と、記録密度を示すレコーディングデンティシー（Recording density）674 と、データが記録されている位置を示すデータロケーション（Data Area allocation）675 と、情報記憶媒体の内周側に情報記憶媒体個々の製造番号などが書き換え不可能な形で記録された BCA（Burst Cutting Area）descriptor 676 と、記録時の露光量指定のための線速度条件を示す Velocity 677 と、再生時の情報記憶媒体への露光量を表すリードパワー（Read power）678、記録時に記録マーク形成のために情報記憶媒体に与える最大露光量を表すピークパワー（Peak power）679 と、消去時に情報記憶媒体に与える最大露光量を表すバイアスパワー（Bias power）680 と、媒体の製造に関する情報 682 が記録されている。

【0172】別の言い方をすると、この Control data Zone 655 には、記録開始・記録終了位置を示す物理セクタ番号などの情報記憶媒体全体に関する情報と、記録パワー、記録パルス幅、消去パワー、再生パワー、記録・消去時の線速などの情報と、記録・再生・消去特性に関する情報と、個々のディスクの製造番号など情報記憶媒体の製造に関する情報等が事前に記録されている。

【0173】Lead-in Area 607 および Lead-out Area 609 の Rewritable data Zone 613、645 には、各々の媒体ごとの固有ディスク名記録領域（Disc identification Zone 662、692）と、試し記録領域（記録消去条

件の確認用である Drive test Zone 660、694 と Disk test Zone 659、695) と、データエリア内の欠陥領域に関する管理情報記録領域 (ディフェクトマネジメントエリア; DMA1 & DMA2 663、DMA3 & DMA4 691) が設けられている。これらの領域を利用することで、個々のディスクに対して最適な記録が可能となる。

【0174】図11は図8のレイアウトにおける Data Area 608 内の詳細を説明する図である。

【0175】24個のゾーン (Zone) 毎に同数のグループ (Group) が割り当てられ、各グループはデータ記録に使用する User Area 723 と交替処理に使用する Spare Area 724 のペアを含んでいる。また、User Area 723 と Spare Area 724 のペアは各ゾーン毎にガード領域 (Guard Area) 771、772 で分離されている。更に各グループの User Area 723 およびスペア領域 (Spare Area) 724 は同じ回転速度のゾーンに収まっており、グループ番号の小さい方が高速回転ゾーンに属し、グループ番号の大きい方が低速回転ゾーンに属する。低速回転ゾーンのグループは高速回転ゾーンのグループよりもセクタ数が多いが、低速回転ゾーンはディスクの回転半径が大きいので、ディスク10上での物理的な記録密度はゾーン全体 (グループ全て) に渡りほぼ均一になる。

【0176】各グループにおいて User Area 723 はセクタ番号の小さい方 (つまりディスク上で内周側) に配置され、Spare Area 724 はセクタ番号の大きい方 (ディスク上で外周側) に配置される。

【0177】次に情報記憶媒体として DVD-RAM ディスク上に記録される情報の記録信号構造とその記録信号構造の作成方法について説明する。なお、媒体上に記録される情報の内容そのものは「情報」と呼び、同一内容の情報に対しスクランブルしたり変調したりしたあとの構造や表現、つまり信号形態が変換された後の“1”～“0”の状態のつながりは「信号」と表現して、両者を適宜区別することにする。

【0178】図12は図8のデータエリア部分に含まれるセクタ内部の構造を説明する図である。図12の1セクタ 501a は図10のセクタ番号の1つに対応し、図13に示すように2048バイトのサイズを持つ。各セクタは図示していないが情報記憶媒体 (DVD-RAM ディスク) の記録面上にエンボスなどの凹凸構造で事前に記録されたヘッダ 573、574 を先頭に、同期コード 575、576 と変調後の信号 577、578 を交互に含んでいる。

【0179】次に、DVD-RAM ディスクにおける ECC ブロック処理方法について説明する。

【0180】図13は図8の Data Area 608 に含まれる情報の記録単位 (Error Correction Code の ECC 単位) を説明する図である。

【0181】パーソナルコンピュータ用の情報記憶媒体

(ハードディスク HDD や光磁気ディスク MO など) のファイルシステムで多く使われる FAT (File Allocation Table) では256バイトまたは512バイトを最小単位として情報記憶媒体へ情報が記録される。

【0182】それに対し、CD-ROM や DVD-ROM、DVD-RAM などの情報記憶媒体ではファイルシステムとして UDF (Universal Disk Format; 詳細は後述) を用いており、ここでは2048バイトを最小単位として情報記憶媒体へ情報が記録される。この最小単位をセクタと呼ぶ。つまり UDF を用いた情報記憶媒体に対しては、図13に示すようにセクタ 501 毎に2048バイトずつの情報を記録して行く。

【0183】CD-ROM や DVD-ROM ではカートリッジを使わず裸ディスクで取り扱うため、ユーザサイドで情報記憶媒体表面に傷が付いたり表面にゴミが付着し易い。情報記憶媒体表面に付いたゴミや傷の影響で特定のセクタ (たとえば図13のセクタ 501c) が再生不可能 (もしくは記録不能) な場合が発生する。

【0184】DVD では、そのような状況を考慮したエラー訂正方式 (積符号を利用した ECC) が採用されている。具体的には16個ずつのセクタ (図13ではセクタ 501a からセクタ 501p までの16個のセクタ) で1個の ECC (Error Correction Code) ブロック 502 を構成し、その中で強力なエラー訂正機能を持たせている。その結果、たとえばセクタ 501c が再生不可能といったような、ECC ブロック 502 内のエラーが生じて、エラー訂正され、ECC ブロック 502 のすべての情報を正しく再生することが可能となる。

【0185】図14は図8の Data Area 608 内でのゾーンとグループ (図11参照) との関係を説明する図である。

【0186】図8の各ゾーン: Zone 00 620 ~ Zone 23 643 は DVD-RAM ディスクの記録面上に物理的に配置されるもので、図8の物理セクタ番号 604 の欄と図14に記述してあるように Data Area 608 内の User Area 00 705 の最初の物理セクタの物理セクタ番号 (開始物理セクタ番号 701) は 031000h (h: 16進数表示の意味) に設定されている。更に物理セクタ番号は外周側 704 に行くに従って増加し、User Area 00 705、01 709、23 707、Spare Area 00 708、01709、23 710、Guard Area 711、712、713 のいかに関わらず連続した番号が付与されている。従って Zone 620 ~ 643 をまたがって物理セクタ番号には連続性が保たれている。

【0187】これに対して、User Area 705、706、707 と Spare Area 708、709、710 のペアで構成される各 Group 714、715、716 の間にはそれぞれ Guard Area 711、712、713 が挿入配置されている。そのため各 Group 714、715、716 をまたがった物理セクタ番号には図11のように不連続性を有する。



【0188】図14の構成を持つDVD-RAMディスクが、情報記録再生部（物理系ブロック）を有した情報記録再生装置で使用された場合には、光学ヘッド202がGuard Area 711、712、713 通過中にDVD-RAMディスクの回転速度を切り替える処理を行なうことができる。例えば光ヘッド202がGroup 00 705 から Group 01 715 にシークし、Guard Area 711を通過中にDVD-RAMディスクの回転速度が切り替えられる。

【0189】図15は図8のData Area 608 内での論理セクタ番号の設定方法を説明した図である。論理セクタの最小単位は物理セクタの最小単位と一致し、2048バイト単位になっている。各論理セクタは以下の規則に従い、対応した物理セクタ位置に割り当てられる。

【0190】図14に示したように物理的にGuard Area 711、712、713 がDVD-RAMディスクの記録面上に設けられているため各Group 714、715、716 をまたがった物理セクタ番号には不連続性が生じるが、論理セクタ番号は各Group 00 714、01 715、23 716 をまたがった位置で連続につながるような設定方法を取っている。このGroup 00 714、01 715 ~ 23 716 の並びは、グループ番号の小さい方（物理セクタ番号の小さい方）がDVD-RAMディスクの内周側（Lead-in Area 607 側）に配置され、グループ番号の大きい方（物理セクタ番号の大きい方）がDVD-RAMディスクの外周側（Lead-out Area 609 側）に配置される。この配置においてDVD-RAMディスクの記録面上に全く欠陥がない場合には、各論理セクタは図14のUser Area 00 705 ~ 23 707 内の全物理セクタに1対1に割り当てられ、物理セクタ番号が031000hである開始物理セクタ番号701位置でのセクタの論理セクタ番号は0hに設定される（図11の各Group内最初のセクタの論理セクタ番号774の欄を参照）。

【0191】このように記録面上に全く欠陥がない場合にはSpare Area 00 708 ~ 23 710内の各セクタに対しては論理セクタ番号は事前には設定されていない。

【0192】DVD-RAMディスクへの記録前に行う記録面上の事前の欠陥位置検出処理であるサーティファイ（Certify）処理時や再生時、あるいは記録時にUser Area 00 705 ~ 23 707内に欠陥セクタを発見した場合には、交替処理の結果、代替え処理を行ったセクタ数だけSpare Area 00 708 ~ 23 710 内の対応セクタに対して論理セクタ番号が設定される。

【0193】次に、ユーザエリアで生じた欠陥を処理する方法を幾つか説明する。その前に、欠陥処理に必要な欠陥管理エリア（図9または図10のディフェクトマネジメントエリア（DMA1~DMA4 663、691）およびその関連事項について説明しておく。

〔欠陥管理エリア〕欠陥管理エリア（DMA1~DMA4 663、691）はデータエリアの構成および欠陥管理の情報を含むものデータとえば32セクタで構成される。

2つの欠陥管理エリア（DMA1、DMA2 663）はDVD-RAMディスクのLead-inArea 607 内に配置され、他の2つの欠陥管理エリア（DMA3、DMA4 691）はDVD-RAMディスクのLead-out Area 609 内に配置される。各欠陥管理エリア（DMA1~DMA4 663、691）の後には、適宜予備のセクタ（スペアセクタ）が付加されている。

【0194】各欠陥管理エリア（DMA1~DMA4 663、691）は、2つのブロックに分かれている。各欠陥管理エリア（DMA1~DMA4 663、691）の最初のブロックには、DVD-RAMディスクの定義情報構造（DDS; Disc Definition Structure）および一次欠陥リスト（PDL; Primary Defect List）が含まれる。各欠陥管理エリア（DMA1~DMA4 663、691）の2番目のブロックには、二次欠陥リスト（SDL; Secondary Defect List）が含まれる。4つの欠陥管理エリア（DMA1~DMA4 663、691）の4つの一次欠陥リスト（PDL）は同一内容となっており、それらの4つの二次欠陥リスト（SDL）も同一内容となっている。

【0195】4つの欠陥管理エリア（DMA1~DMA4 663、691）の4つの定義情報構造（DDS）は基本的には同一内容であるが、4つの欠陥管理エリアそれぞれのPDLおよびSDLに対するポインタについては、それぞれ個別の内容となっている。

【0196】ここでDDS/PDLブロックは、DDSおよびPDLを含む最初のブロックを意味する。また、SDLブロックは、SDLを含む2番目のブロックを意味する。

【0197】DVD-RAMディスクを初期化したあとの各欠陥管理エリア（DMA1~DMA4 663、691）の内容は、以下のようにになっている：

- (1) 各DDS/PDLブロックの最初のセクタはDDSを含む；
- (2) 各DDS/PDLブロックの2番目のセクタはPDLを含む；
- (3) 各SDLブロックの最初のセクタはSDLを含む。

【0198】一次欠陥リストPDLおよび二次欠陥リストSDLのブロック長は、それぞれのエントリ数によって決定される。各欠陥管理エリア（DMA1~DMA4 663、691）の未使用セクタはデータ0FFhで書き潰される。また、全ての予備セクタは00hで書き潰される。

〔ディスク定義情報〕定義情報構造DDSは、1セクタ分の長さのテーブルからなる。このDDSはディスク10の初期化方法と、PDLおよびSDLそれぞれの開始アドレスを規定する内容を持つ。DDSは、ディスク10の初期化終了時に、各欠陥管理エリア（DMA）の最初のセクタに記録される。

【スベアセクタ】各Data Area 608 内の欠陥セクタは、所定の欠陥管理方法（後述する検証、スリッピング交替、スキッピング交替、リニア交替）により、正常セクタに置換（交替）される。この交替のためのスベアセクタの位置は、図14に示した SpareArea 00 708 ~ 23 710 の各グループのスベアエリアに含まれる。またこの各Spare Area 内での物理セクタ番号は図11のSpare Area 724 の欄に記載されている。

【0199】DVD-RAMディスクは使用前に初期化できるようになっているが、この初期化は検証の有無に拘わらず実行可能となっている。

【0200】欠陥セクタは、スリッピング交替処理（Slipping Replacement Algorithm）、スキッピング交替処理（Skipping Replacement Algorithm）あるいはリニア交替処理（Linear Replacement Algorithm）により処理される。これらの処理（Algorithm）により前記PDLおよびSDLにリストされるエントリ数の合計は、所定数、たとえば4092以下とされる。

【初期化・Certify】DVD-RAMディスクのData Area 608 にユーザー情報を記録する前に初期化処理を行い、Data Area 608 内の全セクタの欠陥状況の検査（Certify）を行なう場合が多い。初期化段階で発見された欠陥セクタは特定され、連続した欠陥セクタ数に応じてスリッピング交替処理あるいはリニア交替処理によりUserArea 723 内の欠陥セクタは Spare Area 724 内の予備セクタで補間される。Certifyの実行中にDVD-RAMディスクのゾーン内スベアセクタを使い切ってしまったときは、そのDVD-RAMディスクは不良と判定し、以後そのDVD-RAMディスクは使用しないものとする。

【0201】全ての定義情報構造DDSのパラメータは、4つのDDSセクタに記録される。一次欠陥リストPDLおよび二次欠陥リストSDLは、4つの欠陥管理エリア（DMA1~DMA4 663, 691）に記録される。最初の初期化では、SDL内のアップデートカウンタは00hにセットされ、全ての予約ブロックは00hで書き潰される。

【0202】なお、ディスク10をコンピュータのデータ記憶用に用いるときは上記初期化・Certifyが行われるが、ビデオ録画用に用いられるときは、上記初期化・Certifyを行うことなく、いきなりビデオ録画することもあり得る。

【0203】図16（a）、（b）は図8のData Area 608 内でのスリッピング交替処理（Slipping Replacement Algorithm）を説明する図である。

【0204】DVD-RAMディスク製造直後（ディスクにまだ何もユーザー情報が記録されて無い時）、あるいは最初にユーザー情報を記録する場合（既に記録されている場所上に重ね書き記録するのでは無く、未記録領域に最初に情報を記録する場合）には欠陥処理方法とし

てこのスリッピング交替処理が適用される。

【0205】すなわち発見された欠陥データセクタ（たとえばm個の欠陥セクタ731）は、その欠陥セクタの後に続く最初の正常セクタ（ユーザエリア723b）に交替（あるいは置換）使用される（交替処理734）。これにより、該当グループの末端に向かってmセクタ分のスリッピング（論理セクタ番号後方シフト）が生じる。同様に、その後にn個の欠陥セクタ732が発見されれば、その欠陥セクタはその後続く正常セクタ（ユーザエリア723c）と交替使用され、同じく論理セクタ番号の設定位置が後方にシフトする。その交代処理の結果 Spare Area724 内の最初から m+nセクタ分 737 に論理セクタ番号が設定され、ユーザー情報記録可能領域になる。その結果、Spare Area 724内の不使用領域726はm+nセクタ分減少する。

【0206】この時の欠陥セクタのアドレスは一次欠陥リスト（PDL）に書き込まれ、欠陥セクタはユーザ情報の記録を禁止される。もし、Certify中に欠陥セクタが発見されないときは、PDLには何も書き込まない。同様にもしも Spare Area 724 内の記録使用領域743内にも欠陥セクタが発見された場合には、そのスベアセクタのアドレスもPDLに書き込まれる。

【0207】上記のスリッピング交替処理の結果、欠陥セクタのない User Area 723a ~ 723c と Spare Area 724 内の記録使用領域743がそのグループの情報記録使用部分（論理セクタ番号設定領域735）となり、この部分に連続した論理セクタ番号が割り当てられる。

【0208】図16（c）は、図8のData Area 608 内での他の交替処理であるスキッピング交替処理（Skipping Replacement Algorithm）を説明する図である。

【0209】スキッピング交替処理は、映像情報や音声情報など途切れる事無く連続的（シームレス）にユーザー情報を記録する必要がある場合の欠陥処理に適した処理方法である。このスキッピング交替処理は、16セクタ単位、すなわちECCブロック単位（1セクタが2kバイトなので32kバイト単位）で実行される。

【0210】たとえば、正常なECCブロックで構成される User Area 732a の後に1個の欠陥ECCブロック741が発見されれば、この欠陥ECCブロック741に記録予定だったデータは、直後の正常な User Area 723b のECCブロックに代わりに記録される（交替処理744）。同様にk個の連続した欠陥ECCブロック742が発見されれば、これらの欠陥ブロック742に記録する予定だったデータは、直後の正常な User Area 723c のk個のECCブロックに代わりに記録される。

【0211】こうして、該当グループのUser Area 内で1+k個の欠陥ECCブロックが発見された時は、（1+k）ECCブロック分が Spare Area 724 の領域内にずれ込み、Spare Area 724 内の情報記録に使用する延長領域743がユーザー情報記録可能領域となり、ここ

に論理セクタ番号が設定される。その結果 Spare Area 724 の不使用領域 726 は  $(1+k)$  ECC ブロック分減少し、残りの不使用領域 746 は小さくなる。

【0212】上記交代処理の結果、欠陥 ECC ブロックのない User Area 723a ~ 723c と情報記録に使用する延長領域 743 がそのグループ内での情報記録使用部分（論理セクタ番号設定領域）となる。この時の論理セクタ番号の設定方法として、欠陥 ECC ブロックのない User Area 723a ~ 723c は初期設定（上記交代処理前）の時に事前に割り振られた論理セクタ番号のまま不変に保たれる所に大きな特徴がある。

【0213】その結果、欠陥 ECC ブロック 741 内の各物理セクタに対して初期設定時に事前に割り振られた論理セクタ番号がそのまま情報記録に使用する延長領域 743 内の最初の物理セクタに移動して設定される。また  $k$  個連続欠陥 ECC ブロック 742 内の各物理セクタに対して初期設定時に割り振られた論理セクタ番号がそのまま平行移動して、情報記録に使用する延長領域 743 内の該当する各物理セクタに設定される。

【0214】このスキッピング交替処理法では、DVD-RAM ディスクが事前に Certify されていなくても、ユーザー情報記録中に発見された欠陥セクタに対して即座に交替処理を実行出来る。

【0215】図 16 (d) は図 8 の Data Area 608 内でのさらに他の交替処理であるリニア交替処理（Linear Replacement Algorithm）を説明する図である。

【0216】このリニア交替処理も、16 セクタ単位すなわち ECC ブロック単位（32 k バイト単位）で実行される。リニア交替処理では、欠陥 ECC ブロック 751 が該当グループ内で最初に使用可能な正常スペアブロック（Spare Area 724 内の最初の交代記録箇所 753）と交替（置換）される（交替処理 758）。この交代処理の場合、欠陥 ECC ブロック 751 上に記録する予定だったユーザー情報はそのまま Spare Area 724 内の交代記録箇所 753 上に記録されると共に、論理セクタ番号設定位置もそのまま交代記録箇所 753 上に移される。同様に  $k$  個の連続欠陥 ECC ブロック 752 に対しても記録予定だったユーザー情報と論理セクタ番号設定位置が Spare Area 724 内の交代記録箇所 754 に移

る。

【0217】リニア交替処理とスキッピング交替処理の場合には欠陥ブロックのアドレスおよびその最終交替（置換）ブロックのアドレスは、SDL に書き込まれる。SDL（二次欠陥リスト）アップされた交替ブロックが、後に欠陥ブロックであると判明したときは、ダイレクトポインタ法を用いて SDL に登録を行なう。このダイレクトポインタ法では、交替ブロックのアドレスを欠陥ブロックのものから新しいものへ変更することによって、交替された欠陥ブロックが登録されている SDL のエントリが修正される。上記二次欠陥リスト SDL を更新するときは、SDL 内の更新カウンタを 1 つインクリメントする。

【0218】〔書込処理〕あるグループのセクタにデータ書込を行うときは、一次欠陥リスト（PDL）にリストされた欠陥セクタはスキップされる。そして、前述したスキッピング交替処理にしたがって、欠陥セクタに書き込もうとするデータは次に来るデータセクタに書き込まれる。もし書込対象ブロックが二次欠陥リスト（SDL）にリストされておれば、そのブロックへ書き込もうとするデータは、前述したリニア交替処理またはスキッピング交替処理にしたがって、SDL により指示されるスペアブロックに書き込まれる。

【0219】なお、パーソナルコンピュータの環境下では、パーソナルコンピュータファイルの記録時にはリニア交替処理が利用され、AV ファイルの記録時にはスキッピング交替処理が利用される。

〔一次欠陥リスト；PDL〕一次欠陥リスト（PDL）は常に DVD-RAM ディスクに記録されるものであるが、その内容が空であることはあり得る。

【0220】PDL は、初期化時に特定された全ての欠陥セクタのアドレスを含む。これらのアドレスは、昇順にリストされる。PDL は必要最小限のセクタ数で記録するようにする。そして、PDL は最初のセクタの最初のユーザバイトから開始する。PDL の最終セクタにおける全ての未使用バイトは、0 FFh にセットされる。この PDL には、以下のような情報が書き込まれることになる：

バイト位置	PDL の内容
0	00h ; PDL 識別子
1	01h ; PDL 識別子
2	PDL 内のアドレス数 ; MSB
3	PDL 内のアドレス数 ; LSB
4	最初の欠陥セクタのアドレス（セクタ番号 ; MSB）
5	最初の欠陥セクタのアドレス（セクタ番号）
6	最初の欠陥セクタのアドレス（セクタ番号）
7	最初の欠陥セクタのアドレス（セクタ番号 ; LSB）
...	...
x-3	最後の欠陥セクタのアドレス（セクタ番号 ; MSB）

37

x-2 最後の欠陥セクタのアドレス (セクタ番号)  
 x-1 最後の欠陥セクタのアドレス (セクタ番号)  
 x 最後の欠陥セクタのアドレス (セクタ番号; LSB)

\*注; 第2バイトおよび第3バイトが 00h にセットされているときは、第3

バイトはPDLの末尾となる。

【0221】なお、マルチセクタに対する一次欠陥リスト (PDL) の場合、欠陥セクタのアドレスリストは、2番目以降の後続セクタの最初のバイトに続くものとなる。つまり、PDL識別子およびPDLアドレス数は、最初のセクタにのみ存在する。

【0222】PDLが空の場合、第2バイトおよび第3バイトは 00h にセットされ、第4バイトないし第2047バイトは FFh にセットされる。

【0223】また、DDS/PDLブロック内の未使用セクタには、FFh が書き込まれる。

【0224】【二次欠陥リスト; SDL】二次欠陥リスト (SDL) は初期化段階で生成され、Certify の後に使用される。全てのディスクには、初期化中にSDLが記録される。

【0225】このSDLは、欠陥データブロックのアドレスおよびこの欠陥ブロックと交替するスペアブロックのアドレスという形で、複数のエントリを含んでいる。SDL内の各エントリには、8バイト割り当てられている。つまり、その内の4バイトが欠陥ブロックのアドレスに割り当てられ、残りの4バイトが交替ブロックのア

38

ドレスに割り当てられている。

【0226】上記アドレスリストは、欠陥ブロックおよびその交替ブロックの最初のアドレスを含む。欠陥ブロックのアドレスは、昇順に付される。

10 【0227】SDLは必要最小限のセクタ数で記録され、このSDLは最初のセクタの最初のユーザデータバイトから始まる。SDLの最終セクタにおける全ての未使用バイトは、0FFh にセットされる。その後の情報は、4つのSDL各々に記録される。

【0228】SDLにリストされた交替ブロックが、後に欠陥ブロックであると判明したときは、ダイレクトポインタ法を用いてSDLに登録を行なう。このダイレクトポインタ法では、交替ブロックのアドレスを欠陥ブロックのものから新しいものへ変更することによって、交替された欠陥ブロックが登録されているSDLのエントリが修正される。その際、SDL内のエントリ数は、劣化セクタによって変更されることはない。

【0229】このSDLには、以下のような情報が書き込まれることになる：

バイト位置	SDLの内容
0	(00) ; SDL 識別子
1	(02) ; SDL 識別子
2	(00)
3	(01)
4	更新カウンタ; MSB
5	更新カウンタ
6	更新カウンタ
7	更新カウンタ; LSB
8~26	予備 (00h)
27~29	ゾーン内スペアセクタを全て使い切ったことを示すフラグ
30	SDL内のエントリ数; MSB
31	SDL内のエントリ数; LSB
32	最初の欠陥ブロックのアドレス (セクタ番号; MSB)
33	最初の欠陥ブロックのアドレス (セクタ番号)
34	最初の欠陥ブロックのアドレス (セクタ番号)
35	最初の欠陥ブロックのアドレス (セクタ番号; LSB)
36	最初の交替ブロックのアドレス (セクタ番号; MSB)
37	最初の交替ブロックのアドレス (セクタ番号)
38	最初の交替ブロックのアドレス (セクタ番号)
39	最初の交替ブロックのアドレス (セクタ番号; LSB)

...	...
y-7	最後の欠陥ブロックのアドレス (セクタ番号; MSB)
y-6	最後の欠陥ブロックのアドレス (セクタ番号)
y-5	最後の欠陥ブロックのアドレス (セクタ番号)
y-4	最後の欠陥ブロックのアドレス (セクタ番号; LSB)
y-3	最後の交替ブロックのアドレス (セクタ番号; MSB)
y-2	最後の交替ブロックのアドレス (セクタ番号)
y-1	最後の交替ブロックのアドレス (セクタ番号)
y	最後の交替ブロックのアドレス (セクタ番号; LSB)

\*注: 第30~第31バイト目の各エントリは8バイト長。

【0230】なお、マルチセクタに対する二次欠陥リスト (SDL) の場合、欠陥ブロックおよび交替ブロックのアドレスリストは、2番目以降の後続セクタの最初のバイトに続くものとなる。つまり、上記SDLの内容の第0バイト目~第31バイト目は、最初のセクタにのみ存在する。また、SDLブロック内の未使用セクタに

は、FFhが書き込まれる。

【0231】DVD-RAMディスク等に対する論理ブロック番号の設定動作の一例を説明する。

【0232】ターンテーブル221に情報記憶媒体 (光ディスク) 201が装填されると、制御部220はスピンドルモータ204の回転を開始させる。

【0233】情報記憶媒体 (光ディスク) 201回転が開始したあと光学ヘッド202のレーザー発光が開始され、光ヘッド202内の対物レンズのフォーカスサーボループがオンされる。

【0234】レーザ発光後、制御部220は送りモータ203を作動させて光ヘッド202を回転中の情報記憶媒体 (光ディスク) 201の Lead-in Area 607 に移動させる。そして光ヘッド202内の対物レンズのトラックサーボループがオンされる。

【0235】トラックサーボがアクティブになると、光ヘッド202は情報記憶媒体 (光ディスク) 201の Lead-in Area 607 内の Control data Zone 655 の情報を再生する。このControl data Zone 655 内の Book type and Part version 671 を再生することで、現在回転

駆動されている情報記憶媒体 (光ディスク) 201が記録可能な媒体 (DVD-RAMディスクまたはDVD-Rディスク) であると確認される。ここでは、媒体10がDVD-RAMディスクであるとする。

【0236】情報記憶媒体 (光ディスク) 201がDVD-RAMディスクであると確認されると、再生対象のControl data Zone 655 から、再生・記録・消去時の最適光量 (半導体レーザの発光パワーおよび発光期間またはデューティ比等) の情報が再生される。

【0237】続いて、制御部220は、現在回転駆動中

のDVD-RAMディスク201に欠陥がないものとして、物理セクタ番号と論理セクタ番号との変換表を作成する。

【0238】この変換表が作成されたあと、制御部220は情報記憶媒体 (光ディスク) 201の Lead-in Area 607 内の欠陥管理エリアDMA1/DMA2 663 およびLead-out Area 609内の欠陥管理エリアDMA3/DMA4 691 を再生して、その時点における情報記憶媒体 (光ディスク) 201の欠陥分布を調査する。

【0239】上記欠陥分布調査により情報記憶媒体 (光ディスク) 201上の欠陥分布が判ると、制御部220は、ステップST140で「欠陥がない」として作成された変換表を、実際の欠陥分布に応じて修正する。具体的には、欠陥があると判明したセクタそれぞれの部分で、物理セクタ番号PSNに対応していた論理セクタ番号LSNがシフトされる。

【0240】次に、DVD-RAMディスク等における欠陥処理動作 (ドライブ側の処理) の一例を説明する。最初にたとえば制御部220内のMPUに対して、現在ドライブに装填されている媒体 (たとえばDVD-RAMディスク) 201に記録する情報の先頭論理ブロック番号LBNおよび記録情報のファイルサイズを指定する。すると、制御部220のMPUは、指定された先頭論理ブロック番号LBNから、記録する情報の先頭論理セクタ番号LSNを算出する。こうして算出された先頭論理セクタ番号LSNおよび指定されたファイルサイズから、情報記憶媒体 (光ディスク) 201への書込論理セクタ番号が定まる。

【0241】次に制御部220のMPUはDVD-RAMディスク201の指定アドレスに記録情報ファイルを書き込むとともに、ディスク201上の欠陥を調査する。

【0242】このファイル書込中に欠陥が検出されなければ、記録情報ファイルが所定の論理セクタ番号に異ならず (つまりエラーが発生せずに) 記録されたことになり、記録処理が正常に完了する。

20

40

50

【0243】一方、ファイル書込中に欠陥が検出されれば、所定の交替処理（たとえばニア交替処理（Linear Replacement Algorithm））が実行される。この交替処理後、新たに検出された欠陥がディスクのLead-in Area 607 のDMA1/DMA2663 および Lead-out Area 609 のDMA3/DMA4 691 に追加登録される。情報記憶媒体（光ディスク）201へのDMA1/DMA2 663およびDMA3/DMA4 691 の追加登録後、このDMA1/DMA2 663 およびDMA3/DMA4 691 の登録内容に基づいて、変換表の内容が修正される。

【0244】次に以下に File System の一種である UDF について説明する次に、図17から図22ではFile System の一種であるUDFについて説明する。

【0245】[A-1] …UDFとはユニバーサルディスクフォーマット（Universal Disk Format）の略で、主にディスク状情報記憶媒体における“ファイル管理方法に関する規約”を示す。CD-ROM、CD-R、CD-RW、DVD-Video、DVD-ROM、DVD-R、DVD-RAMは“ISO9660”で規格化されたUDFフォーマットを採用している。

【0246】ファイル管理方法としては基本的にルートディレクトリー（Root Directory）を親に持ち、ツリー状にファイルを管理する階層ファイル・システムを前提としている。ここでは主にDVD-RAM規格（File System Specifications）に準拠したUDFフォーマットについての説明を行うが、この説明内容の多くの部分はDVD-ROM規格内容とも一致している。

【0247】[A-2] …UDFの概要

[A-2-1] 情報記憶媒体へのファイル情報記録内容 情報記憶媒体に情報を記録する場合、情報のまとまりを“ファイルデータ”（File Data）と呼び、ファイルデータ単位で記録を行う。他のファイルデータと識別するためファイルデータ毎に独自のファイル名が付加されている。共通な情報内容を持つ複数ファイルデータ毎にグループ化するとファイル管理とファイル検索が容易になる。この複数ファイルデータ毎のグループを“ディレクトリー”（Directory）または“フォルダー”（Folder）と呼ぶ。各ディレクトリー（フォルダー）毎に独自のディレクトリー名（フォルダー名）が付加される。更にその複数のディレクトリー（フォルダー）を集めて、その上の階層のグループとして上位のディレクトリー（上位フォルダー）でまとめる事が出来る。ここではファイルデータとディレクトリー（フォルダー）を総称してファイル（File）と呼ぶ。

【0248】情報を記録する場合には、  
\*ファイルデータの情報内容そのもの、  
\*ファイルデータに対応したファイル名、  
\*ファイルデータの保存場所（どのディレクトリーの下に記録するか）、に関する

情報をすべて情報記憶媒体上に記録する。

【0249】また各ディレクトリー（フォルダー）に対する \*ディレクトリー名（フォルダー名）、\*各ディレクトリー（フォルダー）が属している位置（その親となる上位ディレクトリー（上位フォルダー）の位置）、に関する情報もすべて情報記憶媒体上に記録されている。

【0250】[A-2-2] 情報記憶媒体上での情報記録形式

10 情報記憶媒体上の全記録領域は2048 Bytesを最小単位とする論理セクタに分割され、全論理セクタには論理セクタ番号が連番で付けられている。情報記憶媒体上に情報を記録する場合にはこの論理セクタ単位で情報が記録される。情報記憶媒体上での記録位置はこの情報を記録した論理セクタの論理セクタ番号で管理される。

20 【0251】図17、図18に示すように、ファイル構成（File Structure）486 と ファイルデータ（File Data）487に関する情報が記録されている論理セクタは特に“論理ブロック”とも呼ばれ、論理セクタ番号（LSN）に連動して論理ブロック番号（LBN）が設定されている。（論理ブロックの長さは論理セクタと同様2048 Bytesになっている。）

[A-2-3] 階層ファイル・システムを簡素化した一例

階層ファイル・システムを簡素化した一例を図19

30 (a)に示す。UNIX、Mac OS、MS-DOS、Windows等ほとんどのOSのファイル管理システムが、図19(a)に示したようなツリー状の階層構造を持つ。1個のディスクドライブ（例えば1台のHDD）が複数のパーティションに区切られている場合には各パーティション単位を示す）毎にその全体の親となる1個のルートディレクトリー（Root Directory）401が存在し、その下にサブディレクトリー（SubDirectory）402が属している。このSubDirectory 402の中にFile Data 403が存在している。

【0252】実際にはこの例に限らずRoot Directory 401の直接下にFile Data 403が存在したり、複数のSubDirectory 402が直列につながった複雑な階層構造を持つ場合もある。

40 【0253】[A-2-4] 情報記憶媒体上ファイル管理情報の記録内容

ファイル管理情報は上述した論理ブロック単位で記録される。各論理ブロック内に記録される内容は主に\*ファイルに関する情報を示す記述文 FID（ファイル識別記述子；File Identifier Descriptor）

… ファイルの種類やファイル名（Root Directory名、SubDirectory名、File Data 名など）を記述している。

50 【0254】… FIDの中にそれに続く File Data



のデータ内容や、Directoryの中味の記録場所を示す記述文（つまり該当ファイルに対応した以下に説明するFE）の記録位置も記述されている。

【0255】＊ファイル中味の記録位置を示す記述文FE（ファイルエントリ；FileEntry）

… File Data のデータ内容や、Directory（Sub Directory など）の中味に関する情報が記録されている情報記憶媒体上の位置（論理ブロック番号）などを記述している。

【0256】File Identifier Descriptorの記述内容の抜粋を図24（後述する）に示した。またその詳細の説明は“[B-4] File Identifier Descriptor”で行う。File Entryの記述内容の抜粋は図23（後述する）に示し、その詳細な説明は“[B-3] File Entry”で行う。

【0257】次に、情報記憶媒体上の記録位置を示す記述文は、図20に示すロングアロケーションディスクリプター（Long Allocation Descriptor）と図21に示すショートアロケーションディスクリプター（Short Allocation Descriptor）を使っている。それぞれの詳細説明は“[B-1-2] Long Allocation Descriptor”と“[B-1-3] Short Allocation Descriptor”で行う。

【0258】例として図19（a）のファイル・システム構造の情報を情報記憶媒体に記録した時の記録内容を図19（b）に示す。図19（b）の記録内容は以下の通りとなる。

・論理ブロック番号“1”の論理ブロックにRoot Directory 401の中味が示されている。

【0259】…図19（a）の例ではRoot Directory 401の中にはSub Directory 402のみが入っているため、Root Directory 401の中味としてSub Directory 402に関する情報がFile Identifier Descriptor 文 404で記載している。また図示して無いが同一論理ブロック内にRoot Directory 401自身の情報もFile Identifier Descriptor 文で並記してある。

【0260】…このSub Directory 402のFile Identifier Descriptor 文 404中にSub Directory 402の中味が何処に記録されているかを示すFile Entry文 405の記録位置（図19（b）の例では2番目の論理ブロック）がLong Allocation Descriptor 文で記載（LAD（2））されている。

・論理ブロック番号“2”の論理ブロックにSub Directory 402の中味が記録されている位置を示すFile Entry 文 405 が記録されている。

【0261】…図19（a）の例ではSub Directory 402の中にはFile Data 403のみが入っているため、Sub Directory 402の中味として実質的には、File Data 403に関する情報が記述されているFile Identifier Descriptor 文 406 の記録位置を示す事になる。

【0262】…File Entry 文中のShort Allocation Descriptor 文で3番目の論理ブロックにSub Directory 402の中味が記録されている事（AD（3））が記述されている。

・論理ブロック番号“3”の論理ブロックにSub Directory 402の中味が記録されている。

【0263】…図19（a）の例ではSub Directory 402の中にはFile Data 403のみが入っているため、Sub Directory 402の中味としてFile Data 403に関する情報がFile Identifier Descriptor 文 406 で記載されている。また図示して無いが同一論理ブロック内にSub Directory 402自身の情報もFile Identifier Descriptor 文で並記してある。

【0264】…File Data 403に関するFile Identifier Descriptor 文 406 の中にそのFile Data 403の内容が何処に記録されている位置を示すFile Entry 文 407の記録位置（図19（b）の例では4番目の論理ブロックに記録されている）が、Long Allocation Descriptor 文で記載（LAD（4））されている。

・論理ブロック番号“4”の論理ブロックにFile Data 403 内容 408、409が記録されている位置を示すFile Entry 文 407 が記録されている。

【0265】…File Entry 文 407 内のShort Allocation Descriptor 文でFile Data 403 内容 408、409が5番目と6番目の論理ブロックに記録している事が記述（AD（5）、AD（6））されている。

・論理ブロック番号“5”の論理ブロックにFile Data 403 内容情報（a）408が記録されている。

・論理ブロック番号“6”の論理ブロックにFile Data 403 内容情報（b）409が記録されている。

[A-2-5]

図19（b）情報に沿ったFile Data へのアクセス方法

“[A-2-4] 情報記憶媒体上のファイル・システム情報記録内容”で簡単に説明したようにFile Identifier Descriptor 404、406 とFile Entry 405、407 には、それに続く情報が記述してある論理ブロック番号が記述してある。Root Directory から階層を下りながらSub Directory を経由してFile Data へ到達するのと同様に、File Identifier Descriptor とFile Entry 内に記述してある論理ブロック番号に従って情報記憶媒体上の論理ブロック内の情報を順次再生しながらFile Data のデータ内容へアクセスする。

【0266】つまり図19（b）に示した情報に対してFile Data 403 へアクセスするには、まず始めに1番目の論理ブロック情報を読む。File Data 403 はSub Directory 402 の中に存在しているため、1番目の論理ブロック情報の中からSub Directory 402 のFile Identifier Descriptor 404 を探し、LAD（2）を読み取った後、それに従って2番目の論理ブロック情報を読む。

2 番目の論理ブロックには 1 個の File Entry 文しか記述してないので、その中の AD(3) を読み取り、3 番目の論理ブロックへ移動する。3 番目の論理ブロックでは File Data 403 に関して記述してある File Identifier Descriptor 406 を探し、LAD(4) を読み取る。LAD(4) に従い 4 番目の論理ブロックへ移動すると、そこには 1 個の File Entry 文 407 しか記述してないので、AD(5) と AD(6) を読み取り、File Data 403 の内容が記録してある論理ブロック番号 (5 番目と 6 番目) を見付ける。なお AD(\*)、LAD(\*) の内容については “ [B] UDF の各記述文 (Descriptor) の具体的内容説明 ” で詳細に説明する。

#### [A-3] UDF の特徴

##### [A-3-1] UDF 特徴説明

以下に HDD や FDD、MO など で使われている FAT との比較により UDF の特徴を説明する。

1) (最小論理ブロックサイズ、最小論理セクタサイズなどの) 最小単位が大きく、記録すべき情報量の多い映像情報や音楽情報の記録に向く。

[0267] …FAT の論理セクタサイズが 512 Bytes に対して、UDF の論理セクタ (ブロック) サイズは 2048 Bytes と大きくなっている。

2) FAT はファイルの情報記憶媒体への割り当て管理表 (File Allocation Table) が情報記憶媒体上で局所的に集中記録されるのに対し、UDF ではファイル管理情報をディスク上の任意の位置に分散記録できる。

[0268] …UDF ではファイル管理情報やファイルデータに関するディスク上での記録位置は論理セクタ (ブロック) 番号として Allocation Descriptor に記述される。

[0269] \*FAT ではファイル管理領域 (File Allocation Table) で集中管理されているため頻繁にファイル構造の変更が必要な用途 (主に頻繁な書き換え用途) に適している (集中箇所に記録されているので管理情報を書き換え易いため)。またファイル管理情報 (File Allocation Table) の記録場所はあらかじめ決まっているので記録媒体の高い信頼性 (欠陥領域が少ない事) が前提となる。

[0270] \*UDF ではファイル管理情報が分散配置されているので、ファイル構造の大幅な変更が少なく、階層の下部分 (主に Root Directory より下の部分) で後から新たなファイル構造を付け足して行く用途 (主に追記用途) に適している (追記時には以前のファイル管理情報に対する変更箇所が少ないため)。また分散されたファイル管理情報の記録位置を任意に指定できるので、先天的な欠陥箇所を避けて記録する事が出来る。

[0271] ファイル管理情報を任意の位置に記録できるので全ファイル管理情報を一箇所に集めて記録し上記 FAT の利点も出せるので、より汎用性の高いファイルシステムと考えることが出来る。

[B] UDF の各記述文 (Descriptor) の具体的内容説明

#### [B-1] 論理ブロック番号の記述文

##### [B-1-1] Allocation Descriptor

“ [A-2-4] 情報記憶媒体上のファイル・システム情報記録内容 ” に示したように File Identifier Descriptor や File Entry などの一部に含まれ、その後に続く情報が記録されている位置 (論理ブロック番号) を示した記述文を Allocation Descriptor と呼ぶ。Allocation Descriptor には以下に示す Long Allocation Descriptor と Short Allocation Descriptor がある。

[B-1-2] Long Allocation Descriptor 図 20 に示すように

- ・エクステント (Extent) の長さ 410 … 論理ブロック数を 4 Bytes で表示、
- ・Extent の位置 411 … 該当する論理ブロック番号を 4 Bytes で表示、
- ・インプリメンテーション (Implementation Use) 412 … 演算処理に利用する情報で 8 Bytes で表示、などから構成される。この説明文では記述を簡素化して “LAD (論理ブロック番号)” で記述する。

##### [B-1-3] Short Allocation Descriptor

図 21 に示すように

- ・Extent の長さ 410 … 論理ブロック数を 4 Bytes で表示、
- ・Extent の位置 411 … 該当する論理ブロック番号を 4 Bytes で表示、のみで構成される。この説明文では記述を簡素化して “AD (論理ブロック番号)” で記述する。

#### [B-2] アンロケイテッドスペースエントリー (Unallocated Space Entry)

図 22 に示すように情報記憶媒体上の “未記録状態の Extent 分布” を Extent 毎に Short Allocation Descriptor で記述し、それを並べる記述文で、Space Table (図 17、図 18 参照) に用いられる。具体的な内容としては

・Descriptor Tag 413 … 記述内容の識別子を表し、この場合は “263”、

・ICB Tag 414 … ファイルタイプを示す、ICB Tag 内の File Type=1 は Unallocated Space Entry を意味し、File Type=4 は Directory、File Type=5 は File Data を表している。

・Allocation Descriptors 列の全長 415 … 4 Bytes で総 Bytes 数を示す。などが記述されている。

#### [B-3] File Entry

“ [A-2-4] 情報記憶媒体上のファイル・システム情報記録内容 ” で説明した記述文。

##### [0272] 図 23 に示すように

- ・ディスクリプタータグ (Descriptor Tag) 417 … 記述内容の識別子を表し、この場合は “261”、

・ I C B Tag 418…ファイルタイプを示す→内容は [B-2] と同じ、

・ パーミッション (Permissions) 419…ユーザー別の記録・再生・削除許可情報を示す、主にファイルのセキュリティ確保を目的として使われる、

・ Allocation Descriptors 420…該当ファイルの中味が記録してある位置をExtent 毎にShort Allocation Descriptor を並べて記述する、などが記述されている。

[B-4] File Identifier Descriptor

“ [A-2-4] 情報記憶媒体上のファイル・システム情報記録内容 ” で説明したようにファイル情報を記述した記述文。

【0273】図24に示すように

・ Descriptor Tag 421…記述内容の識別子を表し、この場合は “257”、

・ ファイル特徴 (File Characteristics) 422…ファイルの種別を示し、Parent Directory、Directory、File Data、ファイル削除フラグのどれかを意味する。

・ 情報制御ブロック (Information Control Block) 423…このファイルに対応したFE位置がLong Allocation Descriptorで記述されている。

・ File Identifier 424…ディレクトリー名またはファイル名。

・ Padding 437…File Identifier Descriptor 全体の長さを調整するために付加されたダミー領域で、通常は全て “0” が記録されている。などが記述される。

【0274】 [C] UDFに従って情報記憶媒体上に記録したファイル構造記述例

“ [A-2] UDFの概要 ” で示した内容について具体的な例を用いて以下に詳細に説明する。

【0275】図19(a)に対して、より一般的なファイル・システム構造例を図25に示す。括弧内はDirectoryの中身に関する情報またはFile Dataのデータ内容が記録されている情報記憶媒体上の論理ブロック番号を示している。

【0276】図25のファイル・システム構造の情報をUDFフォーマットに従って情報記憶媒体上に記録した例を図17、図18のファイル構成 (File Structure) 486に示す。

【0277】情報記憶媒体上の未記録位置管理方法として

\* スペースビットマップ (Space Bitmap) 方法

…Space Bitmap Descriptor 470 を用いた、情報記憶媒体内記録領域の全論理ブロックに対してビットマップ的に “記録済み” または “未記録” のフラグを立てる。

\* スペーステーブル (Space Table) 方法

…Unallocated Space Entry 471 の記述方式を用いて Short Allocation Descriptor の列記として未記録の全論理ブロック番号を記載している。の2方式が存在する。

【0278】本実施の形態の説明では、説明のためわざと図17、図18に両方式を併記しているが、実際には両方が一緒に使われる (情報記憶媒体上に記録される) ことはほとんど無く、どちらか一方のみ使われている。

【0279】図17、図18に記述されている主な Descriptor の内容の概説は以下の通りである。

・ Beginning Extended Area Descriptor 445 …Volume Recognition Sequenceの開始位置を示す。

・ Volume Structure Descriptor 446…Volume の内容説明を記述、

・ Boot Descriptor 447…ブート時の処理内容を記述、

・ Terminating Extended Area Descriptor 448…Volume Recognition Sequence の終了位置を示す、

・ Partition Descriptor 450…パーティション情報 (サイズなど) を示す。

【0280】DVD-RAMでは1Volume当たり1パーティション (Partition) を原則としている。

・ Logical Volume Descriptor 454…論理ボリュームの内容を記述している、

・ Anchor Volume Descriptor Pointer 458…情報記憶媒体記録領域内での MainVolume Descriptor Sequence 449 とMain Volume Descriptor Sequence 467 の記録位置を示している。

・ Reserved(all 00h bytes) 459 ~ 465…特定の Descriptor を記録する論理セクタ番号を確保するため、その間に全て “0” を記録した調整領域を持たせている。

・ Reserve Volume Descriptor Sequence 467…Main Volume Descriptor. Sequence 449 に記録された情報のバックアップ領域。

【0281】 [D] 再生時のファイルデータへのアクセス方法

図17、図18に示したファイル・システム情報を用いて例えば File DataH432 (図25参照) のデータ内容を再生するための情報記憶媒体上のアクセス処理方法について説明する。

1) 情報記録再生装置起動時または情報記憶媒体装着時のブート (Boot) 領域として Volume Recognition Sequence 444 領域内の Boot Descriptor 447 の情報を再生に行く。

2) Boot Descriptor 447 の記述内容に沿ってブート (Boot) 時の処理が始まる。特に指定されたブート時の処理が無い場合には、始めにメインボリューム記述順 (Main Volume Descriptor Sequence) 449 領域内の論理ボリュームディスクリプター (Logical Volume Descriptor) 454 の情報を再生する。

3) Logical Volume Descriptor 454 の中に 論理ボリュームコンテンツユース (Logical Volume Contents Use) 455 が記述されており、そこに、ファイルセットディスクリプター (File Set Descriptor) 472 が記録してある位置を示す論理ブロック番号がLong Allocation

Descriptor (図 20) 形式で記述してある (図 17、図 18 の例では LAD(100) から 100 番目の論理ブロックに記録してある)。

4) 100 番目の論理ブロック (論理セクタ番号では 372 番目になる) にアクセスし、File Set Descriptor 472 を再生する。その中の Root Directory ICB 473 に Root Directory A 425 に関する File Entry が記録されている場所 (論理ブロック番号) が Long Allocation Descriptor (図 20) 形式で記述してある (図 17、図 18 の例では LAD(102) から 102 番目の論理ブロックに記録してある)。

【0282】Root Directory ICB 473 の LAD(102) に従い、

5) 102 番目の論理ブロックにアクセスし、Root Directory A 425 に関する File Entry 475 を再生し、Root Directory A 425 の中身に関する情報が記録されている位置 (論理ブロック番号) を読み込む (AD(103))。

6) 103 番目の論理ブロックにアクセスし、Root Directory A 425 の中身に関する情報を再生する。

【0283】File Data H 432 は Directory D 428 系列の下に存在するので、Directory D 428 に関する File Identifier Descriptor を探し、Directory D 428 に関する File Entry が記録してある論理ブロック番号 (図 17、図 18 には図示して無いが LAD(110)) を読み取る。

7) 110 番目の論理ブロックにアクセスし、Directory D 428 に関する File Entry 480 を再生し、Directory D 428 の中身に関する情報が記録されている位置 (論理ブロック番号) を読み込む (AD(111))。

8) 111 番目の論理ブロックにアクセスし、Directory D 428 の中身に関する情報を再生する。

【0284】File Data H 432 は SubDirectory F 430 の直接下に存在するので、SubDirectory F 430 に関する File Identifier Descriptor を探し、SubDirectory F 430 に関する File Entry が記録してある論理ブロック番号 (図 17、図 18 には図示して無いが LAD(112)) を読み取る。

9) 112 番目の論理ブロックにアクセスし、SubDirectory F 430 に関する File Entry 482 を再生し、SubDirectory F 430 の中身に関する情報が記録されている位置 (論理ブロック番号) を読み込む (AD(113))。

10) 113 番目の論理ブロックにアクセスし、SubDirectory F 430 の中身に関する情報を再生し、File Data H 432 に関する File Identifier Descriptor を探す。そしてそこから File Data H 432 に関する File Entry が記録してある論理ブロック番号 (図 17、図 18 には図示して無いが LAD(114)) を読み取る。

11) 114 番目の論理ブロックにアクセスし、File D

ata H 432 に関する File Entry 484 を再生し File Data H 432 のデータ内容 489 が記録されている位置を読み取る。

12) File Data H 432 に関する File Entry 484 内に記述されている論理ブロック番号順に情報記憶媒体から情報を再生して File Data H 432 のデータ内容 489 を読み取る。

【0285】[E] 特定のファイルデータ内容変更方法 図 17、図 18 に示したファイル・システム情報を用いて例えば、File Data H 432 のデータ内容を変更する場合のアクセスも含めた処理方法について説明する。

1) File Data H 432 の変更前後でのデータ内容の容量差を求め、その値を 2048 Bytes で割り、変更後のデータを記録するのに論理ブロックを何個追加使用するかまたは何個不要になるかを事前に計算しておく。

2) 情報記録再生装置起動時または情報記憶媒体装着時のブート (Boot) 領域として Volume Recognition Sequence 444 領域内の Boot Descriptor 447 の情報を再生に行く。Boot Descriptor 447 の記述内容に沿ってブート (Boot) 時の処理が始まる。

【0286】特に指定されたブート時の処理が無い場合には

3) 始めに Main Volume Descriptor Sequence 449 領域内の Partition Descriptor 450 を再生し、その中に記述してある Partition Contents Use 451 の情報を読み取る。この Partition Contents Use 451 (Partition Header Descriptor と呼ぶ) の中に Space Table もしくは Space Bitmap の記録位置が示してある。

・Space Table 位置は Unallocated Space Table 452 の欄に Short Allocation Descriptor の形式で記述されている (図 17、図 18 の例では AD(50))。また  
・Space Bitmap 位置は Unallocated Space Bitmap 453 の欄に Short Allocation Descriptor の形式で記述されている。(図 17、図 18 の例では AD(0))

4) 3) で読み取った Space Bitmap が記述してある論理ブロック番号 (0) へアクセスする。Space Bitmap Descriptor 470 から Space Bitmap 情報を読み取り、未記録の論理ブロックを探し、1) の計算結果分の論理ブロックの使用を登録する (Space Bitmap Descriptor 460 情報の書き換え処理)。もしくは

4') 3) で読み取った Space Table が記述してある論理ブロック番号 (50) へアクセスする。Space Table の USE(AD(\*), AD(\*), ..., AD(\*)) 471 から未記録の論理ブロックを探し、1) の計算結果分の論理ブロックの使用を登録する。

【0287】(Space Table 情報の書き換え処理)

\* 実際の処理は “4)” か “4' ” かどちらか一方の処理を行う。

5) 次に、Main Volume Descriptor Sequence 449 領域内の Logical Volume Descriptor 454 の情報を再生す

る。

6) Logical Volume Descriptor 454 の中に Logical Volume Contents Use 455 が記述されており、そこに File Set Descriptor 472 が記録してある位置を示す論理ブロック番号が Long Allocation Descriptor (図 20) 形式で記述してある (図 17、図 18 の例では LAD(100) から 100 番目の論理ブロックに記録してある)。

7) 100 番目の論理ブロック (論理セクタ番号では 400 番目になる) にアクセスし、File Set Descriptor 472 を再生する。その中の Root Directory ICB 473 に Root Directory A 425 に関する File Entry が記録されている場所 (論理ブロック番号) が Long Allocation Descriptor (図 20) 形式で記述してある (図 17、図 18 の例では LAD(102) から 102 番目の論理ブロックに記録してある)。

【0288】 Root Directory ICB 473 の LAD(102) に従い、

8) 102 番目の論理ブロックにアクセスし、Root Directory A 425 に関する File Entry 475 を再生し、Root Directory A 425 の中味に関する情報が記録されている位置 (論理ブロック番号) を読み込む (AD(103))。

9) 103 番目の論理ブロックにアクセスし、Root Directory A 425 の中味に関する情報を再生する。

【0289】 File Data H 432 は Directory D 428 系列の下に存在するので、Directory D 428 に関する File Identifier Descriptor を探し、Directory D 428 に関する File Entry が記録してある論理ブロック番号 (図 17、図 18 には図示して無いが LAD(110)) を読み取る。

10) 110 番目の論理ブロックにアクセスし、Directory D 428 に関する File Entry 480 を再生し、Directory D 428 の中身に関する情報が記録されている位置 (論理ブロック番号) を読み込む (AD(111))。

11) 111 番目の論理ブロックにアクセスし、Directory D 428 の中身に関する情報を再生する。

【0290】 File Data H 432 は SubDirectory F 430 の直接下に存在するので、SubDirectory F 430 に関する File Identifier Descriptor を探し、SubDirectory F 430 に関する File Entry が記録してある論理ブロック番号 (図 17、図 18 には図示して無いが LAD(112)) を読み取る。

12) 112 番目の論理ブロックにアクセスし、SubDirectory F 430 に関する File Entry 482 を再生し、SubDirectory F 430 の中身に関する情報が記録されている位置 (論理ブロック番号) を読み込む (AD(113))。

13) 113 番目の論理ブロックにアクセスし、SubDir 50

ectory F 430 の中身に関する情報を再生し、File Data H 432 に関する File Identifier Descriptor を探す。そしてそこから File Data H 432 に関する File Entry が記録してある論理ブロック番号 (図 17、図 18 には図示して無いが LAD(114)) を読み取る。14) 114 番目の論理ブロックにアクセスし、File Data H 432 に関する File Entry 484 を再生し File Data H 432 のデータ内容 489 が記録されている位置を読み取る。

15) 4) か 4') で追加登録した論理ブロック番号も加味して変更後の File Data H 432 のデータ内容 489 を記録する。

【0291】 [F] 特定のファイルデータ/ディレクトリー消去処理方法

例として File Data H 432 または SubDirectory F 430 を消去する方法について説明する。

【0292】 情報記録再生装置起動時または情報記憶媒体装着時のブート (Boot) 領域として Volume Recognition Sequence 444 領域内の Boot Descriptor 447 の情報を再生に行く。Boot Descriptor 447 の記述内容に沿ってブート (Boot) 時の処理が始まる。特に指定されたブート時の処理が無い場合には、始めに Main Volume Descriptor Sequence 449 領域内の Logical Volume Descriptor 454 の情報を再生する。

3) Logical Volume Descriptor 454 の中に Logical Volume Contents Use 455 が記述されており、そこに File Set Descriptor 472 が記録してある位置を示す論理ブロック番号が Long Allocation Descriptor (図 20) 形式で記述してある (図 17、図 18 の例では LAD(100) から 100 番目の論理ブロックに記録してある)。

4) 100 番目の論理ブロック (論理セクタ番号では 400 番目になる) にアクセスし、File Set Descriptor 472 を再生する。その中の Root Directory ICB 473 に Root Directory A 425 に関する File Entry が記録されている場所 (論理ブロック番号) が Long Allocation Descriptor (図 20) 形式で記述してある (図 17、図 18 の例では LAD(102) から 102 番目の論理ブロックに記録してある)。

【0293】 Root Directory ICB 473 の LAD(102) に従い、

5) 102 番目の論理ブロックにアクセスし、Root Directory A 425 に関する File Entry 475 を再生し、Root Directory A 425 の中身に関する情報が記録されている位置 (論理ブロック番号) を読み込む (AD(103))。

6) 103 番目の論理ブロックにアクセスし、Root Directory A 425 の中身に関する情報を再生する。

【0294】 File Data H 432 は Directory D 428 系列の下に存在するので、Directory D 428 に関す

るFile Identifier Descriptorを探し、Directory D 4 2 8 に関する File Entry が記録してある論理ブロック番号 (図 17、図 18 には図示して無いが LAD(1 1 0)) を読み取る。

7) 1 1 0 番目の論理ブロックにアクセスし、Directory D 4 2 8 に関するFile Entry 480 を再生し、Directory D 4 2 8 の中身に関する情報が記録されている位置 (論理ブロック番号) を読み込む (AD(1 1 1))。

8) 1 1 1 番目の論理ブロックにアクセスし、Directory D 4 2 8 の中味に関する情報を再生する。

【0 2 9 5】File Data H 432 は SubDirectory F 4 3 0 の直接下に存在するので、SubDirectory F 4 3 0 に関する File Identifier Descriptor を探す。

《 SubDirectory F 4 3 0 を消去する場合には 》 SubDirectory F 4 3 0 に関するFile Identifier Descriptor内のFile Characteristics 4 2 2 (図 2 4) に “ファイル削除フラグ” を立てる。

【0 2 9 6】SubDirectory F 4 3 0 に関する File Entry が記録してある論理ブロック番号 (図 17、図 18 には図示して無いが LAD(1 1 2)) を読み取る。

9) 1 1 2 番目の論理ブロックにアクセスし、SubDirectory F 4 3 0 に関するFile Entry 482を再生し、SubDirectory F 4 3 0 の中味に関する情報が記録されている位置 (論理ブロック番号) を読み込む (AD(1 1 3))。

1 0) 1 1 3 番目の論理ブロックにアクセスし、SubDirectory F 4 3 0 の中味に関する情報を再生し、File Data H 432 に関する File Identifier Descriptor を探す。

《 File Data H 432 を消去する場合には 》 File Data H 432 に関する File Identifier Descriptor 内の File Characteristics 4 2 2 (図 2 4) に “ファイル削除フラグ” を立てる。さらにそこからFile Data H 4 32 に関する File Entryが記録してある論理ブロック番号 (図 17、図 18 には図示して無いが LAD(1 1 4)) を読み取る。

1 1) 1 1 4 番目の論理ブロックにアクセスし、File Data H 432 に関するFile Entry 484 を再生し File Data H 432 のデータ内容 4 8 9 が記録されている位置を読み取る。

《 File Data H 432 を消去する場合には 》 以下の方法で File Data H 432 のデータ内容 4 8 9 が記録されていた論理ブロックを解放する (その論理ブロックを未記録状態に登録する)。

1 2) 次に Main Volume Descriptor Sequence 449 領域内の Partition Descriptor 450 を再生し、その中に記述してあるPartition Contents Use 451 の情報を読み取る。この Partition Contents Use 451 (Partition Header Descriptor と呼ぶ) の中に Space Table もしくはSpace Bitmap の記録位置が示してある。

・ Space Table 位置は、Unallocated Space Table 452 の欄にShort AllocationDescriptorの形式で記述されている (図 17、図 18 の例ではAD(5 0))。また、

・ Space Bitmap 位置は Unallocated Space Bitmap 453 の欄に Short Allocation Descriptor の形式で記述されている (図 17、図 18 の例ではAD(0))。

1 3) 1 2) で読み取った Space Bitmap が記述してある論理ブロック番号 (0) へアクセスし、1 1) の結果得られた “解放する論理ブロック番号” を SpaceBitmap

Descriptor 470 に書き換える。もしくは

1 3') 1 2) で読み取った Space Table が記述してある論理ブロック番号 (5 0) へアクセスし、1 1) の結果得られた “解放する論理ブロック番号” を Space Table に書き換える。

\* 実際の処理は “1 3)” か “1 3' )” かどちらか一方の処理を行う。

《 File Data H 432 を消去する場合には 》 1 2) 1 0) ~ 1 1) と同じ手順を踏んで File Data I 433 のデータ内容 4 9 0 が記録されている位置を読み取る。

20 1 3) 次に Main Volume Descriptor Sequence 449 領域内の Partition Descriptor 450 を再生し、その中に記述してあるPartition Contents Use 451 の情報を読み取る。この Partition Contents Use 451 (Partition Header Descriptor と呼ぶ) の中に Space Table もしくはSpace Bitmap の記録位置が示してある。

・ Space Table 位置は Unallocated Space Table 452 の欄に Short AllocationDescriptor の形式で記述されている (図 17、図 18 の例ではAD(5 0))。また

・ Space Bitmap 位置は Unallocated Space Bitmap 453 の欄に Short Allocation Descriptor の形式で記述されている (図 17、図 18 例ではAD(0))。

1 4) 1 3) で読み取った Space Bitmap が記述してある論理ブロック番号 (0) へアクセスし、1 1) と 1 2) の結果得られた “解放する論理ブロック番号” を Space Bitmap Descriptor 470 に書き換える。もしくは 1 4') 1 3) で読み取った Space Table が記述してある論理ブロック番号 (5 0) へアクセスし、1 1) と 1 2) の結果得られた “解放する論理ブロック番号” を Space Table に書き換える。

40 \* 実際の処理は “1 4)” か “1 4' )” かどちらか一方の処理を行う。

【0 2 9 7】 [G] ファイルデータ/ディレクトリーの追加処理

例として Sub Directory F 4 3 0 の下に新たにファイルデータもしくはディレクトリーを追加する時のアクセス・追加処理方法について説明する。

1) ファイルデータを追加する場合には追加するファイルデータ内容の容量を調べ、その値を 2 0 4 8 Bytes で割り、ファイルデータを追加するために必要な論理ブロック数を計算しておく。

50



2) 情報記録再生装置起動時または情報記憶媒体装着時のブート ( Boot ) 領域として Volume Recognition Sequence 444 領域内の Boot Descriptor 447 の情報を再生に行く。Boot Descriptor 447 の記述内容に沿ってブート ( Boot ) 時の処理が始まる。特に指定されたブート時の処理が無い場合には

3) 始めに Main Volume Descriptor Sequence 449 領域内の Partition Descriptor 450 を再生し、その中に記述してある Partition Contents Use 451 の情報を読み取る。この Partition Contents Use 451 ( Partition Header Descriptor と呼ぶ ) の中に Space Table もしくは Space Bitmap の記録位置が示してある。

・ Space Table 位置は、Unallocated Space Table 452 の欄に Short Allocation Descriptor の形式で記述されている ( 図 17、図 18 の例では AD(50) )。また

・ Space Bitmap 位置は Unallocated Space Bitmap 453 の欄に Short Allocation Descriptor の形式で記述されている ( 図 17、図 18 例では AD(0) )。

4) 3) で読み取った Space Bitmap が記述してある論理ブロック番号 (0) へアクセスする。Space Bitmap Descriptor 470 から Space Bitmap 情報を読み取り、未記録の論理ブロックを探し、1) の計算結果分の論理ブロックの使用を登録する ( Space Bitmap Descriptor 460 情報の書き換え処理)。もしくは、

4') 3) で読み取った Space Table が記述してある論理ブロック番号 (50) へアクセスする。Space Table の USE(AD(\*), AD(\*), ..., AD(\*)) 471 から未記録の論理ブロックを探し、1) の計算結果分の論理ブロックの使用を登録する。

【0298】 ( Space Table 情報の書き換え処理 )

\* 実際の処理は “4)” か “4' )” かどちらか一方の処理を行う。

5) 次に Main Volume Descriptor Sequence 449 領域内の Logical Volume Descriptor 454 の情報を再生する。

6) Logical Volume Descriptor 454 の中に Logical Volume Contents Use 455 が記述されており、そこに File Set Descriptor 472 が記録してある位置を示す論理ブロック番号が Long Allocation Descriptor ( 図 20 ) 形式で記述してある ( 図 17、図 18 の例では LAD(100) から 100 番目の論理ブロックに記録してある )。

7) 100 番目の論理ブロック ( 論理セクタ番号では 400 番目になる ) にアクセスし、File Set Descriptor 472 を再生する。その中の Root Directory ICB 473 に Root Directory A 425 に関する File Entry が記録されている場所 ( 論理ブロック番号 ) が Long Allocation Descriptor ( 図 20 ) 形式で記述してある ( 図 17、図 18 の例では LAD(102) から 102 番目の論理ブロックに記録してある )。

【0299】 Root Directory ICB 473 の LAD(102) に従い、

8) 102 番目の論理ブロックにアクセスし、Root Directory A 425 に関する File Entry 475 を再生し、Root Directory A 425 の中身に関する情報が記録されている位置 ( 論理ブロック番号 ) を読み込む ( AD(103) )。

9) 103 番目の論理ブロックにアクセスし、Root Directory A 425 の中身に関する情報を再生する。

10 【0300】 Directory D 428 に関する File Identifier Descriptor を探し、Directory D 428 に関する File Entry が記録してある論理ブロック番号 ( 図 17、図 18 には図示して無いが LAD(110) ) を読み取る。

10) 110 番目の論理ブロックにアクセスし、Directory D 428 に関する File Entry 480 を再生し、Directory D 428 の中身に関する情報が記録されている位置 ( 論理ブロック番号 ) を読み込む ( AD(111) )。

20 11) 111 番目の論理ブロックにアクセスし、Directory D 428 の中身に関する情報を再生する。

【0301】 Sub Directory F 430 に関する File Identifier Descriptor を探し、Sub Directory F 430 に関する File Entry が記録してある論理ブロック番号 ( 図 17、図 18 には図示して無いが LAD(112) ) を読み取る。

12) 112 番目の論理ブロックにアクセスし、Sub Directory F 430 に関する File Entry 482 を再生し、Sub Directory F 430 の中身に関する情報が記録されている位置 ( 論理ブロック番号 ) を読み込む ( AD(113) )。

30 13) 113 番目の論理ブロックにアクセスし、Sub Directory F 430 の中身に関する情報内に新たに追加するファイルデータもしくはディレクトリーの File Identifier Descriptor を登録する。

14) 4) または 4' ) で登録した論理ブロック番号位置にアクセスし、新たに追加するファイルデータもしくはディレクトリーに関する File Entry を記録する。

40 15) 14) の File Entry 内の Short Allocation Descriptor に示した論理ブロック番号位置にアクセスし、追加するディレクトリーに関する Parent Directory の File Identifier Descriptor もしくは追加するファイルデータのデータ内容を記録する。

【0302】 図 26 (a) に示す映像情報や音楽情報の録再可能な情報記憶媒体 ( Optical Disk 1001 ) に記録される情報の記録情報内容 ( データ構造 ) について以下に説明する。

【0303】 情報記憶媒体 ( Optical Disk 1001 ) 上に記録される情報の概略的なデータ構造としては図 26

50 (b) に示すように内周側 ( Inner Side 1006 ) から順

に、

・光反射面が凹凸形状をしたエンボスデータゾーン (Embossed data Zone) と表面が平坦 (鏡面) なミラーゾーン (Mirror Zone) と情報の書き換えが可能なりライタブルデータゾーン (Rewritable data Zone) を有したリードインエリア (Lead-in Area) 1002 ユーザーによる記録・書き換えが可能な Rewritable data Zone に記録され、オーディオアンドビデオデータ (Audio & Video Data) のファイルまたはボリューム全体に関する情報が記録されたボリュームアンドファイルマネージメントインフォメーション (Volume & File Manager Information) 1003

・ユーザーによる記録・書き換えが可能な Rewritable data Zone からなるデータエリア (Data Area) 1004  
・情報の書き換えが可能な Rewritable data Zone で構成されるリードアウトエリア (Lead-out Area) 1005に分かれている。

【0304】Lead-in Area 1002 の Embossed data Zone には、

・DVD-ROM/—RAM/—Rなどのディスクタイプ、ディスクサイズ、記録密度、記録開始/記録終了位置を示す物理セクタ番号などの情報記憶媒体全体に関する情報、

・記録パワーと記録パルス幅、消去パワー、再生パワー、記録・消去時の線速などの記録・再生・消去特性に関する情報、

・製造番号などそれぞれ1枚ずつの情報記憶媒体の製造に関する情報、が事前に記録され、Lead-in Area 1002 の Rewritable data Zone と Lead-out Area 1005 の Rewritable data Zoneにはそれぞれ

・各情報記憶媒体ごとの固有ディスク名記録領域、  
・試し記録領域 (記録消去条件の確認用)、  
・Data Area 1004内の欠陥領域に関する管理情報記録領域、を持ち、上記領域へ情報記録再生装置による記録が可能になっている。

【0305】Lead-in Area 1002 と Lead-out Area 1005 の間に挟まれた Data Area 1004には、図26 (c) に示すように Computer Data と Audio & Video Data の混在記録が可能になっている。Computer Data と Audio & Video Data の記録順序、各記録情報サイズは任意で、コンピュータデータ (Computer Data) が記録されてある場所を Computer Data Area 1008、1010 と呼び Audio & Video Dataが記録された領域を Audio & Video Data Area 1009 と名付ける。

【0306】Audio & Video Data Area 1009内に記録された情報のデータ構造は図26 (d) のように、

・コントロール情報のためのアンカーポインターコントロール情報 (Anchor Pointer for Control Information) 1015: Audio & Video Data Area 1009 内の最初の位置に配置され、Audio & Video Data Area 1009 内の

Control Information 1011 が記録されている先頭位置 (先頭アドレス) を示す情報、

・コントロールインフォメーション (Control Information) 1011: 録画 (録音)、再生、編集、検索の各処理を行う時に必要な制御情報、

・ビデオオブジェクト (Video Objects) 1012: Video Data 中身 (Contents) の録画情報、

・ピクチャーオブジェクト (Picture Objects) 1013: Still画像、Slide画像などの静止画像情報、

・オーディオオブジェクト (Audio Objects) 1014: Audio Data 中身 (Contents) の録音情報、

・サムネールオブジェクト (Thumbnail Objects) 1016: Video Data 内の見たい場所を検索する場合、または編集時に利用されるサムネール (Thumbnail) などの情報、などから構成される。

【0307】図26 (d) の Video Objects 1012、Picture Objects 1013、Audio Objects 1014、Thumbnail Objects 1016 はそれぞれコンテンツ内容 (データ中身) 毎に分類した情報の集まり (グループ) を意味している。従って Audio & Video Data Area 1009 に記録された全ての映像情報は Video Objects 1012 に含まれ、全静止画像情報は Picture Objects 1013 に含まれ、全オーディオ・音声情報は Audio Objects 1014 に含まれ、映像情報の管理・検索に用いられる全サムネール情報は Thumbnail Objects 1016 に含まれる。

【0308】なお、図27で示した VOB (Video Object) 1403 とは AVFile 1401 内に記録された情報の塊 (まとまり) を示し、図26 (d) の Video Objects 1012 とは異なる定義になっている。類似した用語を用いているが、全く異なる意味で使用しているので注意が要する。

【0309】さらに Control Information 1011 の内容は、

・エーブイデータコントロールインフォメーション (AV Data Control Information) 1101: Video Objects 1012 内のデータ構造を管理し、また情報記憶媒体である Optical Disk 1001 上での記録位置に関する情報の管理情報、

・プレイバックコントロールインフォメーション (Playback Control Information) 1021: 再生時に必要な制御情報、

・レコーディングコントロールインフォメーション (Recording Control Information) 1022: 記録 (録画・録音) 時に必要な制御情報

・エディットコントロールインフォメーション (Edit Control Information) 1023: 編集時に必要な制御情報、

・サムネールコントロールインフォメーション (Thumbnail Control Information) 1024: Video Data 内の見たい場所検索用または編集用サムネール (Thumbnail

10

20

30

40

50

Object) に関する管理情報、などを有している。

【0310】また、図26(e)に示されている AV Data Control Information 1101 内のデータ構造は、

・アロケーションマップテーブル (Allocation Map Table) 1105 : 情報記憶媒体 (Optical Disk 1001) 上の実際の配置に沿ったアドレス設定、既記録・未記録エリアの識別などに関する情報、

・ビデオタイトルセットインフォメーション (Video Title Set Information) 1106 : 図27に示すように AV File 1401 内の全体的な情報内容を示し、各ビデオオブジェクト (VOB) 間のつながり情報、管理・検索のための複数 VOB のグルーピング情報や タイムマップテーブル (Time Map Table) などの時間情報、

・ビデオオブジェクトコントロールインフォメーション (Video Object Control Information) 1107 : 図27(c)に示すように AV File 1401 内の各 VOB 個々に関する情報を示し、VOB 毎の属性 (特性) 情報や VOB 内個々の VOBUnit に関する情報、

・プログラムチェーンコントロールインフォメーション (PGC Control Information) 1103 : 映像情報再生プログラム (シーケンス) に関する情報、

・セルプレイバックインフォメーション (Cell Playback Information) 1108 : 再生時の映像情報基本単位の情報構造に関する情報、から構成されている。図26の(f)までを概観すると上記の内容になるが、個々の情報に対して以下に若干の説明補足を行う。Volume & File Manager Information 1003 には、

・ Volume 全体に関する情報、  
・含まれる PC データのファイル数、AV データに関するファイル数、  
・記録レイヤー情報、などに関する情報が記録されている。特に記録レイヤー情報として

・構成レイヤー数 (例: RAM/ROM 2 層ディスク 1 枚は 2 レイヤー、ROM 2 層ディスク 1 枚も 2 レイヤー、片面ディスク n 枚は n レイヤーとしてカウントする)、

・各レイヤー毎に割り付けた論理セクタ番号範囲テーブル (各レイヤー毎の容量)、

・各レイヤー毎の特性 (例: DVD-RAM ディスク、RAM/ROM 2 層ディスクの RAM 部、CD-ROM、CD-R など)、

・各レイヤー毎の RAM 領域での Zone 単位での割付け論理セクタ番号範囲テーブル (各レイヤー毎の書換え可能領域容量情報も含む)、

・各レイヤー毎の独自の ID 情報 (… 多連ディスクパック内のディスク交換を発見するため)、が記録され、多連ディスクパックや RAM/ROM 2 層ディスクに対しても連続した論理セクタ番号を設定して 1 個の大きな Volume 空間として扱えるようになっている。

【0311】Playback Control Information 1021 で

は、

・PGCを統合した再生シーケンスに関する情報、

・上記に関連して情報記憶媒体を VTR や DVC のように一本のテープと見なした擬似的記録位置を示す情報 (記録された全ての Cell を連続して再生するシーケンス)、

・異なる映像情報を持つ複数画面同時再生に関する情報、

・検索情報 (… 検索カテゴリー毎に対応する Cell ID とその Cell 内の開始時刻のテーブルが記録され、ユーザーがカテゴリーを選択して該当映像情報への直接アクセスを可能にする情報) などが記録されている。また Recording Control Information 1022 には、

・番組予約録画情報などが記録されている。

【0312】更に、Edit Control Information 1023 では、

・各 PGC 単位の特種編集情報 (… 該当時間設定情報と特種編集内容が EDL 情報として記載されている)、

・ファイル変換情報 (… AV ファイル内の特定部分を AVI ファイルなどの PC 上で特種編集を行えるファイルに変換し、変換後のファイルを格納する場所を指定) が記録されている。

【0313】また、Thumbnail Control Information 1024 には

・Thumbnail Objects 1016 に関する管理情報 (… Audio & Video Data Area 1009 内での 1 枚毎のサムネール画像の記録場所と各サムネール画像が関係する VOB または Cell の指定情報、各サムネール画像が関係する VOB または Cell 内の場所情報 など) (VOB、Cell に付いては図27の内容説明場所所で詳細に説明する) が記載されている。

【0314】図26(b)の Data Area 1004 内に記録される全情報はファイル単位で記録され、各データファイル間の関係は図28に示すようにディレクトリ構造により管理されている。

【0315】ルートディレクトリ 1450 の下には記録されるファイル内容毎に分類が容易なように複数のサブディレクトリ 1451 が設置されている。図28の実施の形態では図26(c)の Computer Data Area 1008、1010 に記録される Computer Data に関する各データファイルは Computer Data 保存用 サブディレクトリ 1457 の下に記録され、Audio & Video Data Area 1009 に記録される Audio & Video Data は リライタブルビデオタイトルセット RWV\_TS1452 の下に記録される。また、DVDVideo ディスクに記録されている映像情報を図26(a)にコピーする場合には ビデオタイトルセット VIDEO\_TS1455 とオーディオタイトルセット AUDIO\_TS1456 の下にコピーする。

【0316】図26(d)のControl Information 1011情報は録再ビデオ管理データとして1個のファイルとして記録される。図28の実施の形態ではそのファイル名はRWVIDEO\_CONTROL.IFOと名付けている。更にバックアップ用に同一の情報をRWVIDEO\_CONTROL.BUPと言うファイル名で記録してある。このRWVIDEO\_CONTROL.IFOとRWVIDEO\_CONTROL.BUP 2ファイルは従来のコンピューター用ファイルとして取り扱う。

【0317】図28の実施の形態では図26(d)のVideo Objects 1012に属する全映像情報データはRWVIDEO.VOBと言うファイル名のVideo Objects File 1447にまとめて記録されている。つまり図26(d)のVideo Objects 1012に属する全映像情報データは図27(b)に示すように1個のVTS (Video Title Set 1402)内で連続に結合され、Video Objects File 1447と言う1個のファイル内に連続して記録される。(すなわちPTT (Part\_of\_Title) 1407、1408毎にファイルを分割する事無く、全て1個のファイル内にまとめて記録される。)

またPicture Objects 1013に属する全静止画像情報データはRWPICTURE.POBと言うファイル名のPicture Objects File 1448内にまとめて記録される。Picture Objects 1013内には複数の静止画像情報が含まれている。デジタルカメラでは1枚の静止画像毎に別々のファイルとして記録する記録形式を採用しているが、本発明実施の形態ではデジタルカメラの記録形式とは異なり、Picture Objects 1013内に含まれる複数の静止画像全てを図27と同様な形式で連続的につなぎ、RWPICTURE.POBと言うファイル名の1枚のPicture Objects File 1448内にまとめて記録する所に本発明実施の形態の特徴がある。

【0318】同様に、Audio Objects 1014に属する全音声情報もRWAUDIO.AOBと言うファイル名の1個のAudio Objects File 1449内にまとめて記録され、Thumbnail Objects 1016に属する全サムネール情報もRWTHUMBNAIL.TOBと言う名のThumbnail Objects File 1458内にまとめて記録される。

【0319】なおVideo Objects File 1447、Picture Objects File 1448、Audio Objects File 1449、Thumbnail Objects File 1458は全てAV File 1401として取り扱われる。

【0320】図26には図示していないが、映像の録画再生時に利用できる録再付加情報1454を同時に記録することができ、その情報はまとめて1個のファイルとして記録され、図28の実施の形態ではRWADD.DATと言うファイル名が付いている。図29に本発明におけるAVファイル内のLBNとAV Addressの関係を示す。AV File 1401の情報は図29(a)に示すように情報記憶媒体上に物理的に点在して記録されている。今、AV File 1401がExtent #  $\alpha$  3166、Extent

#  $\gamma$  3168、Extent #  $\delta$  3169に分散記録され、File Entry上でのエン트리順がExtent #  $\delta$  3169、Extent #  $\gamma$  3168、Extent #  $\alpha$  3166に設定された場合を考える。録再アプリ1が管理するAV Addressは情報記憶媒体上の記録位置には全く無関係にFile Entryに登録されたExtentを連続的に接続し、しかもFile Entry上でのエン트리順が若い順に小さなAV Address値を設定したものである。AV Addressは、Extentにより管理されていることになる。例えば、Extent #  $\gamma$  3168の最初のセクタのLBN値は図29(a)に示すように“c”で、最後のセクタのLBN値が“d-1”だった場合、同様のセクタのAV Address値は図29(b)に示すようにそれぞれ“f-e”、“(f-e) + (d-c) - 1”となる。

【0321】映像情報は従来のコンピューター情報と異なり、記録時の連続性の保証が必須条件となる。以下にこの記録時の連続性を阻害する理由の説明と、記録時の連続性を保証する方法について説明する。

【0322】図30には、記録時の連続性を説明するための記録系システム概念図を示す。外部から送られてきた映像情報はバッファメモリ(半導体メモリ)BM219に一時保管される。粗アクセス1334と密アクセス1333動作により光学ヘッド202が情報記憶媒体201上の記録位置へ到達すると、上記バッファメモリ(半導体メモリ)BM219に一時保管された映像情報が光学ヘッド202を経由して情報記憶媒体201上に記録される。バッファメモリ(半導体メモリ)BM219から光学ヘッド202へ送られる映像情報の転送レートをここでは物理転送レート(PTR:Physical Transmission Rate)1387と定義する。外部からバッファメモリ(半導体メモリ)BM219へ転送される映像情報の転送レートの平均値をシステム転送レート(STR: System Transmission Rate)1388とここで定義する。一般には物理転送レートPTRとシステム転送レートSTRとは異なる値になっている。

【0323】情報記憶媒体201上の異なる場所に順次映像情報を記録するには光学ヘッド202の集光スポット位置を移動させるアクセス操作が必要となる。大きな移動に対しては光学ヘッド202全体を動かす粗アクセス1334を行い、微少距離の移動には図示していないがレーザー光集光用の対物レンズのみを動かす密アクセス1333を行う。

【0324】図31と図32は、外部から転送されて来る映像情報に対して光学ヘッド202のアクセス制御を行いながら情報記憶媒体201上の所定位置に順次映像情報を記録する場合のバッファメモリ(半導体メモリ)BM219内に一時的に保存される映像情報量の時間的推移を示す。一般にシステム転送レートSTRより物理転送レートPTRの方が速いので映像情報記録時間1393、1397、1398の間ではバッファメモ

メモリ 219 内に一時的に保存される映像情報量は減少し続ける。バッファメモリ 219 内に一時保管される映像情報量が“0”になる。その時には連続的に転送されて来る映像情報はバッファメモリ 219 内に一時保管される事無くそのまま連続的に情報記憶媒体 201 上に記録され、バッファメモリ 219 内に一時的に保存される映像情報量は“0”の状態のまま推移する。

【0325】次に、それに続けて情報記憶媒体 201 上の別位置に映像情報を記録する場合には、記録動作に先立ち光学ヘッド 202 のアクセス処理が実行される。光学ヘッド 202 のアクセス期間として図 32 に示すように粗アクセス時間 1348、1376、密アクセス時間 1342、1343 と情報記憶媒体 201 の回転待ち時間 1345、1346 の 3 種類の時間が必要となる。この期間は情報記憶媒体 201 への記録処理が行われないので、この期間の物理転送レート PTR 1387 は実質的に“0”の状態になっている。それに反して外部からバッファメモリ（半導体メモリ）BM 219 へ送られる映像情報の平均システム転送レート STR 1388 は不変に保たれるため、バッファメモリ（半導体メモリ）BM 219 内の映像情報一時保存量 1341 は増加の一途をたどる。

【0326】光学ヘッド 202 のアクセスが完了し、再度情報記憶媒体 201 への記録処理を開始する（映像情報記録時間 1397、1398 の期間）とバッファメモリ（半導体メモリ）BM 219 内の映像情報一時保存量 1341 はふたたび減少する。この減少勾配は、〔平均システム転送レート STR 1332〕－〔物理転送レート PTR 1331〕

で決まる。

【0327】その後、情報記憶媒体上の記録位置の近傍位置に再度アクセスする場合には密アクセスのみでアクセス可能なので密アクセス時間 1363、1364、1365、1366 と回転待ち時間 1367、1368、1369、1370 のみが必要となる。

【0328】このように連続記録を可能にする条件として“特定期間内のアクセス回数の上限值”で規定するこ

$$STR \times (\Sigma (SAT_i + JAT_i + MWT_i))$$

$$STR \times n \times (SAT_a + JAT_a + MWT_a) \quad (1)$$

となる。この値と n 回アクセスして映像情報記録時にバッファメモリ 219 から情報記憶媒体 201 へ転送

$$(PTR - STR) \times \Sigma DWT_i \quad (PTR - STR) \times n \cdot DWT_a \quad (2)$$

との間で

$$(PTR - STR) \times n \cdot DWT_a \geq$$

$$STR \times n \times (SAT_a + JAT_a + MWT_a)$$

$$\text{すなわち } (PTR - STR) \times DWT_a \geq$$

$$STR \times (SAT_a + JAT_a + MWT_a) \quad (3)$$

の関係にある時に、外部システム側から見た映像情報記録時の連続性が確保される。ここで 1 回のアクセスに必

$$(PTR - STR) \times DWT_a \geq STR \times Ta$$

とが出来る。以上は連続記録について説明したが、連続再生を可能にする条件も上述した内容と類似の理由から“特定期間内のアクセス回数の上限值”で規定することが出来る。

【0329】連続記録を絶対的に不可能にするアクセス回数条件について図 31 を用いて説明する。最もアクセス頻度の高い場合は図 31 のように映像情報記録時間 1393 が非常に短く、密アクセス時間 1363、1364、1365、1366 と回転待ち時間 1367、1368、1369、1370 のみが連続して続く場合になる。この場合には物理転送レート PTR 1387 がどんなに早くても記録連続性の確保が不可能になる。今バッファメモリ 219 の容量を BM で表すと、 $BM \div STR$  の期間でバッファメモリ 219 内の一時保管映像情報が満杯となり、新たに転送されて来た映像情報をバッファメモリ（半導体メモリ）219 内への一時保管が不可能となる。その結果、バッファメモリ（半導体メモリ）219 内への一時保管がなされなかった分の映像情報が連続記録出来なくなる。

【0330】図 32 に示すように映像情報記録時間とアクセス時間のバランスが取れ、グローバルに見てバッファメモリ 219 内の一時保管映像情報がほぼ一定に保たれている場合にはバッファメモリ 219 内の一時保管映像情報が溢れる事無く外部システムから見た映像情報記録の連続性が確保される。各粗アクセス時間を  $SAT_i$ （対物レンズの Seek Access Time）、n 回アクセス後の平均粗アクセス時間を  $SAT_a$  とし、各アクセス毎の映像情報記録時間を  $DWT_i$ （Data Write Time）、n 回アクセス後の平均値として求めた 1 回毎のアクセス後に情報記憶媒体上に映像情報を記録する平均的な映像情報記録時間を  $DWT_a$  とする。また 1 回毎の回転待ち時間を  $MWT_i$ （Spindle Motor Wait Time）とし、n 回アクセス後の平均回転待ち時間を  $MWT_a$  とする。

【0331】n 回アクセスした場合の全アクセス期間での外部からバッファメモリ 219 へ転送される映像情報データ量は

要な平均時間を  $Ta$  とすると  $Ta = SAT_a + JAT_a + MWT_a$  (4) となるので、(3) 式は

$$(5)$$

と変形される。本発明では一回のアクセス後に連続記録するデータサイズの下限値に制限を加えて平均アクセス回数を減らす所に大きな特徴がある。一回のアクセス

$$DWTa \geq STR \times Ta / (PTR - STR) \quad (6)$$

と変形できる。

【0332】Contiguous Data Area サイズ CDAS は

$$CDAS \geq STR \times PTR \times Ta / (PTR - STR) \quad (8)$$

となる。(8)式から連続記録を可能にするための Contiguous Data Area サイズの下限値を規定できる。

【0333】粗アクセス、密アクセスに必要な時間は情報記録再生装置の性能により大きく異なる。今仮に SA Ta 200 ms (9) を仮定する。前述したように例えば MWTa 18 ms、JATa 5 ms を計算に使う。

【0334】2.6 GB DVD-RAM では、

$$TR = 11.08 \text{ Mbps} \quad (10)$$

である。MPEG 2 の平均転送レートが

$$STR = 4 \text{ Mbps} \quad (11)$$

$$CDAS \geq 43.2 \text{ Mbits} \quad 5.4 \text{ MBytes} \quad (16)$$

を得る。

【0335】既に、図 16 を用いて情報記憶媒体上に発生した欠陥領域に対する代替え方法としての Linear Replacement と Skipping Replacement の比較説明を行った。ここでは各交替処理時の LBN (Logical Block Number) 設定方法の比較を重点的に説明する。既に説明したように情報記憶媒体上の全記録領域は 2048 バイト毎のセクターに分割され、全セクターにはあらかじめ物理的にセクター番号 (PSN: Physical Sector Number) が付与されている。この PSN は図 4 で説明したように情報記録再生装置 (ODD: Optical Disk Drive) 3 により管理されている。

【0336】図 33 (β) に示すように、Linear Replacement 法では代替え領域 3455 の設定場所は Spare Area 724 内に限られており、任意の場所に設定することは出来ない。情報記憶媒体上に欠陥領域が一ヶ所も存在しない場合には、User Area 723 内の全セクターに対して LBN が割り振られ、Spare Area 724 内のセクターには LBN は設定されて無い。User Area 723 内に ECC ブロック単位の欠陥領域 3451 が発生するとこの場所での LBN の設定は外され (3461)、その LBN 値が代替え領域 3455 内の各セクターに設定される。

【0337】図 33 (β) の例では記録領域 3441 の先頭セクターの PSN として “b”、LBN として “a” の値がそれぞれ設定されている。同様に記録領域 3442 の先頭セクターの PSN は “b+32”、LBN は “a+32” が設定されている。情報記憶媒体上に記録すべきデータとして図 33 (α) に示すように記録データ # 1、記録データ # 2、記録データ # 3 が存在したとき、記録領域 3441 には記録データ #

後に情報記憶媒体上に連続記録するデータ領域を “Contiguous Data Area” と定義する。(5)式から

$$CDAS = DWTa \times PTR \quad (7)$$

で求まるので、(6)式と(7)式から

の場合には上記の数値を(8)式に代入すると

$$CDAS \geq 1.4 \text{ Mbits} \quad (12)$$

を得る。また別の見積もりとして

$$SATa + JATa + MWTa = 1.5 \text{ 秒} \quad (13)$$

とした場合には(8)式から

$$CDAS \geq 9.4 \text{ Mbits} \quad (14)$$

となる。また録再 DVD の規格上では、MPEG 2 の最大転送レートとして

$$STR = 8 \text{ Mbps} \quad (15)$$

以下になるように規定しているのので、(15)式の値を(8)式に代入すると

20 1 が記録され、記録領域 3442 には記録データ # 3 が記録される。記録領域 3441 と 3442 に挟まれ、先頭セクターの PSN が “b+16” で始まる領域が欠陥領域 3451 だった場合には、ここにはデータが記録されないと共に LBN も設定されない。その代わり Spare Area 724 内の先頭セクターの PSN が “d” で始まる代替え領域 3455 に記録データ # 2 が記録されると共に先頭セクター “a+16” で始まる LBN が設定される。

【0338】図 4 に示すように、File System 2 が管理するアドレスは LBN であり、Linear Replacement 法では欠陥領域 3451 を避けて LBN を設定しているので、File System 2 には情報記憶媒体上の欠陥領域 3451 を意識させない事が Linear Replacement 法の特徴となっている。逆にこの方法の場合、File System 2 側では全く情報記憶媒体上の欠陥領域 3451 に関する対応が取れないと言う欠点もある。

【0339】それに対して Skipping Replacement 法においては図 33 (γ) に示すように欠陥領域 3452 に対しても LBN を設定し、File System 2 側でも情報記憶媒体上に発生した欠陥領域に対して対応が取れる (管理範囲内に入れる) ようにした所に本発明の大きな特徴がある。

【0340】図 33 (γ) の例では、欠陥領域 3452 の先頭セクタの LBN は “a+16” と設定されている。また欠陥領域 3452 に対する代替え領域 3456 を User Area 723 内の任意の位置に設定可能とした所に本発明の次の特徴がある。その結果、欠陥領域 3452 の直後に代替え領域 3456 を配置し、本来欠陥領域 3452 上に記録すべき記録データ # 2 をすぐに代替え領域 3456 内に記録できる。



【0341】図33(β)に示す Linear Replacement 法では、記録データ#2を記録するために光学ヘッドを Spare Area 724まで移動させる必要があり、光学ヘッドのアクセス時間が掛かっていた。それに対し Skipping Replacement 法では光学ヘッドのアクセスを不要とし、欠陥領域直後に記録データ#2を記録することが出来る。図33(γ)に示すように Skipping Replacement 法では Spare Area 724を使用せず、非記録領域3459として扱っている。

【0342】即ち、本発明の大きな特徴を示す図33に示した実施の形態のポイントとそれに対応した効果は、  
A) 欠陥領域3452に対してもLBNを設定する。

【0343】… 図33(β)に示した Linear Replacement 法や図16に示した欠陥処理方法では直接欠陥領域にLBNが付与されていないため、File System 2からは正確な欠陥領域は分からない。情報記憶媒体上に発生する欠陥量が少量の場合には図33(β)や図16に示すように欠陥管理を完全に情報記録再生装置3に任せることは可能である。また、Spare Area のサイズを越えるような多量な欠陥が発生した場合、欠陥管理を情報記録再生装置3だけで行うと破綻が生じることになる。

【0344】それに対し欠陥領域3452にLBNを設定し、File System 2側でも欠陥領域3452の場所が認知できるようにすると、後で説明する記録手順のステップST3-05～07に示すような方法で情報記録再生装置3とFile System 2が協調して欠陥処理に当たることが出来、情報記憶媒体上に多量な欠陥が発生した場合でも破綻無く連続して映像情報の記録を続ける事が出来る。

【0345】B) User Area 723内に発生し、LBNを設定した欠陥領域3452はそのままLBN空間上に残存させておく。

【0346】… 図33(β)に示した Linear Replacement 法や同じ Skipping Replacement 法でもLBN設定方法として図16(c)のように Spare Area 724内(情報記録に使用する延長領域743)にLBNを設定した場合、(初期記録時には問題が生じないが、)記録した情報を削除し、新たな情報を記録する時に問題が生じる。

【0347】すなわち、File System 2から見るとLBN空間上は全て連続したアドレスが設定されている(Spare Area 746に設定されたLBNはUser Area 723から物理的に離れた位置に配置された事をFile System 2は知らない)ので、File System 2はLBN空間上の連続した範囲に情報を記録しようとする。一度 Spare Area 724内にLBNを設定してしまうと、情報記録再生装置3はFile System 2の指定に従って情報を情報記憶媒体上に記録しなければならず、記録時にSpare Area 724上のLBN設定場所へ移動して情報記録する必要が生じ、光学ヘッドのアクセス頻度が高まり、図31の

ように情報記録再生装置内の半導体メモリ内の映像情報一時保存量が飽和し、その結果連続記録が不可能になる場合がある。

【0348】それに対して図33(γ)のように設定されるLBNが常にUser Area 723内に設定されると、情報削除後にその場所に別の情報を記録した場合に光学ヘッドの不必要なアクセスを制限でき、映像情報の連続記録が可能となる。C) User Area 723内に発生した欠陥領域3452の直後に代替え領域3456を設定する。

【0349】… 上述したように図33(β)に示した Linear Replacement 法に比べて図33(γ)の Skipping Replacement 法では欠陥領域直後に記録データ#2を記録することが出来、その結果光学ヘッドの不要なアクセスを制限でき、映像情報の連続記録が可能となる。と言う所にある。

【0350】次に、Skipping Replacement処理法を行った場合の欠陥管理情報のデータ構造について説明する。この場合の欠陥管理情報の記録方法としては本発明の実施の形態では、

- 1) 図34に示すようにPSN情報として情報記憶媒体上に記録管理し、その情報を情報記録再生装置3が読み取った後、情報記録再生装置内でLBN情報に変換後、File System 2側に通知する方法と、
- 2) 図35に示すようにLBN情報として情報記憶媒体上に記録管理し、情報記録再生装置3を介在する事無く、直接File System 側で再生し処理する方法(この場合、情報記憶媒体上に欠陥管理情報を記録する処理も直接File System 側で対応する)の方法を提示している。

【0351】図9、図10に示したように Linear Replacement 法に対応した欠陥管理情報がPSN情報として図34の Lean-in Area 1002、Lean-out Area 1005内のRewritable data Zone 613、645にDMA領域663、691が設けられ、Secondary Defect List 3413として既に記録されている。本発明実施の形態ではPCデータに対応した欠陥管理情報(SDL3413)とAVデータ(映像情報)に対応した欠陥管理情報(TDL3414)を区別して記録した所に大きな特徴がある。

【0352】すなわち本発明では Skipping Replacement 法に対応した欠陥管理情報を Tertiary Defect List 3414と定義する。一回の代替え処理(例えば図33(γ)での欠陥領域3452に対する代替え領域3456の設定)に対してそれぞれ1個ずつのTDL entry 3427、3428情報を持たせる。

【0353】Linear Replacement法に対しては欠陥領域場所情報である欠陥ECCブロック内の先頭セクタ3431と代替え領域場所を示す前記欠陥ブロックの代替えECCブロック内の先頭位置セクタ番号3432の組情報として登録してある。Skipping Replacement法の場合には代替え領域3456の場所が欠陥領域3452の直

後と決まっているので TDL entry 3427、3428 内の情報として欠陥 ECC ブロック内の先頭セクタ番号 (PSN) 3433 と代替え領域場所指定の代わりに Skipping Replacement 識別情報として “FFFFFFFh” を記録した場所 3434 の組情報とする。

【0354】この記録方法により Linear Replacement 法に対応した SDL entry 3422、3423 との統一性の取れた欠陥管理情報を情報記憶媒体上に記録することが出来る。図 34 に示した欠陥管理情報は全て情報記録再生装置 3 側で管理される。情報記録再生装置 3 側で再生した TDL 3414 情報あるいは SDL 3413 情報は全て PSN で記録されている。図 33 (β)

(γ) で示すように各欠陥処理方法毎に PSN と LBN 間の一对一の対応が付く。具体的には図 11 に示した関係を用いて “PSN→LSN 変換” を行った後、図 20、図 21 の関係を用いて “LSN→LBN 変換” を行った後、上記欠陥管理情報を LBN 情報として File System 2 側に通知する。

【0355】図 34 で示した欠陥管理情報を情報記録再生装置が管理するのに対し、図 35 に示した欠陥管理情報は File System 2 側で管理されるものであり、LBN 情報形式で情報記憶媒体 (Optical Disk 1001) に記録されている。

【0356】この情報は、Volume & File Manager Information 1003 内の UDF が管理する Main Volume Descriptor Sequence 449 内に記録されている。欠陥情報を総称して Sparing Table 469 と呼び、Linear Replacement に対応した欠陥管理情報は Secondary Defect Map 3471 に、また、Skipping Replacement に対応した欠陥管理情報は Tertiary Defect Map 3472 に記録される。どちらも個々の代替え処理毎に SD Map entry 3482、3483 と TD Map entry 3487、3488 を持つ。各 Map entry 内の情報記述内容は図 34 (g) と同様な内容になっている。

【0357】TDM 3472 内の欠陥 ECC ブロック内の先頭セクタ番号 3493 は図 36 (γ) の欠陥領域 3452 (ECC ブロック = 16 セクタ単位で管理する) を指定し、その場所に対する映像情報を記録するための代替え領域 3456 は必ず欠陥領域 3452 の直後なので図 35 (g) に示すように “FFFFFFFh” 3494 が記録されている。

【0358】File System 2 側で管理する管理情報の本発明における他の実施の形態として図 37 に示すように 1) 隠しファイルを作成し、そこに欠陥マップ情報を記述する

2) AV File に Long Allocation Descriptor (図 23 で説明) を採用し、Implementation Use 412 に欠陥フラグを設定する方法がある。

【0359】上記説明したように AV 情報記録時には代替え領域 3456 を任意に追加設定できるが、PC 情報

に対する欠陥発生時の代替え領域は図 33 (β) に示す Spare Area 724 内と事前に決定しており、Spare Area 724 を使い切ってしまうと交替処理が不可能になっていた。その問題を解決するため情報記憶媒体上に欠陥が多発し、図 33 (β) に示した Spare Area 724 が満杯になった場合、PC ファイル記録時に行う欠陥領域の追加の代替え領域確保用に本発明の実施の形態図 36 (β) に示すように User Area 723 内に代替え専用ファイル 3501 を設定することができる。

【0360】図 30～図 32 で説明したように映像情報の連続記録を確保するため Contiguous Data Area 単位での記録、部分消去処理が必要となる。図 38 (a) のように既に記録された映像情報 3511 に対して少量の追加記録すべき映像情報 3513 を追加記録する場合、本発明では図 38 (b) のように Contiguous Data Area #3 3507 を確保し、残りの部分を未使用領域 3515 として管理する。更に少量の追加記録すべき映像情報 3514 を追加記録する場合にはこの未使用領域 3515 の先頭位置から記録する。

【0361】この未使用領域 3516 の先頭位置の管理方法としては Information Length 3517 情報を利用する。Information Length 情報 3517 は、図 39 に示すように File Entry 3520 内に記録されている。この Information Length 3517 とは図 38 (c) に示すように AV ファイル先頭から実際に記録された情報サイズを意味している。

【0362】また、AV ファイル内の部分消去時には、図 40 のように、録再アプリ 1 側から消去すべき Video Object #B 3532 の先頭位置の AV Address とデータサイズを指定されると File System 2 側で CDA #β と CDA #δ にかかっている部分消去場所を未使用 Extent 3548、3549 として AV ファイル内の File Entry 内に登録される。未使用 Extent 3548、3549 の識別情報は、図 23 あるいは本明細書に示した図 39 (f) のように映像情報 (AV ファイル) の File Entry 3520 内の Allocation Descriptors 420 を Long Allocation Descriptor とし、Implementation Use 3528、412 内に “未使用 Extent フラグ” を設定している。情報記憶媒体として DVD-RAM ディスクを用いた場合には、図 13 に示すように ECC ブロック 502 単位での記録、部分削除処理が必要となる。従って ECC ブロック境界位置管理が必要となる。この場合、削除指定領域の境界位置と ECC ブロック境界位置管理がずれた時には、図 40 (b) と同様に端数箇所未使用 Extent 3548、3549 を設定し、図 39 (f) のように “未使用 Extent フラグ” を付ける。

【0363】本発明における映像情報記録後の Extent 設定方法について図 41 を用いて説明する。映像情報記録時に発見された情報記憶媒体上の欠陥領域に対して欠陥管理情報を情報記憶媒体上に記録する。本発明の実施

例ではFile System 2上で欠陥管理を行っているため、欠陥管理情報を情報記録再生装置3が管理するTDL (図34(e)のTDL3414)に記録し、欠陥領域3566を避けてExtentを設定(図41)する。

【0364】図41に対する本発明における他の実施例を図42に示す。図42における欠陥領域3566の管理方法は図37の丸印2の方法を利用している。すなわち図42に示すように、欠陥領域3566に対しても映像情報が記録して有るExtent #1 3571、Extent #2 3572、Extent #3 3573とは区別して欠陥Extent 3595を設定し、AVファイルのFile Entryと一緒に登録しておく。

【0365】この場合のExtent記述方法は、図23に記述して有るLong Allocation Descriptorを利用し、この欠陥Extent 3595に対しては図39(f)に示すImplementation Use 3528内に“欠陥Extentフラグ”が設定され、そのフラグの値が“1”になっている。

【0366】図41、図43に示すように、欠陥領域3566を避けてExtentを設定した場合について考える。今図41、および図43(e)の形でAV情報が記録されていた後、

1. AV情報記録完了後に欠陥領域3566に対応したLBN場所に別のPCファイルが記録される(この場合Linear Replacement処理が行われる)。  
2. さらに以前記録したAVファイルを削除するため図41、図43(a)のContiguous Data Area #Bを削除する。

3. 別のAV情報を今削除したContiguous Data Area #Bの場所に記録すると言う処理が発生する可能性がある。この場合LBN空間上では欠陥領域3566に対応したLBN場所にPCファイルが既に記録されている。

【0367】本発明の実施例におけるLBN/XXXでは図1に示すように既存PC file 3582をまたがってContiguous Data Area 3593を設定できる所に大きな特徴が有る。具体的な設定方法については後述の図48の説明場所に詳細に記述して有る。

【0368】上記Contiguous Data Area 3593の設定条件として本発明では、

a) Contiguous Data Area 3593内に存在し得る既存PC file 3582、または以前Linear Replacement

CDAS $\geq$

$$STR \times PTR \times (Ta + Tskip) / (PTR - STR) \quad (22)$$

と変形される。

【0372】Contiguous Data Area 3593内に存在し得る既存PC file 3582、以前Linear Replacement処理した欠陥領域3586を避けて次の記録領域まで光学ヘッドがアクセスする時はトラックジャンプによるアクセスを行うが、この時、粗アクセス時間1348、1376が不必要なレベルまで既存PC file 3582

処理した欠陥領域3586の総数Npcが(28)式を満足すること。

b) 以前Skipping Replacement処理した欠陥領域3586を含むContiguous Data Area内のSkipping Replacementを必要とするトータル欠陥サイズLskipが(29)式を満足すること。

c) Contiguous Data Area 3593内に存在し得る既存PC file 3582、または以前Linear Replacement処理した欠陥領域3586を避けてContiguous Data Area内の次の記録領域まで光学ヘッドがアクセスする時粗アクセス時間1348、1376を不用とすること。

【0369】… 光学ヘッドのアクセス時に粗アクセスが必要無い程度に既存PC file 3582、または以前Linear Replacement処理した欠陥領域3586サイズが小さいことと設定している。

【0370】Contiguous Data Area 3593内にAV情報を記録する場合、

1) Contiguous Data Area 3593内に存在し得る既存PC file 3582、以前Linear Replacement処理した欠陥領域3586を避けて次の記録領域まで光学ヘッドがアクセスする時間と、

2) 前回記録時にSkipping Replacement処理した欠陥領域3587と今回記録時に初めて発見された欠陥領域に対するSkipping処理を行う期間と、は情報記憶媒体上にAV情報がまったく記録されない。よってこの期間内では情報記録再生装置内の半導体メモリ内の映像情報一時保管量は図32の粗アクセス時間1348、密アクセス時間1343、回転待ち時間1346の期間と全く同様に増加の一途をたどる。従ってこの期間は図32の粗アクセス時間1348、密アクセス時間1343、回転待ち時間1346の期間と同列で扱うことができる。Contiguous Data Area 3593内で前回記録時にSkipping Replacement処理した欠陥領域3587と今回の記録時に初めて発見されSkipping処理が必要となる欠陥領域のトータルサイズをLskipと定義する。

【0371】Lskip箇所を通過する合計時間Tskipは

$$Tskip = Lskip \div PTR \quad (21)$$

となる。この条件を加味すると(8)式は

サイズと以前Linear Replacement処理した欠陥領域3586サイズを小さくする。一般的なDVD-RAMドライブでは密アクセス時の対物レンズ移動距離は $\pm 200 \mu m$ 程度であり、DVD-RAMディスクのトラックピッチ

$$Pt = 0.74 \mu m \quad (23)$$

1トラック当たりの最小データサイズ

$$D1 = 17 \times 2 \text{ kBytes} = 34 \text{ kBytes} \quad (24)$$

から既存 PC file 3582、以前 Linear Replacement

$$200 \div 0.74 \times 34 = 9190 \text{ kBytes} \quad (25)$$

以下の必要がある。諸処のマージンを見越して考えると実際の許容最大サイズは(25)式の  $1/4$  の 2300 kBytes 以下が望ましい。上記条件を満足した場合には Contiguous Data Area 内の次の記録領域までのアクセスは、密アクセス時間 1343 と回転待ち時間 1346 のみを考慮に入れば良い、1回のアクセスに必要

$$Tpc = Npc \times (JATa + MWTa) \quad (26)$$

となる。この時間も考慮に入れると(22)式は CDA

$$STR \times PTR \times (Ta + Tskip + Tpc) / (PTR - STR) \quad (27)$$

と変形される。

(10) (13) (15) の各値を用いると

$(Tskip + Tpc) / Ta = 20\%$  とした時には CD

$AS \geq 6.5 \text{ MBytes}$

$(Tskip + Tpc) / Ta = 10\%$  とした時には CD

$AS \geq 5.9 \text{ MBytes}$

$(Tskip + Tpc) / Ta = 5\%$  とした時には CD

$$Npc \leq$$

$$\{ [CDAS \times (PTR - STR) / (STR \times PTR)] - Ta - Tskip \} / (JATa + MWTa) \quad (28)$$

(27) 式と(21)式から

$Lskip \leq$

$$\{ [CDAS \times (PTR - STR) / (STR \times PTR)] - Ta - Tpc \} \times PTR$$

(29) が導ける。(28) (10) (13) (15) 式の各値と MWTa 18ms、JATa 5ms を用いると

$(Tskip + Tpc) / Ta = 10\%$ 、 $Tskip = 0$  とした時には  $Npc \leq 6$

$(Tskip + Tpc) / Ta = 5\%$ 、 $Tskip = 0$  とした時には  $Npc \leq 3$

$(Tskip + Tpc) / Ta = 3\%$ 、 $Tskip = 0$  とした時には  $Npc \leq 1$

$(Tskip + Tpc) / Ta = 1\%$ 、 $Tskip = 0$  とした時には  $Npc \leq 0$

となる。また、(29) (10) (13) (15) 式の各値を用いると

$(Tskip + Tskip) / Ta = 10\%$ 、 $Tpc = 0$  とした時には  $Lskip \leq 208 \text{ kBytes}$

$(Tskip + Tskip) / Ta = 5\%$ 、 $Tpc = 0$  とした時には  $Lskip \leq 104 \text{ kBytes}$

$(Tskip + Tskip) / Ta = 3\%$ 、 $Tpc = 0$  とした時には  $Lskip \leq 62 \text{ kBytes}$

$(Tskip + Tskip) / Ta = 1\%$ 、 $Tpc = 0$  とした時には  $Lskip \leq 0 \text{ kBytes}$

となる。

【0373】上記の説明では AV 情報の記録系システム概念図として図 30 を用いて説明した。

処理した欠陥領域 3586 1 個当たりのサイズは、

な密アクセス時間 1343 を JATa とし、回転待ち時間 1346 を MWTa とし、Contiguous Data Area 内の既存 PC file 3582 と以前 Linear Replacement 処理した欠陥領域 3586 の合計数を Npc とすると上記領域を避けるために必要な合計アクセス時間 Tpc は

$$AS \geq 5.7 \text{ MBytes}$$

$(Tskip + Tpc) / Ta = 3\%$  とした時には CD

$$AS \geq 5.6 \text{ MBytes}$$

$(Tskip + Tpc) / Ta = 1\%$  とした時には CD

$AS \geq 5.5 \text{ MBytes}$  となる。(27) 式と(26)式から

【0374】基本的概念を検討する場合には図 30 で問題ないが、より詳細に検討するために図 44 に示す記録系のシステム概念モデルを使用する。

【0375】図 7 に示す PC システムで記録する場合、外部から入力された AV 情報は MPEG ゴード 134 を介してデジタル圧縮信号に変換され、一時的にメインメモリー 112 に記録され、メイン CPU 111 の制御に応じて図 7 の情報記録再生装置 140 側へ転送される。情報記録再生装置 140 内にもバッファメモリー 219 を持ち、転送されたデジタル AV 情報は一時的にバッファメモリー 219 内に保存される。

【0376】具体的な情報の流れを図 45 を用いて説明する。図 44 に示した PC 側のメインメモリー 112 内に保存された映像情報 3301 は従来の方法では WRITE コマンドとともに情報記録再生装置 140 側に転送される。この従来方法での WRITE コマンドは記録する開始位置を示す LBN と転送されるデータサイズが指定される。この転送された映像情報は情報記録再生装置のメモリー 219 内のまだ転送されてない空き領域 3311 に一時保管された後、図 45 (B) のように情報記憶媒体上の初回 WRITE Command による記録場所 3327 に記録される。次の WRITE コマンドで映像情報は情報記録再生装置のメモリー 219 内の情報記憶媒体に記録する映像情報 3315 領域に一時保管され、情報記憶媒体上の未記録領域 3324 への記録作業が開始する。図 45 (c) のように途中で欠陥領域 3330 が発生すると Skipping Replacement 処理した結果、記録を予定していた映像情報 3315 の一部が情報記憶媒体上の所定範囲(未記

録領域 3324 の範囲) 内に入りきらず、溢れ情報 3321 が発生すると共に情報記録再生装置は記録処理を中断する。

【0377】このように記録開始位置を表す LBN と転送情報サイズのみを与える従来の WRITE コマンドでは本発明で説明した Skipping Replacement 処理を行うと記録処理が中断してしまう。

【0378】情報記憶媒体上に多量の欠陥が発生した場合にも途中で中断することなく、長期間連続して AV 情報を記録できる本発明の方法を以下に説明する。

【0379】本発明における AV 情報記録方法に関する大きな特徴は図 46 に示すように、

\* 記録すべきファイルが AV ファイルか否かを判定するステップ (ST01)

\* 情報記憶媒体上の映像情報記録場所を事前に設定するステップ (ST02)

\* 情報記憶媒体上に AV 情報を記録するステップ (ST03)

\* 情報記憶媒体上に実際に記録された情報配置情報を情報記憶媒体上の管理領域に記録するステップ (ST04) を有している所にある。この処理は主に File System 2 側が中心となり制御を行う。

【0380】図 47 は、図 46 のステップ ST01 の内容を更に詳しく示し、図 48 は、図 46 のステップ ST02 の内容を更に詳しく示し、図 49 は、図 46 のステップ ST03 の内容を更に詳しく示している。図 50 は、図 46 のステップ ST04 の内容を更に詳しく示している。

【0381】情報記録、情報再生、AV ファイル内の情報の部分削除処理など情報記憶媒体に対するあらゆる処理は図 6 の録再アプリ 1 が OS 内の File System 2 に対して処理の概略を指示した後、初めて開始される。File System 2 に対して示す処理の概略内容は録再アプリ 1 側から SDK API Command 4 を発行することにより通知される。SDK API Command 4 を受けると File System 2 側でその指示の内容を具体的に噛み砕き、DDK Interface Command 5 を情報記録再生装置 3 に対して発行して具体的な処理が実行される。

【0382】本発明実施の形態 LBN/UDF、LBN/XXX において上記図 46 に示す処理が可能となるために必要な API コマンド (SDK API Command 4) を図 51 に示した。

【0383】図 51 のコマンド種別 3405 内の一部内容追加部分と新規コマンド部分は本発明の範囲である。API コマンドを用いて録再アプリ 1 側が行う一連の処理方法を説明すると以下ようになる。

#### < AV 情報記録処理 >

1st STEP: Create File Command により記録開始と対象ファイルの属性 (AV ファイルか PC ファイルか) を OS 側に通知する。

2nd STEP: Set Unrecorded Area Command により情報記憶媒体上に記録する AV 情報の予想最大サイズ指定

3rd STEP: Write File Command (OS に対して複数回コマンドを発行する) により AV 情報転送処理を OS/File System 側に通知する。

4th STEP: 一連の AV 情報記録処理が完了した後、後日に記録したい AV 情報サイズが分かっている場合に、Set Unrecorded Area Command を発行することにより、次回 AV 情報を記録するエリアを事前に確保して置く事も可能である。

【0384】本発明の情報記憶媒体においては同一の情報記憶媒体上に AV 情報と PC 情報の両方を記録可能となっている。従って次回の AV 情報を記録する前に空き領域に PC 情報が記録され、次回の AV 情報記録時に空き領域が無くなっている場合が生じる。

【0385】それを防ぐために AV ファイル内に大きなサイズの未使用領域を設定し、次回の AV 情報記録場所の事前予約をしておく。(この 4th STEP は実行しない場合もある。)

5th STEP: Close Handle Command により一連の記録処理終了を OS/File System 側に通知する

\* Create File Command に AV file 属性フラグを追加する以外は WriteFile Command、Close Handle Command とともに従来の PC 情報記録用のコマンドをそのまま兼用する。そのように設定することで内部で複数に階層化された OS 内の API インターフェースに近い上層部での映像情報記録方法変更に伴うプログラム変更を不要とし、上層部では既存の OS ソフトをそのまま使用可能としている。情報記録再生装置に近い下層の OS 部分に属する File System 側では図 47 に示す方法で対象とするファイルが AV ファイルか PC ファイルかを File System 側単独で判断し、情報記録再生装置に対する使用コマンドを選別している。

【0386】\* 記録場所のアドレス指定は全て AV Address で設定する。

#### < AV/PC 情報再生処理 >

1st STEP: Create File Command により再生開始を OS 側に通知する

2nd STEP: Read File Command (OS に対して複数回コマンドを発行する) により一連の再生処理を指示

3rd STEP: Close Handle Command により一連の再生処理終了を OS/File System 側に通知する

\* 再生処理は AV ファイル、PC ファイルとも共通の処理を行う。

【0387】\* 再生場所のアドレス指定は全て AV Address で設定する。

#### < AV ファイル内の部分削除処理 >

1st STEP: Create File Command により部分削

10

20

30

40

50

除対象のファイル名をOS側に通知する。

2nd STEP: Delete Part Of File Command により指定範囲内の削除処理を指示する。

【0388】… Delete Part Of File Command では削除開始する AV Address と削除するデータサイズをパラメータで指定する。

3rd STEP: Close Handle Command により一連の再生処理終了をOS/File System 側に通知する。

＜ 情報記憶媒体上にAV情報を記録できる未記録領域のサイズを問い合わせる＞

1st STEP: Get AV Free Space Size Command によりAV情報を記録できる未記録領域のサイズを問い合わせ

\* Get AV Free Space Size Command をOS側に発行するだけでOS側から未記録領域サイズの回答をもらえる。

＜ デフラグメンテーション (Defragmentation) 処理＞

1st STEP: AV Defragmentation Command によりAVファイル用のデフラグメンテーション処理をOS 20 側に指示する。

【0389】\* AV Defragmentation Command 単独でAVファイル用のデフラグメンテーション処理が行える。

【0390】\* AV Defragmentation Command に対する具体的な処理方法としては情報記憶媒体上に点在する Extent サイズの小さなファイル情報を Extent 毎に移動し、未記録領域内の Contiguous Data Area 確保スペースを広げる処理を行う。

【0391】上記の SDK API Command 4 を具体的に噛み砕いた後、File System 2 が情報記録再生装置 30 3側に発行する DDK Interface Command 5の一覧を図52に示す。READ Command以外は本発明で新規に提示するコマンドかあるいは既存のコマンドに対して一部修正を加えたコマンドである。

【0392】情報記録再生装置は例えばIEEE1394などに接続され、同時に複数台の機器間での情報転送処理が行われる。図6や図7の説明図では情報記録再生装置3、140は1個のメインCPU111のみに接続されている。これに対してIEEE1394などに接続された場合には各機器毎のメインCPUと接続される。40 そのため間違えて他の機器に対して別の情報を転送しないように機器毎の識別情報である Slot\_ID を使用する。この Slot\_ID は情報記録再生装置3、140側で発行する。GET FREE SLOT\_ID Command は File System 2側で発行するもので、パラメータとして AV WRITE 開始フラグと AV WRITE 終了フラグによりAV情報の開始と終了を宣言すると共に、AV情報開始宣言時に情報記録再生装置に対して Slot\_ID 発行の指示を出す。

【0393】AV WRITE Command での記録開始位置はカレント位置 (前回の AV WRITE Commandで 50

記録終了したLBN位置から次のAV情報を記録する) として自動的に設定される。各 AV WRITE Command には AV WRITE 番号が設定され、コマンドキャッシュとして情報記録再生装置のバッファメモリ219内に記録された既発行の AV WRITE Command に対してこの AV WRITE 番号を用いて DISCARD PRECEDING COMMAND Command により発行取り消し処理を行える。

【0394】図31に示すように情報記録再生装置のバッファメモリ219内のAV情報一時保存量が飽和する前に File System 2側で適正な処理が出来るように GETWRITE STATUS Commandが存在する。このGET WRITE STATUS Commandの戻り値3344としてバッファメモリ219内の余裕量が回答されることでバッファメモリ219内の状況がFile System 2側で把握出来る。本発明実施の形態では無欠陥時の1個の Contiguous Data Area 記録分のAV情報を AV WRITE Command で発行する毎にこの GET WRITE STATUS Command を挿入し、GET WRITE STATUS Command内のコマンドパラメータ3343である調査対象サイズと調査開始LBNを対象の Contiguous Data Area に合わせている。また GET WRITE STATUS Command には対象範囲内で発見された欠陥領域を各ECCブロック先頭LBNの値として戻り値3344で与えられているため、AV情報記録後の Extent設定 (図50のST4-04) にこの情報を利用する。

【0395】SEND PRESET EXTENT ALLOCATION MAP Command はAV情報記録前に全記録予定場所をLBN情報として情報記録再生装置に対して事前通告するコマンドで、記録予定場所の Extent 数とそれぞれの Extent 先頭位置 (LBN) と Extent サイズをコマンドパラメータに持つ。この情報記憶媒体上の記録予定場所は先行して発行するGET PERFORMANCE Command の戻り値3344である Zone 境界位置情報とLBN換算後のDMA情報を基に設定される。

【0396】以下に図46に示した各ステップ内の詳細処理方法についてさらに説明する。AVファイルの識別情報は、図23あるいは図53 (f) に示すように FileEntry 3520の ICB Tag 418内にある Flags field in ICB Tag 3361内にAV file 識別フラグ3362が設定されており、このフラグを“1”に設定することでAVファイルであるかの識別が行える。

【0397】本発明の他の実施の形態としては図24あるいは図54 (d) に示すように File Identifier Descriptor 3364内にAV file 識別フラグ3364を設定することも可能である。

【0398】図46のST01に示したAVファイルか否かを識別するステップの具体的なフローチャートを図47に示す。録再アプリ1側からCreate File Command が発行されて初めて処理を開始する。AVファイルの識



別方法は条件により異なり、

\*新規 AV ファイル作成時には Create File Command 内の AV file 属性フラグを用いて識別し、

\*既に存在する AV ファイルに対して AV 情報を付加する場合には図 5 3 または図 5 4 に示したように情報記憶媒体上に既に記録されているファイルの属性フラグを用いて AV ファイルの識別を行う。

【0399】… この方法を用いることによりアプリケーションプログラム 1 側での各ファイルの属性 (AV ファイルか PC ファイルか) を管理を不要 (File System 2 側で自動的に判定して記録処理方法を切り替える) となる効果がある。このような方法を採用することで、該当ファイルが PC ファイルの場合には従来の WRITE Command、Linear Replacement 処理を行い、AV ファイルの場合には AV WRITE Command、Skipping Replacement 処理を行う。

【0400】録再アプリ 1 側では Create File Command 発行後に AV 情報記録予定サイズの予想最大値を設定し、Set Unrecorded Area Command を発行する。その指定情報と GET PERFORMANCE Command で得た欠陥分布と Zone 境界位置情報を基に記録すべき予定の最大情報サイズに合わせて Contiguous Data Area の設定を行う。LBN/XXX の実施の形態を用いた場合にはこの設定条件として (27) 式と (28) 式を利用する。

【0401】その結果に基づき該当する AV ファイルの File Entry 内の Allocation Descriptors 情報を事前に記録する (ST2-07)。このステップを経ること

a) 例えば IEEE1394 などに接続し、複数の機器間との記録を同時並行的に行う場合、記録予定位置に他の情報が記録されるのを防止できる。

b) AV 情報を連続記録中に停電などにより記録が中断された場合でも、再起動後に記録予定位置を順にトレースする事で中断直前までの情報を救える。などのメリット (効果) が得られる。その後 SEND PRESET EXTENT ALLOCATION MAP Command で情報記録再生装置側に記録予定位置情報を通知する (ST2-08)。この事前通知により情報記録再生装置は情報記憶媒体上の記録位置と記録順を事前に知っているため、AV 情報記録時に情報記憶媒体上の欠陥で Skipping Replacement 処理が多発しても記録処理を停止させることなく、連続記録を継続させることが可能となる。

【0402】図 4 6 のステップ ST03 に示した AV 情報連続記録ステップ内の詳細内容について図 4 9 を用いて説明する。

【0403】図 3 8 に示すように Information Length 3517 情報を用いて AV ファイル内の記録開始位置を事前に確認しておく (ST03-01)。録再アプリ 1 から Write File Command が発行されると (ST3-02) AV WRITE 開始フラグが設定された GET FREE SLOT\_

ID Command を発行して情報記録再生装置 3 に SLOT\_ID を発行させる (ST3-03)。

【0404】ST3-04 以降の連続記録処理方法を図 5 5 に模式的に示した。AV WRITE Command によりメインメモリに保存された映像情報 #1、#2、#3 は定期的に情報記録再生装置中のバッファメモリ 219 内に転送される。情報記録再生装置のバッファメモリ 219 内に蓄えられた映像情報は光学ヘッド 202 を経由して情報記憶媒体上に記録される。情報記憶媒体 201 上に欠陥領域 3351 が発生すると Skipping Replacement 処理されるが、この間は情報記憶媒体 201 上に映像情報が記録されないで情報記録再生装置中のバッファメモリ 219 内に一時保管される映像情報量が増加する。File System 2 側は定期的に GET WRITE STATUS Command を発行し、バッファメモリ 219 内の一時保管映像情報量をモニターしている。この一時保管映像情報量が飽和しそうな場合には File System 側で、

1) DISCARD PRECEDING COMMAND Command を発行し、情報記録再生装置内のコマンドキャッシュの一部を取り消す、

2) 次の AV WRITE Command で情報記録再生装置側へ転送する映像情報量を制限 (減らす) する、

3) 情報記録再生装置側へ発行する次の AV WRITE Command までの発行時間を遅らせ、情報記録再生装置中のバッファメモリ 219 中の一時保管映像情報が少なくなるまで待つ、のいずれかの処理を行う。

【0405】上記の内容について図 5 6 乃至図 6 3 に示すように具体的な例を用いて説明する。図 5 6 から図 6 3 には、それぞれ 3 段階で記録情報の遷移を示している。第 1 段階は、PC 側メモリ、第 2 段階は情報記録再生装置メモリ、第 3 段階は情報記録媒体上の記録位置である。

【0406】図 4 8 の ST2-08 に対応して図 5 6 (A) での丸印 1 の SEND PRESET EXTENT ALLOCATION MAP Command が発行される。図 5 2 に示したようにこのコマンドではコマンドパラメータとして Extent 先頭位置情報と Extent サイズ情報がセットされるので図 5 6 (A) の例では Extent = CDA の先頭位置 LBN である “a” と “d” と “g” … と Extent = CDA サイズである “c-a” と “f-d” … が添付されている。また、CDA #1 に対して 2 回に分けて映像情報を記録するように、丸印 2、丸印 3 の AV WRITE Command が発行される。次に、CDA #1 内の記録状況を把握するため、丸印 4 の GET WRITE STATUS Command を発行している。

【0407】GET WRITE STATUS Command での調査対象を CDA #1 に指定するため、パラメータの設定値である調査対象範囲の開始 LBN として “a” が設定され、調査対象範囲として “c-a” の値が設定されている。同様に CDA #2 に対して 2 回に分けて映像情報を

記録するため、丸印5、6のAV WRITE Commandを発行している。そして次に、CDA#2に対する記録状況把握のため丸印7のGET WRITE STATUS Commandを発行している。

【0408】このコマンドを一度に情報記録再生装置側に送り、コマンドキャッシュさせる(図49のST3-05)。図57(B)で示す情報記憶媒体上の未使用状態場所3371に欠陥が無い場合には図58(C)に示すように情報記憶媒体上への記録情報 $\alpha$ 3361が記録される。次に図59(D)に示すように欠陥領域3375が発生するとSkipping Replacement処理が行われ、CDA#1内に記録する予定の映像情報が一部はみ出すが、事前にSEND PRESET EXTENT ALLOCATION MAP Commandにより情報記録再生装置3側で次に記録する場所が分かっているので溢れた情報はシフト情報 $\beta$ 3371の場所に記録される。上記の欠陥領域3375に関する情報は、丸印4のGET WRITE STATUS Commandの戻り値3344としてFile System 2側に通知される(図49のST3-05、図56、図60参照)。File System 2内で情報記録再生装置(ODD)3内のバッファメモリ219が溢れそうかを判定(図49ST3-06)する。そして、図49のST3-07に示した具体的方法として図60(E)の丸印9に示すDELETE PROCEDING COMMAND CommandによりCDA#3に記録すべき映像情報に関する記録コマンドである、丸印8のAV WRITE Command(図56)を取り消し、丸印10のAV WRITE Command(図60)により転送すべき映像情報量を制限(減量)したコマンドを発行する。

【0409】CDA#2に対してのフィードバックは間に合わないので図61(F)に示すように当初の予定通りの情報記憶媒体上への記録処理が実行される。

【0410】図62(G)に示すようにここで使用するAV WRITE Commandでの記録開始位置はカレント位置では無く、記録開始位置がFile System 2側で指定される場合を想定している。この場合でも先行する映像情報記録時に発見される欠陥領域によりFile System 2側で指定した記録開始位置と実際に記録される記録開始位置は大幅にずれる事を許容している。

【0411】一連の記録処理が終了すると録再アプリ1から発行されるClose Handle CommandをトリガーとしてAV WRITE 終了フラグが付加されたGET FREE SLOT\_ID CommandがFile System 2から情報記録再生装置3側へ発行される。情報記録再生装置3ではこのコマンドを受けると図示してないがこの一連の記録処理時に発見された欠陥情報を図34(e)のTDL3414に追記する。

【0412】映像情報記録に対する後処理として録再アプリ1側から指定するSet Unrecorded Area Command情報(図50のST4-03)を基にAVファイル内に残す未使用領域サイズを決定し、Information Leng

h 3517の書き換え処理(ST4-05)と最終的なExtent情報の書き換え処理(ST4-04)及びUDFに関する設定情報の書き換え処理を行う。

【0413】図64を用いてAVファイル内の映像情報の再生手順について説明する。図6に示すように、

\*録再アプリ1では管理するアドレス情報としてAV Addressを使用し、File System 2に対して発行するSDK API Command 4でもAV Addressを用いてアドレス設定をする。

10 \*File System 2では管理するアドレス情報としてLBN(場合によってはLSN)を使用し、情報記録再生装置3に対して発行するDDK Interface Command 5でもLBNを用いてアドレス設定をする。

\*情報記録再生装置3ではPSNを用いてアドレス管理を行う。

【0414】と言う仕組みになっている。従って録再アプリ1上で再生したい場所が決まり、Read File Commandを発行するとFile System 2内での“AV Address → LBN変換”(図64のST06)と情報記録再生装置3内での“LBN → PSN変換”(ST07)を行う。

【0415】AVファイル内の部分消去処理方法は、図65に示すように、情報記憶媒体上に記録されているAV情報に対して一切の処置を行わず、File System 2上のFile Entry情報の書き換え(図65のST09)とUDFに関する情報の変更処理のみを行う。そして、部分消去した場所を未記録領域として登録するために、UDF上の未記録領域情報であるUnallocated Space Table 452もしくはUnallocated Space Bitmap435情報に、上記部分消去場所を書き加える(ST10)。最後に録画ビデオ管理データファイルに対する管理情報の書き換え処理を行う(ST11)。

【0416】本発明の他の実施例として上記の方法を組み合わせて欠陥管理情報と未使用領域情報を記録・管理する方法に付いて説明する。

【0417】図66の実施例では、Contiguous Data Area # $\beta$  3602内に少量のデータサイズであるVOB#2 3618を追加記録したため、Contiguous Data Area # $\beta$  3602内の不足分に未使用領域Extent 3613を設定して有る。次回AV File 3620に対して映像情報あるいはAV情報を追加記録する場合には上記未使用領域Extent 3613の先頭位置(LBNではhtg、PSNではktgの所)から記録が開始される。

【0418】図示して無いが過去にVOB#1 3617とVOB#2 3618の間にVOB#3がContiguous Data Area # $\alpha$  3601とContiguous Data Area # $\beta$  3602を一部またいだ形で存在していた。そのVOB#3の部分消去に伴いContiguous Data Area # $\alpha$  3601とContiguous Data Area # $\beta$  3602をま

たいだVOB # 3の部分に対して図40で説明した処理を行い、未使用領域 Extent 3611と未使用領域 Extent 3612をFile System 2側で設定した。またVOB # 1の記録時にLBNが“hta”から“htb-1”の範囲でECCブロック単位での欠陥が発見されたのでそこには映像情報またはAV情報を記録せずに欠陥領域 Extent 3609として設定した。このように Contiguous Data Area #  $\alpha$  3601と Contiguous Data Area #  $\beta$  3602内には記録領域 Extent 3605と、欠陥領域 Extent 3609、記録領域 Extent 3606、未使用領域 Extent 3611、未使用領域 Extent 3612、記録領域 Extent 3607、未使用領域 Extent 3613が並ぶがそれらは全て AV File 3620の一部と見なされ、図66の下側に説明して有るように AV File 3620の File Entry 内の Allocation Descriptors として全ての Extent が登録される。

【0419】特に図66での大きな特徴として、欠陥管理情報領域 (DMA) 内のTertiaryDefect Map (TDM) 3472に示すような独立してまとまった欠陥管理テーブルを持たず、File Entry内に登録された欠陥領域 Extent 3609情報のみが欠陥管理情報になっている。AV File 3620の File Entry 内 Allocation Descriptors での各 Extent の属性識別情報は図67

(f)に示す Implementation Use 3528内に記録されている。すなわち図67では Allocation Descriptors の記述方法としてLong Allocation Descriptorの記述方式を採用し、Implementation Use 3528の値として“0h”の時は“記録領域の Extent ”を表し、“Ah”の時は“未使用領域の Extent ”、“Fh”の時は“欠陥領域の Extent ”を意味している。UDFの正式な規格上では ImplementationUse 3528は6バイトで記述する事になっているが、図67では説明の簡略化のため下位4ビットのみの表現としている。図66では欠陥領域と未使用領域ともにLBNとPSNが設定されており、LBNとPSNは全て平行移動した値となっている。すなわち Linear Replacement 処理の結果生じるようにPSNに対するLBNの飛びが発生しない所に本発明実施例の特徴がある。また記録領域 Extent 3605、3606、3607が存在する箇所のみAV Address が付与されている。このAV Address はAV File 3620内の欠陥領域 Extent 3609と未使用領域 Extent 3611、3612、3613を除いた全セクターに対して File Entry 内に記述された Allocation Descriptors の記述順に従って順に番号が設定された格好になっている。すなわち記録領域 Extent 3605の最初のセクターのLBNは“h”、PSNは“k”であり、AV Addressは“0”に設定され、記録領域 Extent 3607の最初のセクターのLBNは“h+f”、PSNは“k+f”であり、AV Address は“a+c-b”となっている。

【0420】DVD-RAMディスクに対してはECCブロック502単位で情報が記録されている。従って本発明実施例の図66でもECCブロック単位で記録されるようFile System 2側できちんと管理されている。すなわち Extent 設定によりECCブロック単位の記録が行えるようFile System 2が制御している。具体的内容で説明すると図66の“a”“b”“d”“e”“j”が全て“16の倍数”になるように設定され、Contiguous Data Area #  $\alpha$  3601と Contiguous Data Area #  $\beta$  3602 の開始位置はECCブロック内先頭位置、終了位置はECCブロック内終了位置となるように設定されている。

【0421】欠陥領域はECCブロック単位で欠陥処理されるため欠陥領域 Extent 3609の開始と終了位置はECCブロック内の開始位置と終了位置に一致している。図66での個々のVOB # 1 3616、3617とVOB # 2 3618サイズは必ずしも16セクター単位で記録される必要が無く、VOB # 1 3616、3617とVOB # 2 3618 の部分的なECCブロックからのみ出し分は未使用領域 Extent 3611、3612、3613サイズで補正されている。

【0422】図66に示した実施例での映像情報またはAV情報の記録方法も図46と同様な記録方法を採用している。唯一異なる部分は図50でのST4-01でのDMA領域内のターシャリーデフエクトリスト;Tertiary Defect List (TDL) 3414への記録が不用となり、ST4-04での Extent 情報に欠陥 Extent 3609と未使用領域 Extent 3611、3612、3613が加わる。

【0423】再生手順では“AVAddress → LBN 変換 → PSN変換”は行うが、“AVAddress → LBN変換”時に File Entry 内の Allocation Descriptorsから各Extentの属性を検出し、記録領域 Extent 3605、3606、3607のみを再生の対象にする(欠陥Extent 3609や未使用領域 Extent 3611、3612、3613に対する取捨選択処理)を行う所に大きな特徴がある。

【0424】またファイル内の部分消去処理時にもAVファイルの File Entry 内の Extent 情報書き換え処理(ST09)時に Contiguous Data Area サイズとECCブロック境界領域場所を加味して適宜 未使用領域 Extent の挿入処理が必要となる。

【0425】上記した本発明のシステムの特徴点をまとめると以下になる。

1. <情報記憶媒体上の欠陥領域に対しても論理アドレスを設定すると共に欠陥領域を避けて Extent を設定する>

図33(γ)に示すようにユーザーが記録可能な第1の領域とはUser Area 723を意味し、このUser Area 723内に情報記憶媒体上の物理的な位置を示す物理アド

レスであるPSN:Physical Sector Number と、情報記憶媒体上に記録される情報を論理的に管理するための論理アドレスであるLBN:Logical Block Numberを設定する。更に、図29(a)に示すように前記論理アドレス空間LBN空間)上に連続して情報が記録された単位(その中では互いに連続した論理アドレス番号(LBN)を有している)をExtentと呼び、Extent #α 3 1 6 6、Extent #γ 3 1 6 8、Extent #α 3 1 6 6の各塊上にVOB#2 3 1 6 2、VOB#1 3 1 6 1の情報が記録される。

【0426】情報記憶媒体上に情報を記録する場合、図36(γ)に示すように記録しない場所3458である欠陥領域3452に対しても論理アドレスを設定し(論理アドレス番号(LBN)を付与し)、情報記憶媒体上に情報が記録された後、図41に示すように情報記録領域3563、3564と欠陥領域3566との間でExtentを分け、前記情報が記録された場所3563、3566のみで情報記録用ExtentであるExtent #1 3 5 7 1、Extent #2 3 5 7 2、Extent #3 3 5 7 3を単独で形成する。さらにFile Entryには情報記録用Extentのみを登録しておく。

【0427】このように欠陥領域3452に対して論理アドレス(LBN)を設定することによりFile System上で欠陥領域3452を避けたExtentの設定が可能となる。図33(β)に示すようなLinear Replacement処理を行った場合、File System 2側では欠陥領域3455の場所が分からないためFile System 2側で連続した論理アドレスへのアクセス(例えば図33(β)におけるLBNが“a”から“a+47”までの連続アクセス)をしたとしても光学ヘッドはSpare Area 724への往復を行う結果アクセス時間が掛かってしまう。これに比べ図33(γ)の本発明のように欠陥領域3452に対して論理アドレス(LBN)が設定されているのでFile System 2側で光学ヘッドのアクセス回数を提言させるための処理が行える。

【0428】また、欠陥領域3566を避けて設定したExtentをFile Entry上に設定して有するため、File System 2側では図35に示す欠陥管理情報(TDM3472)を参照することなく、図41(d)に示すようにFile Entryに記録された情報に従って直接再生したい場所にアクセス出来るので、File System 2上の処理も簡単に行える。

2. <AV情報記録時に欠陥領域に対して Skipping を行い、記録終了後に欠陥領域を避けてExtent設定する>

情報を記録する時に、図36(γ)に示すように、情報記憶媒体上の欠陥領域3452を避けて次から記録するSkipping Replacement処理を行い、図46のST04、図50のST4-04に示すように記録終了後に上記欠陥領域を避けてExtentを設定する。

【0429】映像情報を記録する場所とFile Entry情報が記録されている場所は情報記憶媒体上で離れている。従って映像情報を少し記録する毎にExtent配置情報を記録するとその都度光学ヘッドのアクセス処理が必要となる。それに対して本発明のように、Extent配置情報を図2の半導体メモリー219に一時保管し、映像情報全体の記録終了後にまとめてFile Entry情報を書き換えた方が光学ヘッドのアクセス頻度が減り、映像情報の連続記録が容易となる。

10 3. <欠陥領域および既に存在する別ファイル記録領域をまたがってContiguous Data Areaを設定する>  
クレーム上の光学ヘッドは、光学ヘッド202に対応し、前記光学ヘッドを情報記憶媒体に対して移動させる光学ヘッド移動機構とは光学ヘッド移動機構(送りモーター)203に対応し、クレーム中の制御部とは添付資料第22図の制御部220に対応する。

【0430】図28に示したRWVIDEO.VOB、RWPICTURE.POB、RWAUDIO.AOBなどのファイル毎に情報を記録する。また、図38に示すようにContiguous Data Area単位の集合体として前記ファイル単位が構成される。

【0431】そして、図1(d)に示すように情報記憶媒体上に既に記録されている別のファイル記録領域または情報記憶媒体上の欠陥領域のいずれか一方をまたがってContiguous Data Area単位を設定している。

【0432】図41(e)のように欠陥領域3566を避けてExtent #1 3 5 7 1、#2 3 5 7 2、#3 3 5 7 3を設定すると、設定した後に欠陥領域3566に割り当てられたLBNアドレス場所にLinear Replacement処理を行ってPCファイルが入り込む場合がある。  
30 情報記憶媒体上に欠陥領域が多発した場合、このように欠陥領域にPCファイルが点在して記録される可能性が大きくなる。Contiguous Data Areaの設定条件として『Contiguous Data Area内のアドレスは常に連続し、特定以上を確保しない場合にはContiguous Data Areaを設定できない』とContiguous Data Area設定条件を定めてしまうと、既にPCファイルが入り込んでいるため図41(e)のExtent #1 3 5 7 1、#2 3 5 7 2、#3 3 5 7 3を削除し、再度AV情報を記録しようとしてもContiguous Data Areaの確保が不可能になる。

【0433】本発明のContiguous Data Areaの設定方法を採用することにより、欠陥領域にLinear Replacement処理を行ったPCファイルが入り込んでも、Extentの削除後に再度Contiguous Data Areaの設定が行え、情報記憶媒体上の記録領域の有効利用が可能となる。

4. 5. 6.の数値限定を行うことにより

\* 安定した連続記録条件の確保、

\* Skipping Replacementの連続サイズを制限することによる記録処理の安定化が達成できる。

50 【0434】

【発明の効果】以上詳述したように、この発明によれば、情報記憶媒体上に多量の欠陥領域が存在しても影響を受けることなく安定に連続記録を行うことが可能な記録場所の設定方法、記録方法およびそれを行う情報記録再生装置を提供することにある。また上記安定した連続記録に最も適した形式で情報が記録されている情報記憶媒体（およびそこに記録されている情報のデータ構造）を提供できる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】本発明に係る一実施の形態におけるコンティギューアデータエリア設定方法と記録前のエクステント事前設定方法の説明図。

【図 2】情報記録再生装置の概略構成を示す図。

【図 3】情報記録再生部内の構成説明図。

【図 4】情報記録再生部における論理ブロック番号の設定動作の説明図。

【図 5】情報記録再生部における欠陥部処理動作の説明図。

【図 6】録画再生アプリケーションソフトを用いてパーソナルコンピュータ上で映像情報の記録再生処理を行う場合のパーソナルコンピュータ上のプログラムソフトの階層構造と書く階層であつかうアドレス空間の関係を示す説明図。

【図 7】パーソナルコンピュータの構成説明図。

【図 8】DVD-RAMディスク内の概略記録内容のレイアウトの説明図。

【図 9】DVD-RAMディスク内のリードインエリア内の構成を示す説明図。

【図 10】DVD-RAM ディスク内のリードアウトエリア内の構成を示す説明図。

【図 11】物理セクタ番号と論理セクタ番号の関係を示す説明図。

【図 12】データエリアへ記録されるセクタ内の信号構造を示す説明図。

【図 13】データエリアへ記録される情報の記録単位を示す説明図。

【図 14】データエリア内でのゾーンとグループの関係を示す説明図。

【図 15】DVD-RAMディスクでの論理セクタ設定方法の説明図。

【図 16】データエリア内での欠陥領域に対する交替処理方法の説明図。

【図 17】UDF に従って情報記憶媒体上にファイルシステムを記録した例を示す図。

【図 18】図 17 の続きを示す図。

【図 19】階層化されたファイルシステムの構造と情報記憶媒体上への記録された情報内容との基本的な関係を簡単に示す図。

【図 20】ロングアロケーション記述子の内容の例を示す図。

【図 21】ショートアロケーション記述子の内容の例を示す図。

【図 22】アンロケイテッドスペースエントリーの記述内容をの説明図。

【図 23】ファイルエントリーの記述内容を一部示す説明図。

【図 24】ファイル識別記述子の記述内容を一部示す説明図。

【図 25】ファイルシステム構造の例を示す図。

【図 26】録画再生可能な情報記憶媒体上のデータ構造の説明図。

【図 27】情報記憶媒体上に記録されるAVファイル内のデータ構造の説明図。

【図 28】データエリア内データファイルのディレクトリ構造の説明図。

【図 29】AVファイルにおける論理ブロック番号とAVアドレスとの間の関係を示す図。

【図 30】記録信号の連続性を説明するために示した記録系システムの概念図。

【図 31】記録系において最もアクセス頻度が高い場合の半導体メモリ内の情報保存量の状態説明図。

【図 32】記録系において映像情報記録時間とアクセス時間のバランスが取れている場合の半導体メモリ内の情報保存量の状態説明図。

【図 33】情報記録再生装置が欠陥管理情報を管理する場合のスビッキングリプレイスメントとリニアリプレイスメントとの比較のための説明図。

【図 34】本発明の各実施の形態において、情報記録再生装置が管理する情報記憶媒体上での欠陥管理情報のデータ構造の説明図。

【図 35】本発明の各実施の形態において、ファイルシステム 2 が管理する情報記憶媒体上での欠陥管理情報のデータ構造の説明図。

【図 36】図 35 の欠陥管理情報に基づき管理された場合のスビッキングリプレイスメントとリニアリプレイスメントとの比較のための説明図。

【図 37】ファイルシステム 2 が欠陥管理情報を管理する場合の他の例を説明するために示した図。

【図 38】本発明の各実施の形態における追加記録映像情報とコンティギューアデータエリア内ノ未使用領域の説明図。

【図 39】ファイル毎に指定されるインフォメーションレングスの記録場所と各エクステント毎の属性記述箇所の説明図。

【図 40】本発明の各実施の形態におけるAVファイル内の部分削除処理方法に関する説明図。

【図 41】本発明に係る一実施例における欠陥領域を避けた記録方法の説明図。

【図 42】本発明に係る一実施例における欠陥領域を避けた記録方法の他の例の説明図。

【図 43】本発明に係る一実施例における欠陥領域を含

めた記録方法の説明図。

【図 4 4】この発明に係る情報記録再生装置の概略構成を示す図。

【図 4 5】書き込みコマンドの問題点を説明する図。

【図 4 6】本発明における映像情報の記録手順の概略を示す図。

【図 4 7】図 4 6 のステップST01の詳細を示す図。

【図 4 8】図 4 6 のステップST02の詳細を示す図。

【図 4 9】図 4 6 のステップST03の詳細を示す図。

【図 5 0】図 4 6 のステップST04の詳細を示す図。

【図 5 1】本発明の実施の形態において映像情報記録時に使用する各種APICommandの内容を示す図。

【図 5 2】本発明の実施の形態に係る情報記録再生装置に対するコマンドを示す説明図。

【図 5 3】本発明に係るAVファイルの識別情報が記録されている箇所を示す説明図。

【図 5 4】本発明に係るAVファイルの識別情報が記録されている箇所の他の例を示す説明図。

【図 5 5】本発明に係る映像情報の連続記録方法を説明するために示した概念図。

【図 5 6】本発明の実施の形態による情報記憶媒体への記録方法の説明図。

【図 5 7】同じく本発明の実施の形態による情報記憶媒体への記録方法の説明図。

【図 5 8】同じく本発明の実施の形態による情報記憶媒体への記録方法の説明図。

【図 5 9】同じく本発明の実施の形態による情報記憶媒体への記録方法の説明図。

【図 6 0】同じく本発明の実施の形態による情報記憶媒体への記録方法の説明図。

【図 6 1】同じく本発明の実施の形態による情報記憶媒体への記録方法の説明図。

【図 6 2】同じく本発明の実施の形態による情報記憶媒体への記録方法の説明図。

【図 6 3】同じく本発明の実施の形態による情報記憶媒体への記録方法の説明図。

【図 6 4】本発明に係る映像情報の再生手順を示す図。

【図 6 5】本発明に係るAVファイル内の部分消去の手順を示す図。

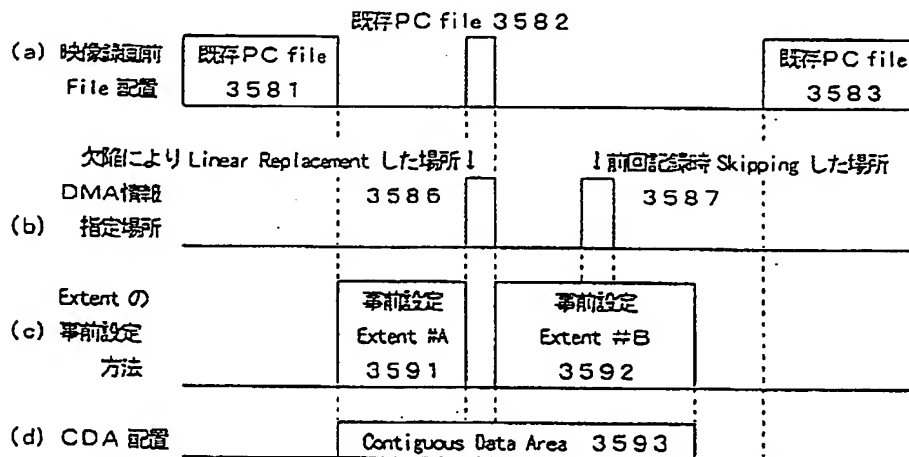
【図 6 6】本発明の他の実施の形態による映像情報記録方法の説明図。

【図 6 7】本発明の他の実施の形態によるExtent属性識別情報記録方法の説明図。

【符号の説明】

100…光ディスク、1004…データエリア、723…ユーザエリア、724…スベアエリア、3443、3444…記録領域、3452…欠陥領域、3456…代替領域、3459…非記録領域。

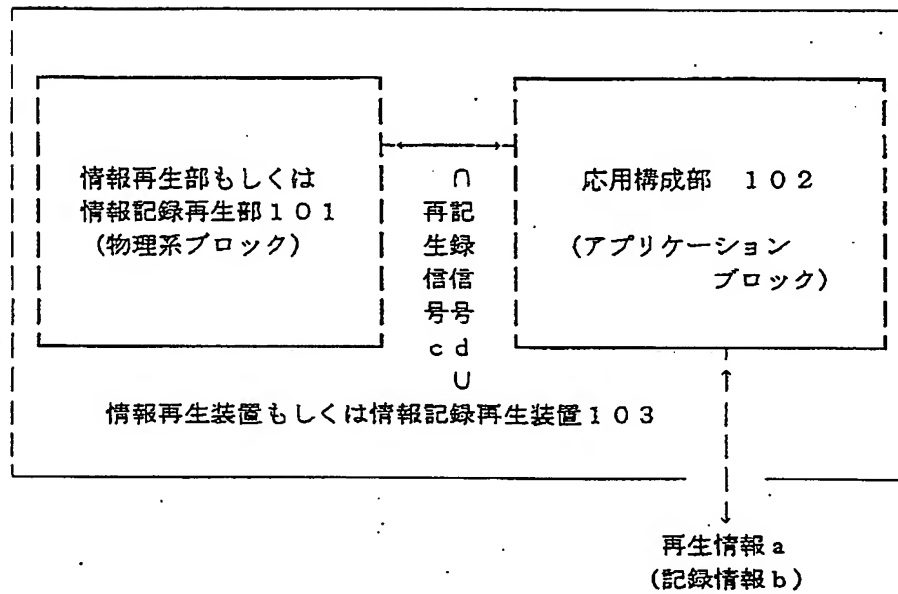
【図 1】



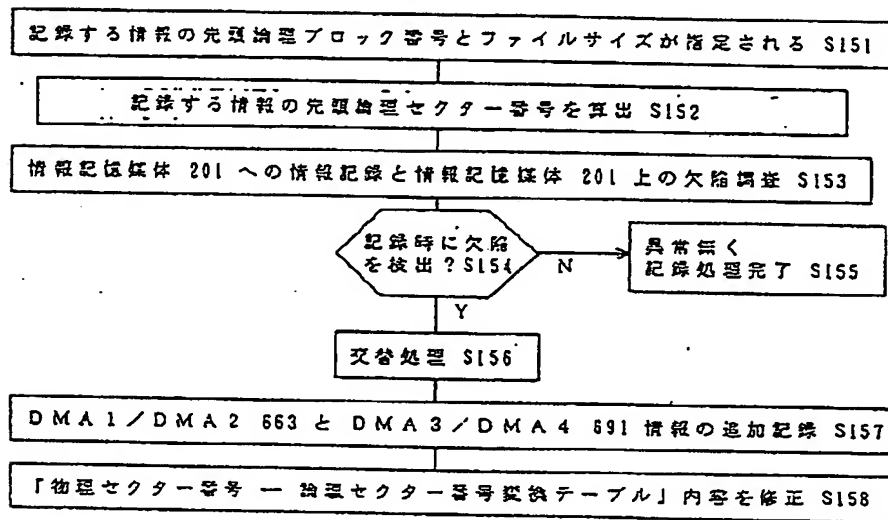
LBN/XXX における Contiguous Data Area 設定方法と記録前の  
Extent 事前設定方法



【図 2】

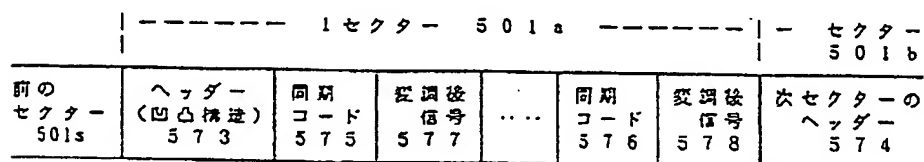


【図 5】



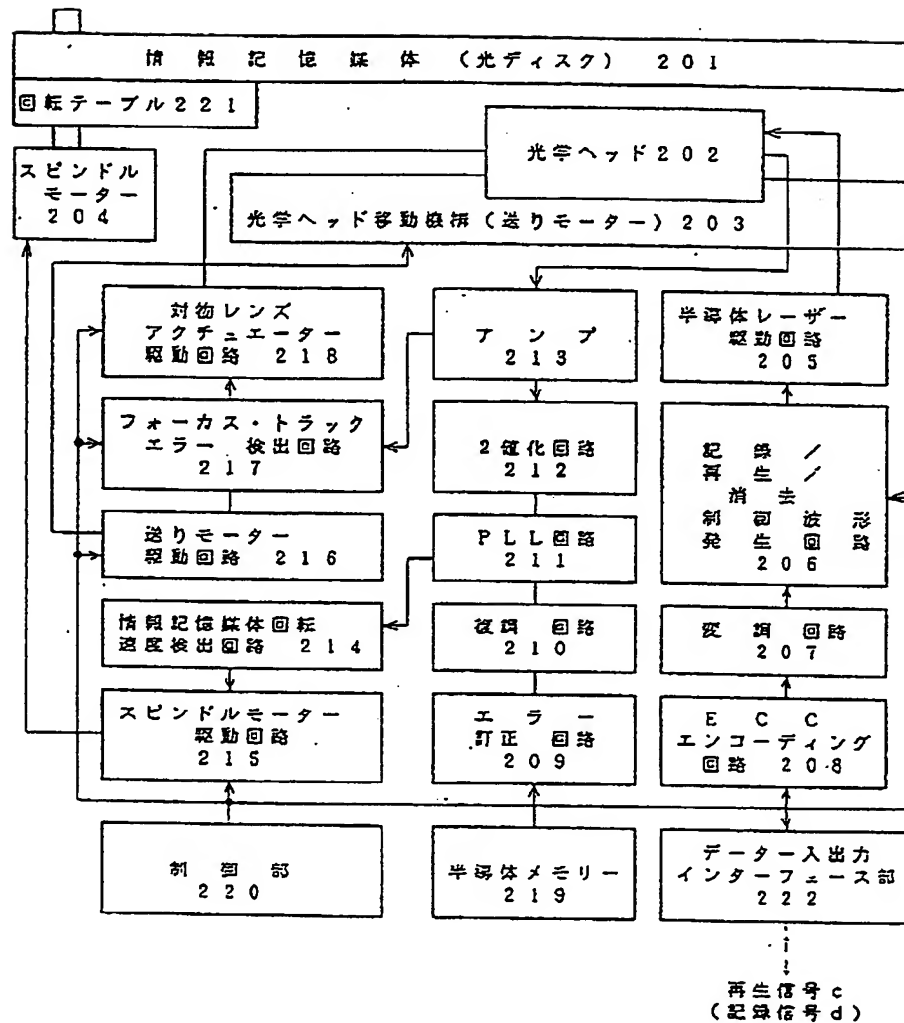
情報記録再生装置における欠陥処理動作の説明。

【図 12】



Data Area へ記録されるセクター内の信号構造

【図 3】



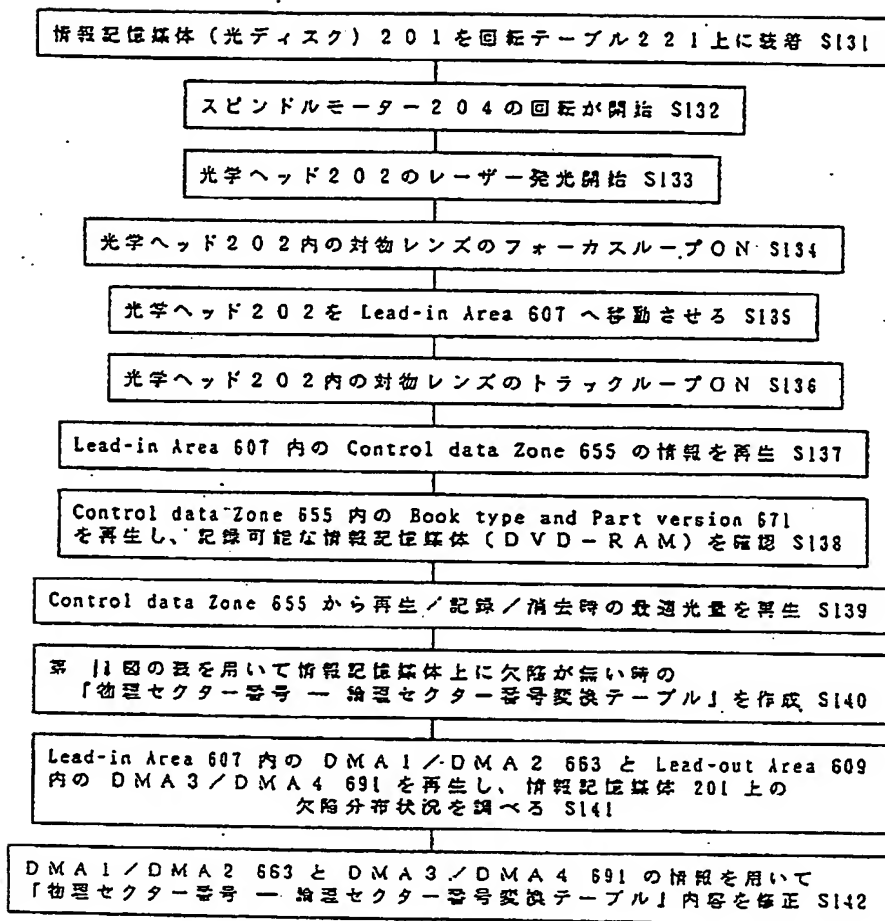
情報記録再生部 (物理系ブロック) 内の構成

【図 10】

Zone 名 603	各 Zone の 内容 651
Rewritable data Zone 645	DMA 3 & DMA 4 691
	Disc identification Zone 692
	Guard track Zone 693
	Drive test Zone 694
	Disk test Zone 695
	Guard track Zone 696

DVD-RAMディスクの Lead-out Area 内の構成

【図 4】



情報記録再生装置内での論理ブロック番号設定動作説明

【図 13】

----- ECCブロック 502. ----- ( 16個のセクターのかたまり )						
セクター 501s 2048bytes	セクター 501a 2048bytes	セクター 501b 2048bytes	セクター 501c 2048bytes	..	セクター 501p 2048bytes	セクター 501q

Data Areaへ記録される情報の記録単位

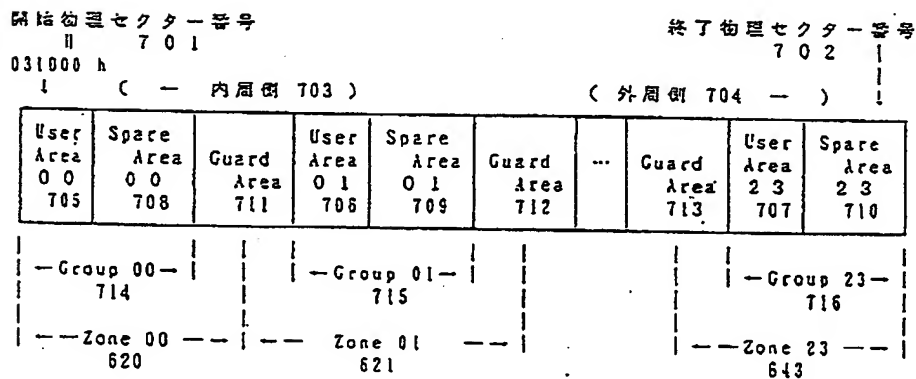
【図 6】

録画再生アプリケーションソフトを用いてPC上で映射情報の記録・再生処理を行う  
場合のPC上でのプログラムソフト階層構造と各階層で使うアドレス空間の関係

制 御 階 層	インターフェース	アドレス番号名	アドレス空間の説明
録画再生アプリケーションソフト (録画アプリ) 1	SDK API	AVファイル内 相対アドレス (AV Address)	AVファイル内の先頭位置を アドレス“0”としたAVフ ァイル内の連続アドレス番号
FS: File System (UDFなど) 2	Command 4	LSN	どちらも2KB単位の連続的 な連続番号が付く
ODD: Optical Disk Drive 3 (静止画録再生装置)	DDK Interface Command 5	LBN	
		PSN: Physical Sector Number	情報記録媒体 (光ディスク) のセクター毎にあらかじめ 物理的に番号が付けられている

LSN: Logical Sector Number 、 LBN: Logical Block Number

【図 14】



Data Area 内での Zone と Group の関係

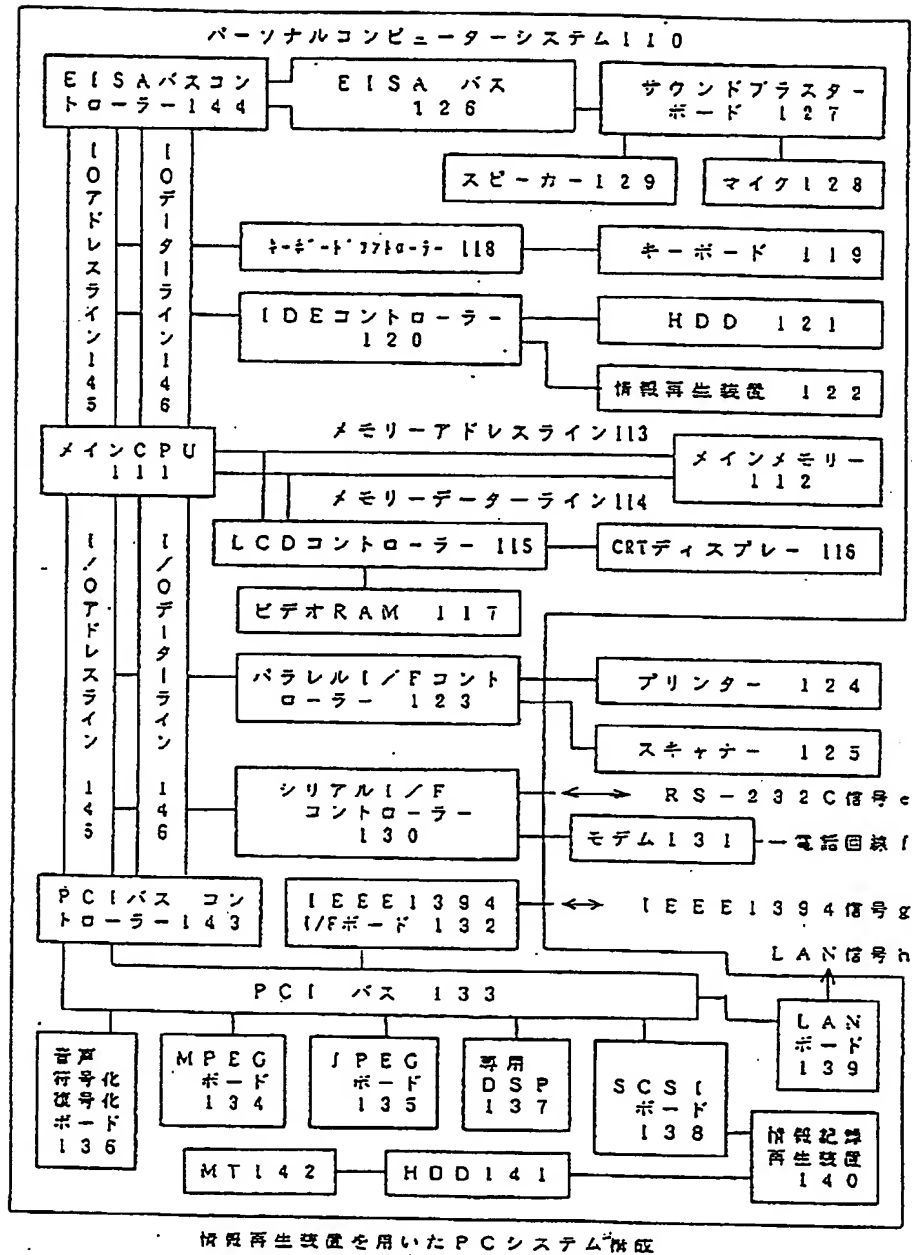
【図 15】

( 物理セクター番号 小 781 )      ( 物理セクター番号 大 782 )

Group 00 714 内での 物理セクター番号設定 の並び 783	Group 01 715 内での 物理セクター番号設定 の並び 784	..	Group 23 716 内での 物理セクター番号設定 の並び 785
--	--	----	--

DVD-RAMディスクでの物理セクター設定方法

【図7】



【図8】

半径位置(mm) 6 0 1	A r e a 名 6 0 2	Z o n e 名 6 0 3	物理セクター 番号 604
22.59~24.00 24.00 24.00~24.18	Lead-in Area 6 0 7	Embossed data Zone 611 Mirror Zone 612 Rewritable data Zone 613	27A80~2FFFF 30000~30FFF
24.18~25.40	Data Area ( Rewritable data Zone ) 6 0 8	Z o n e 0 0 620	31000~37D5F
25.40~26.79		Z o n e 0 1 621	37D60~4021F
26.79~28.19		Z o n e 0 2 622	40220~48E3F
28.19~29.59		Z o n e 0 3 623	48E40~521BF
29.59~30.99		Z o n e 0 4 624	521C0~58C9F
30.99~32.38		Z o n e 0 5 625	58CA0~65EDF
32.38~33.78		Z o n e 0 6 626	65EE0~7087F
33.78~35.18		Z o n e 0 7 627	70880~7897F
35.18~36.57		Z o n e 0 8 628	78980~871DF
:		:	:
43.56~44.96		Z o n e 1 4 634	C7A60~D5EFF
44.96~46.35		Z o n e 1 5 635	D5F00~E4AFF
46.35~47.75		Z o n e 1 6 636	E4800~F3E5F
47.75~49.15		Z o n e 1 7 637	F3E60~10391F
49.15~50.55		Z o n e 1 8 638	103920~11383F
50.55~51.94		Z o n e 1 9 639	113840~1244BF
51.94~53.34		Z o n e 2 0 640	1244C0~13559F
53.34~54.74		Z o n e 2 1 641	1355A0~146DDF
54.74~56.13		Z o n e 2 2 642	146DE0~158D7F
56.13~57.53		Z o n e 2 3 643	158D80~16847F
57.53~58.60	Lead-out Area 6 0 9	Rewritable data Zone 645	168480~17966F

DVD-RAMディスク内の既記記録内容レイアウト



【図 9】

Zone 名 603	各 Zone の 内容 651	
Embossed data Zone 611	Blank Zone 652	
	Reference signal Zone 653	
	Blank Zone 654	
	Control data Zone 655	Book type and Part version 671 Disc size and minimum read-out rate 672 Disc structure 673 Recording density 674 Data Area allocation 675 BCA descriptor 676 Velocity (露光量指定のための繰返条件) 677 Read power 678 Peak power 679 Bias power 680 reserved 681 情報記憶媒体の製造に関する情報 682 reserved 683
	Blank Zone 656	
Mirror Zone 612	Connection Zone 657	
Rewritable data Zone 613	Guard track Zone 658	
	Disk test Zone 659	
	Drive test Zone 660	
	Guard track Zone 661	
	Disc identification Zone 662	
	DMA1 & DMA2 663	

DVD-RAMディスクの Lead-in Area 内データー配置

【図 20】

- 階層化されたファイル・システム構造と情報記憶媒体上へ記録された情報内容との間の基本的な関係の概念を示した概念
- (a) 階層ファイル・システム構造の一例
- (b) UDF に従った情報記憶媒体へのファイル・システム記録方法の一例

LAD (論理ブロック番号) ... 情報記憶媒体上の Extent の位置記述方法

Extent の長さ 410 (論理ブロック数) [ 4 Bytes で表示 ]	Extent の位置 411 (論理ブロック番号) [ 4 Bytes で表示 ]	Implementation Use 412 (演算処理に利用する情報) [ 8 Bytes で表示 ]
--	---	--

Long Allocation Descriptor ( Extent の位置 ) を示す大きいサイズの記述文) の記述内容

【図 11】

Zone 番号 773	Guard Area 771 の セクター 番号	番号	G r o u p			Guard Area 772 の セクター 番号	各 Group 内最初の セクター の 論理 セクター 番号 774
			User Area 723		Spare Area 724		
			セクター 番号	セクター 数	セクター 番号		
0 0	-	00	31000～ 377DF	26592	377E0～ 37D2F	37D30～ 37D5F	0
0 1	37D60～ 37D8F	01	37D90～ 3FB2F	32160	3FB30～ 401EF	401F0～ 4021F	26592
0 2	40220～ 4024F	02	40250～ 486EF	33952	486F0～ 48E0F	48E10～ 48E3F	58752
0 3	48E40～ 48E6F	03	48E70～ 51A0F	35744	51A10～ 5218F	52190～ 521BF	92704
0 4	521C0～ 521EF	04	521F0～ 5B48F	37536	5B490～ 5BC6F	5BC70～ 5BC9F	128448
:	:	:	:	:	:	:	:
2 0	1244C0～ 12450F	20	124510～ 13476F	66144	134770～ 13554F	135550～ 13559F	943552
2 1	1355A0～ 1355EF	21	1355F0～ 145F4F	67936	145F50～ 146D8F	146D90～ 146DDF	1009696
2 2	146DE0～ 146E2F	22	146E30～ 157E8F	69728	157E90～ 158D2F	158D30～ 158D7F	1077632
2 3	158D80～ 158DCF	23	158DD0～ 16A57F	71600	16A580～ 16B47F	-	1147360

物理セクター番号と論理セクター番号の関係  
 ( DVD-RAM ディスク Data Area 内の物理セクター番号配置)

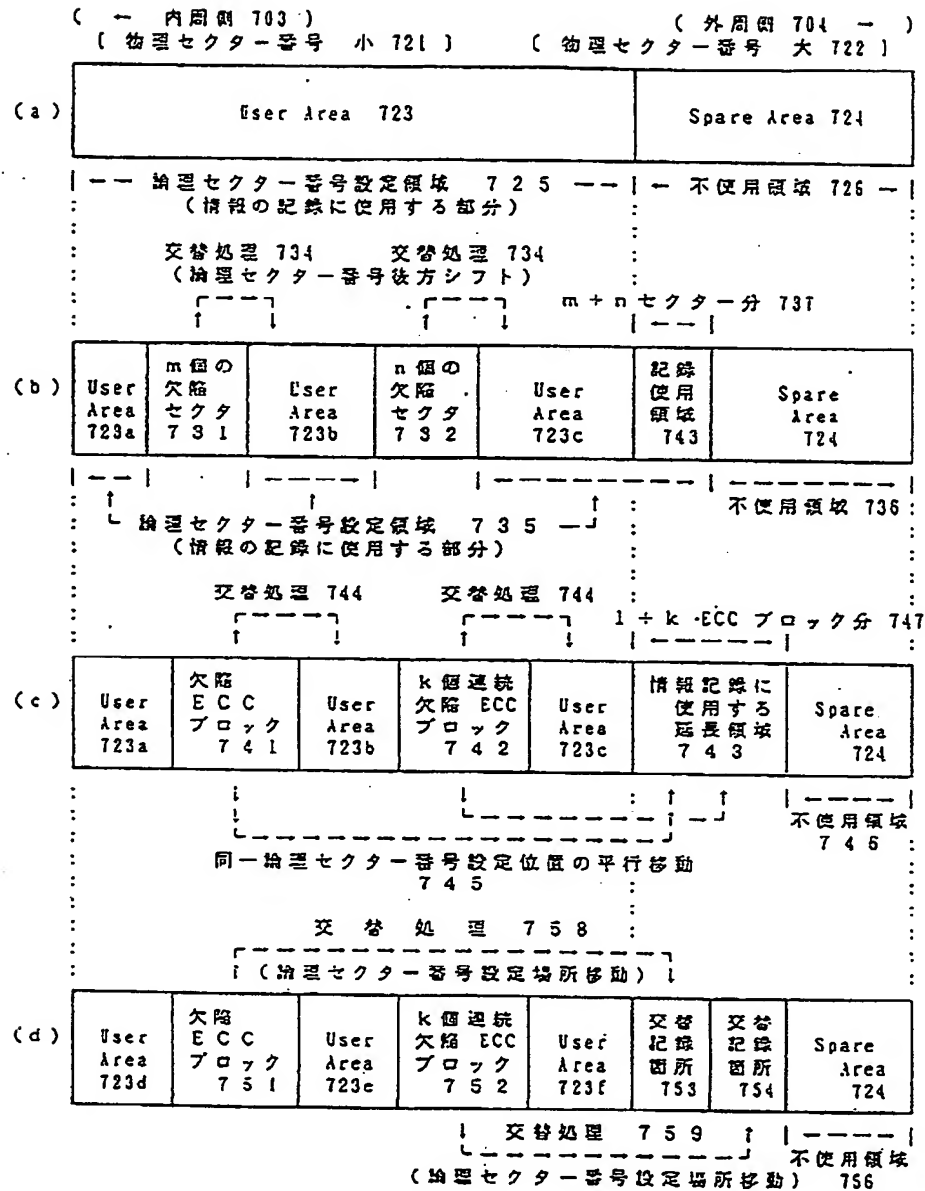
【図 21】

A D (論理ブロック番号) … 情報記憶媒体上の Extent の位置記述方法

Extent の長さ 410 (論理ブロック数) [ 4 Bytes で表示 ]	Extent の位置 411 (論理ブロック番号) [ 4 Bytes で表示 ]
--	---

Short Allocation Descriptor ( Extent の位置 ) を示す小さいサイズの記述文) の記述内容

【図 16】



Data Area 内での欠陥領域に対する交替処理方法

【図17】

LSN	LBN	Structure 441	Descriptors 442	Contents 443
0-15			Reserved 459 (all 00h bytes)	
16		Volume Recognition Sequence 444	Beginning Ext. Area Descr. 445	VRS 開始位置
17			Volume Structure Descrip. 446	DISC内容説明
18			Boot Descriptor 447	Boot開始位置
19			Terminating Ext. Area D. 448	VRS 終了位置
~31			Reserved 460 (all 00h bytes)	
32~			省 略	
34		Main Volume Descriptor Sequence 449	Partition Descriptor 450 Partition Contents Use 451 Unallocated Space Table 452 AD (50) Unallocated Space Bitmap 453 AD (0)	Space Table の記録位置 Space Bitmap の記録位置
35			Logical Volume Descriptor 454 Logical Volume Cont. Use 455 LAD (100)	File Set Descriptor の記録位置
~47			省 略	
~53			省 略	
-255			Reserved 461 (all 00h bytes)	
256		First Anchor Point 456	Anchor Volume Descriptor Pointer 458	
-271			Reserved 462 (all 00h bytes)	
272 ~ 321	0 ~ 49	File	Space Bitmap Descriptor 470	Space Bitmap 記録・未記録 のマッピング
322 ~ 371	50 ~ 99		USE(AD(*), AD(*), ..., AD(*)) 471	Space Table 未記録状態の Extents 一覧
372	100		File Set Descriptor 472 Root Directory ICB 473 LAD (102) 474	Root Directory FEの記録位置
373	101		省 略	
374	102		RootDirectoryAFE(AD(103)) 475	FIDs記録位置

{図18}

375	103	Structure 486	A FID(LAD(104), LAD(110))476	B、D:FE位置
376	104		ParentDirect.BFE(AD(105))477	FIDs記録位置
377	105		B の FID(LAD(106)) 478	C の F E 位置
378	106		FE(AD(107)AD(108)AD(109))479	FileData位置
382	110		DirectoryD F E (AD(111))480	FIDs記録位置
383	111		D FID(LAD(112), LAD(無し))481	E、F:FE位置
384	112		SubDirectoryF FE(AD(113))482	FIDs記録位置
385	113		FID(LAD( )LAD(114)LAD(118))483	H、I:FE位置
386	114		FE(AD(115)AD(116)AD(117))484	FileData位置
390	118		I F E (AD(119), AD(120)) 485	FileData位置
379-	107-	File Data 487	File Data C の情報 488	
387-	115-		File Data H の情報 489	
391-	119-		File Data I の情報 490	
LLSN-271 ~LLSN-257			Reserved 463 ( all 00h bytes )	
LLSN -256		SecondAnchor Point 457	Anchor Volume Descriptor Pointer 458	
LLSN-255 ~LLSN-224			Reserved 464 ( all 00h bytes )	
LLSN -223 ~ LLSN -208		Reserve Volume Descriptor Sequence 467	Partition Descriptor 450 Partition Contents Use 451 Unallocated Space Table452 Unallocated SpaceBitmap453 Logical Volume Descriptor454 Logical Volume Cont. Use 455	Main Volume Descriptor Sequence の backup
LLSN-207 ~LLSN			Reserved 465 ( all 00h bytes )	

\* L S N ... 論理セクター番号 ( Logical Sector Number ) 491

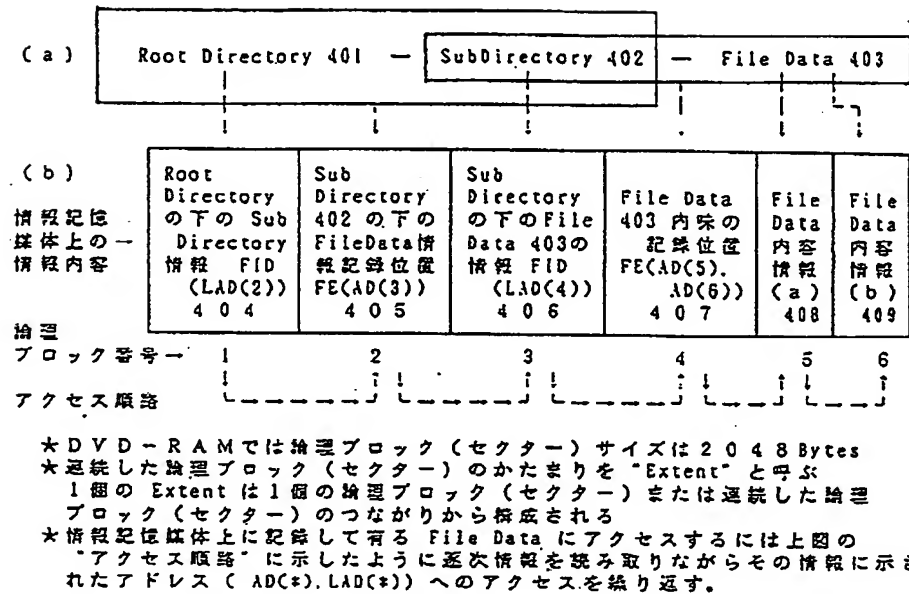
\* L B N ... 論理ブロック番号 ( Logical Block Number ) 492

\* L L S N ... 最後の論理セクター番号 ( Last L S N ) 493

\* Space Bitmap が Space Table 一緒に記録される事は極めてまれで、  
通常は Space Bitmap と Space Table のうち、どちらか一方が記録されて  
いる

UDFに従って情報記憶媒体上にファイル・システムを記録した例  
(ファイル・システム構造の一例) に対応)

【図 19】



【図 22】

△ USE(AD(\*), AD(\*), ..., AD(\*))  
 ... 未記録な Extent 検索用の記述文で Space Table として用いられる  
 ↓

Descriptor Tag(=263) 記述内容の識別子 413 [16 Bytes]	ICB Tag ファイルのタイプを示す (Type=1) 4 1 4 [20 Bytes]	Allocation Descriptors 列の全長 (Bytes 数) 4 1 5 [4 Bytes]	Allocation Descriptors 各 Extent の情報記憶媒体上位置 (情報記憶媒体上の論理ブロック番号)を並べて列記する (AD(*), AD(*), ..., AD(*)) 4 1 6
--	---	---	--

- \* ICB Tag 内の File Type=1 は Unallocated Space Entry を意味し、
- \* ICB Tag 内の File Type=4 は Directory、
- \* ICB Tag 内の File Type=5 は File Data を表している。

Unallocated Space Entry (未記録な Extent の情報記憶媒体上の位置に関する直接登録用記述文)の記述内容



【図23】

FE(AD(\*), AD(\*), ..., AD(\*))

… 階層構造を持ったファイル構造内での FID で指定されたファイル  
の情報記憶媒体上での記録位置を表示

||

Descriptor Tag(= 261) 記述内容の 識別子 417 [16 Bytes]	ICB Tag ファイルの タイプを示す (Type=4/5) 4 1 8 [20 Bytes]	Permissions ユーザー別の 記録・再生・削除 許可情報 4 1 9 [32 Bytes]	Allocation Descriptors Fileの情報記憶媒体上記録位置 (情報記憶媒体上の論理 ブロック番号)を並べて列記 (AD(*), AD(*), ..., AD(*)) 4 2 0
--	---	--	---

\* ICB Tag 内の File Type=1 は Unallocated Space Entry を意味し、

\* ICB Tag 内の File Type=4 は Directory、

\* ICB Tag 内の File Type=5 は File Data を表している。

File Entry (File の属性と File の記録位置の情報登録に関する  
記述文) の記述内容を一部抜粋した内容

【図24】

FID (LAD (論理ブロック番号))

… File (Root Directory, SubDirectory, File Data など) の情報を表示

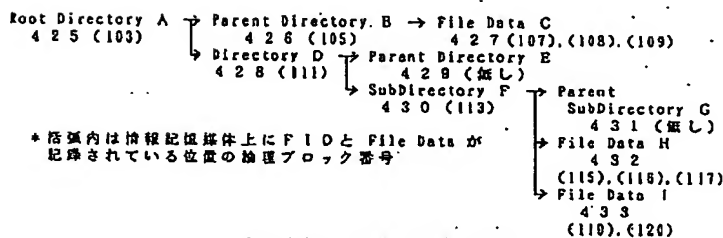
||

Descriptor Tag(= 257) 記述内容の 識別子 421 [16 Bytes]	File Characteristics ファイルの種別を 示す 4 2 2 [1 Bytes]	Information Control Block 対応した FE の 記録位置 423 (LAD(*))	File Identifier ディレクトリ 名かファイル データ名 424	Padding ダミー 領域 (000h) 4 3 7
--	--	---	--	---

\* File Characteristics (ファイル種別) は Parent Directory、Directory、  
File Data、ファイル削除フラグ のどれかを示す。

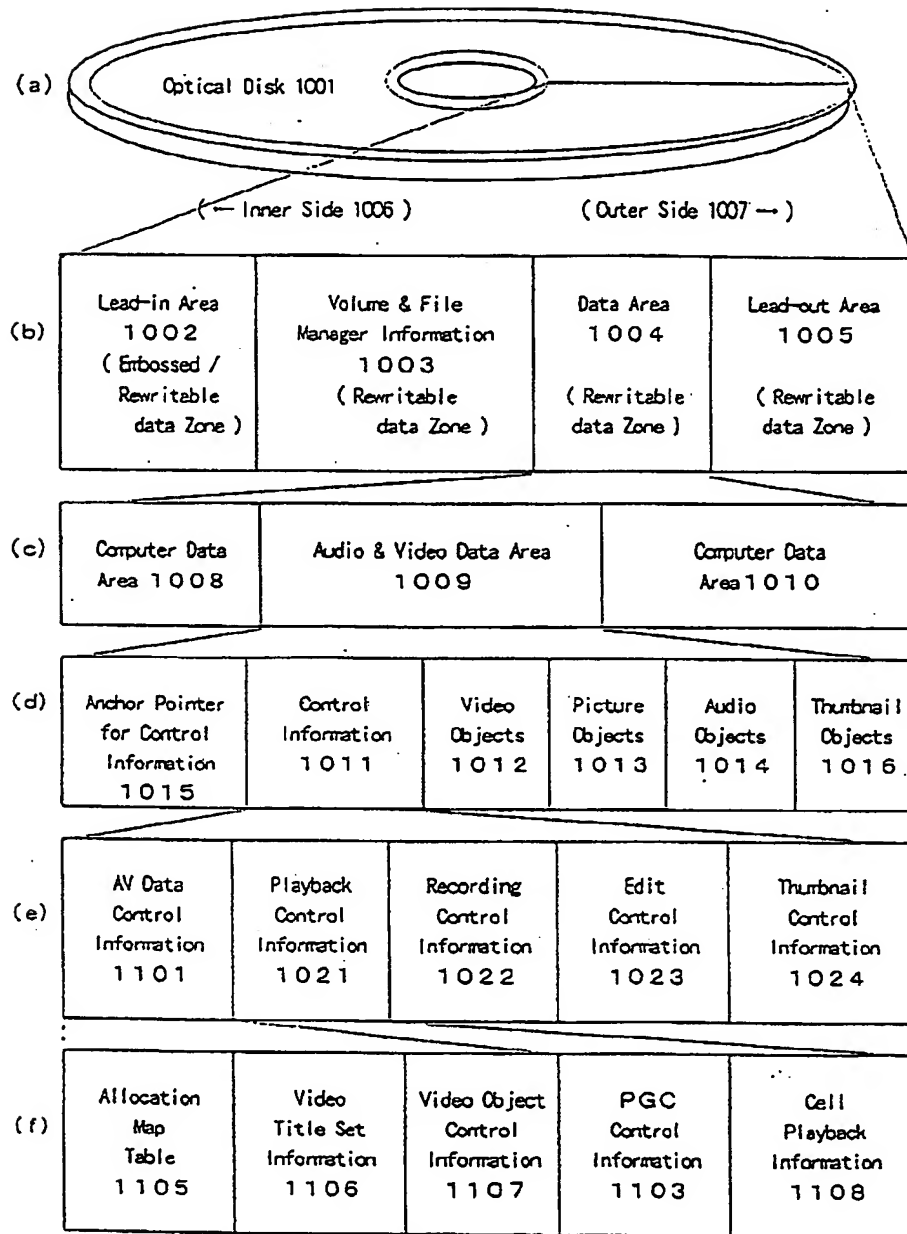
File Identifier Descriptor (File の名前と対応した FE の  
記録位置に関する記述文) の記述内容を一部抜粋した内容

【図25】



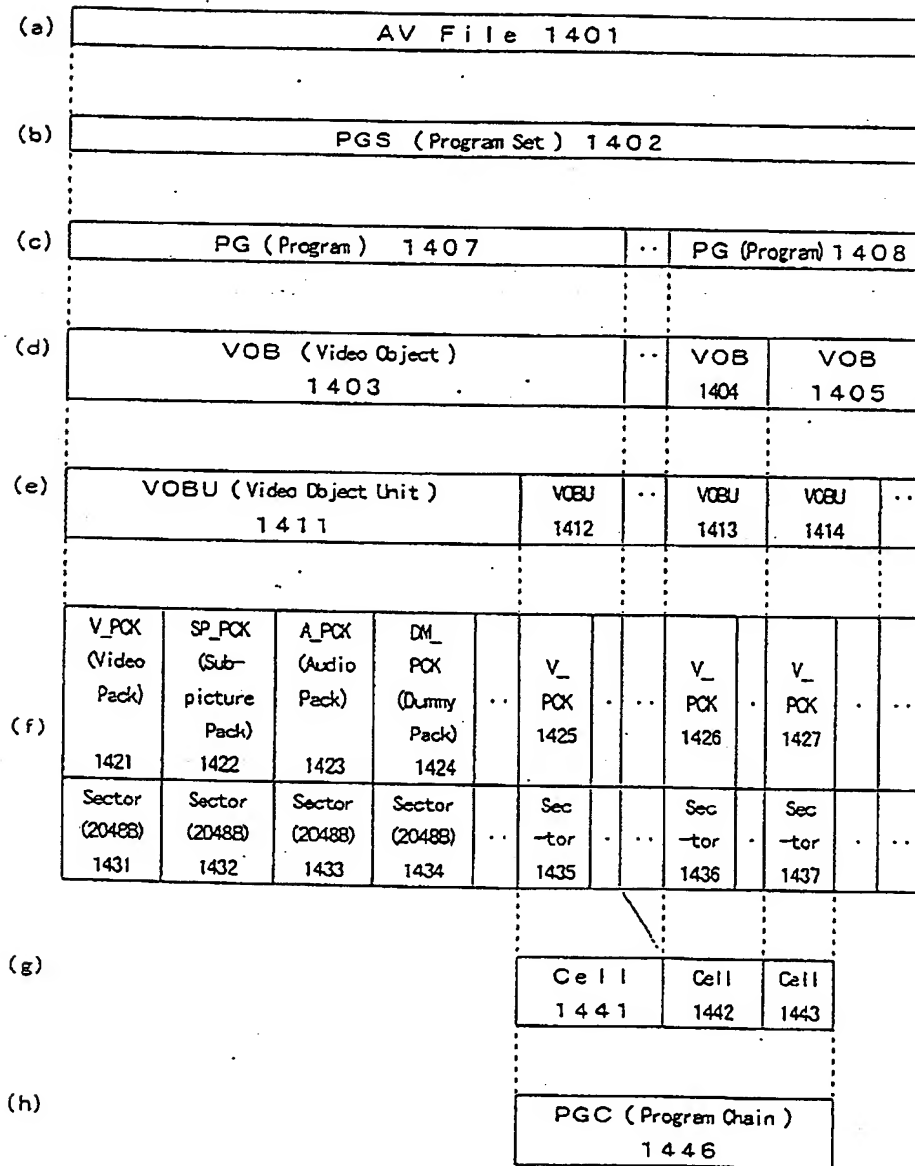
ファイル・システム構造の一例

【図 26】



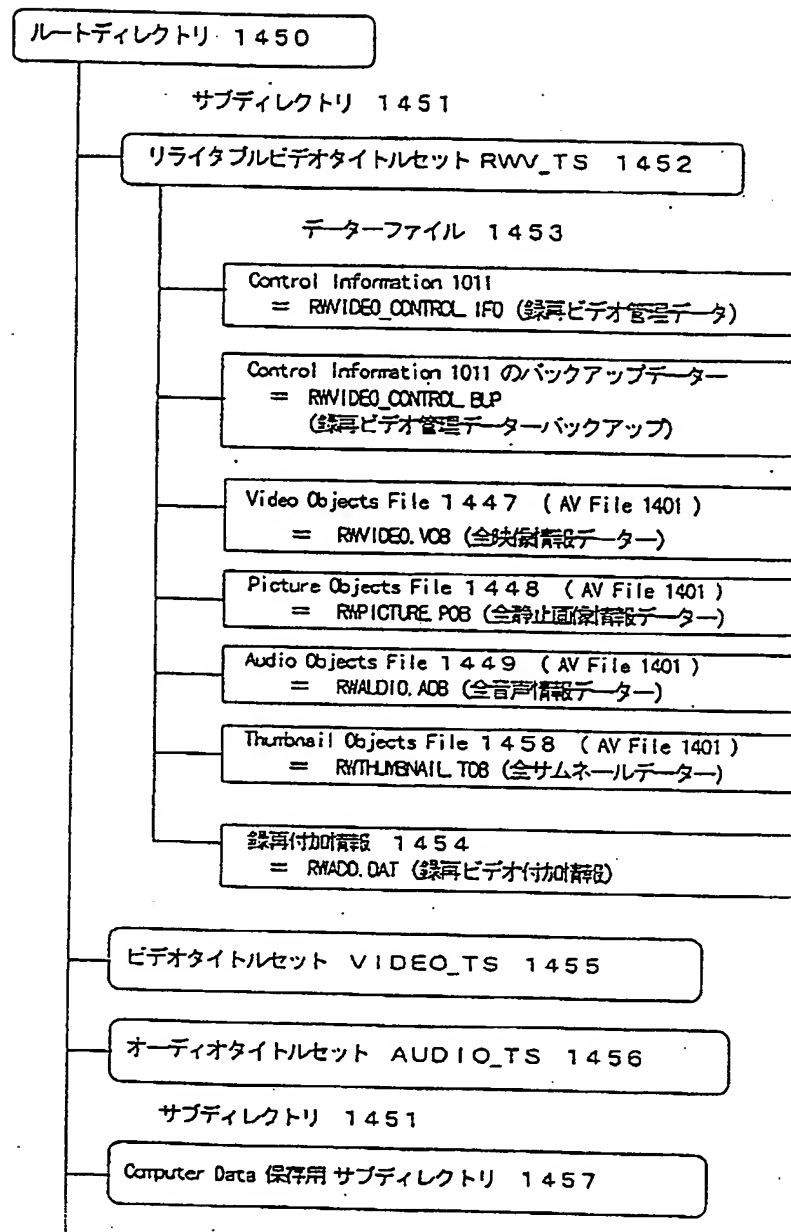
録画再生可能な情報記録媒体上のデータ構造

【図 27】



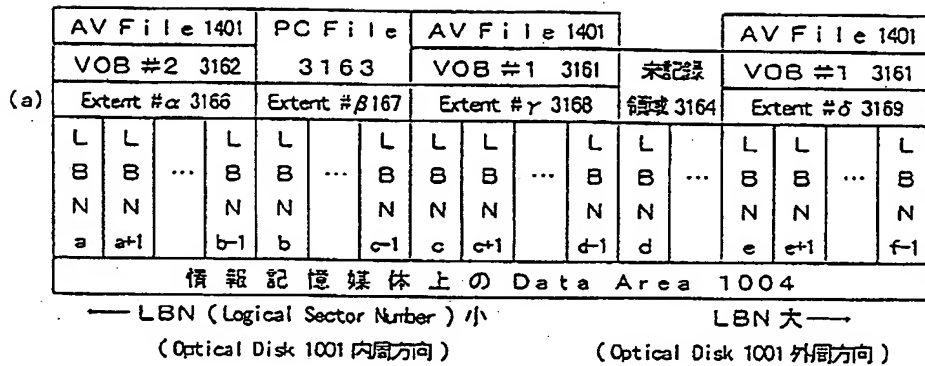
情報記録媒体上に記録される AV File 内のデータ構造

【図28】

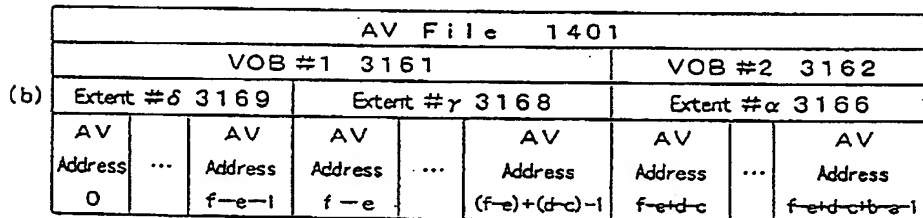


Data Area 内 データファイルのディレクトリ構造

【図29】



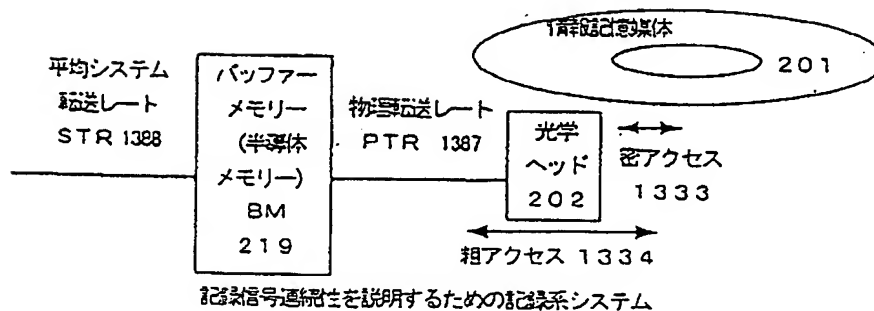
AVファイルの File Entry ... FE(AD(e, f-e), AD(c, d-c), AD(a, b-a))  
 || || ||  
 Extent #δ 3169, Extent #γ 3168, Extent #α 3166



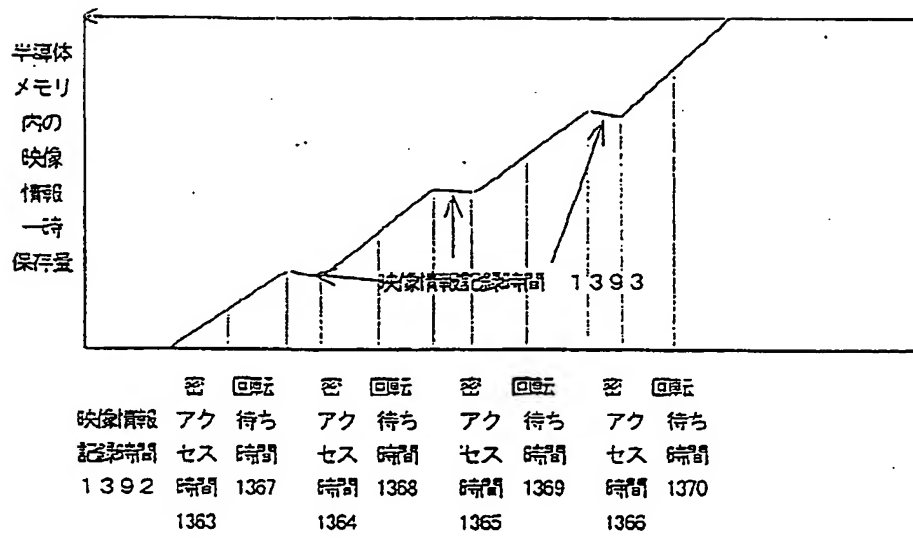
AVファイルの File Entry ... FE(Extent#δ 169, Extent#γ 168, Extent#α 166)

AV File における Logical Block Number と AV Address との関係

【図30】

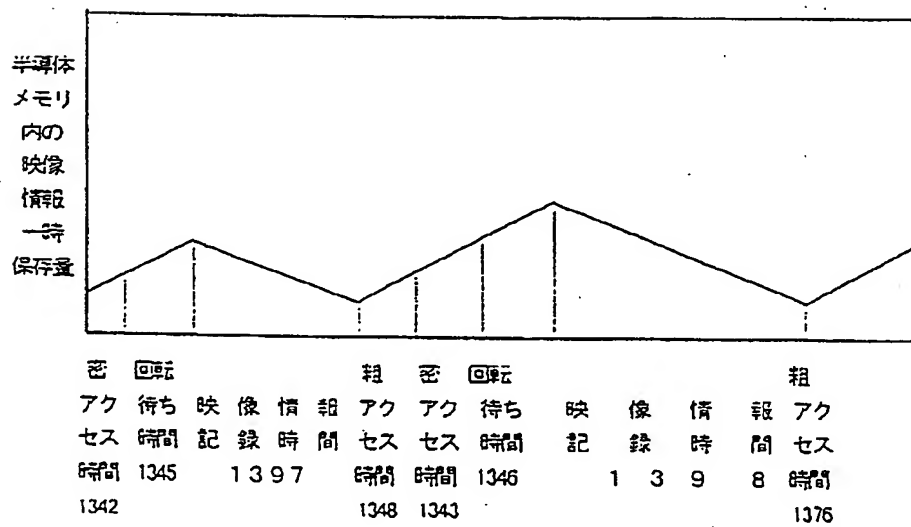


【図 3 1】



最もアクセス頻度の高い場合の半導体メモリ内の情報保存量状態

【図 3 2】



映像情報記録時間とアクセス時間のバランスが取れている場合の関係



【図33】

(α)

記録データ#1	記録データ#2	記録データ#3
---------	---------	---------

(β)

User Area 723												Spare Area 724			
記録領域 3441			欠陥領域 3451			記録領域 3442			...			代替領域 3455			...
記録データ#1			非記録 3457			記録データ#3			...			記録データ#2			...
L	L		LBNの設定 を行わない 領域 3461			L	L		L	L		L	L		
B	B	...				B	B	...	B	B	...	B	B	...	...
N	N	...				N	N	...	N	N	...	N	N	...	...
a	a+1					a+32	a+33		a+48	a+49		a+16	a+17		
P	P		P	P		P	P		P	P		P	P		
S	S	...	S	S	...	S	S	...	S	S	...	S	S	...	...
N	N	...	N	N	...	N	N	...	N	N	...	N	N	...	...
b	b+1		b+16	b+17		b+32	b+33		b+48	b+49		d	d+1		

「欠陥ブロック

内先頭セクタ

番号3431

「欠陥領域の代替

ブロック内先頭位置

セクタ 3432

—— 欠陥領域3451に対する代替処理 3465 ——

(γ)

User Area 723												Spare Area 724			
記録領域 3443			欠陥領域 3452			代替領域 3456			記録領域 3444			...			非記録領域 3459
記録データ#1			非記録 3458			記録データ#2			記録データ#3			...			映像情報は非記録
L	L		L	L		L	L		L	L		映像情報に 対応してLBNの 設定を 行わない領域 3462			
B	B	...	B	B	...	B	B	...	B	B	...				
N	N	...	N	N	...	N	N	...	N	N	...				
a	a+1		a+16	a+17		a+32	a+33		a+48	a+49					
P	P		P	P		P	P		P	P		P	P		
S	S	...	S	S	...	S	S	...	S	S	...	S	S	...	...
N	N	...	N	N	...	N	N	...	N	N	...	N	N	...	...
b	b+1		b+16	b+17		b+32	b+33		b+48	b+49		d	d+1		

「欠陥ブロック 「前記欠陥領域

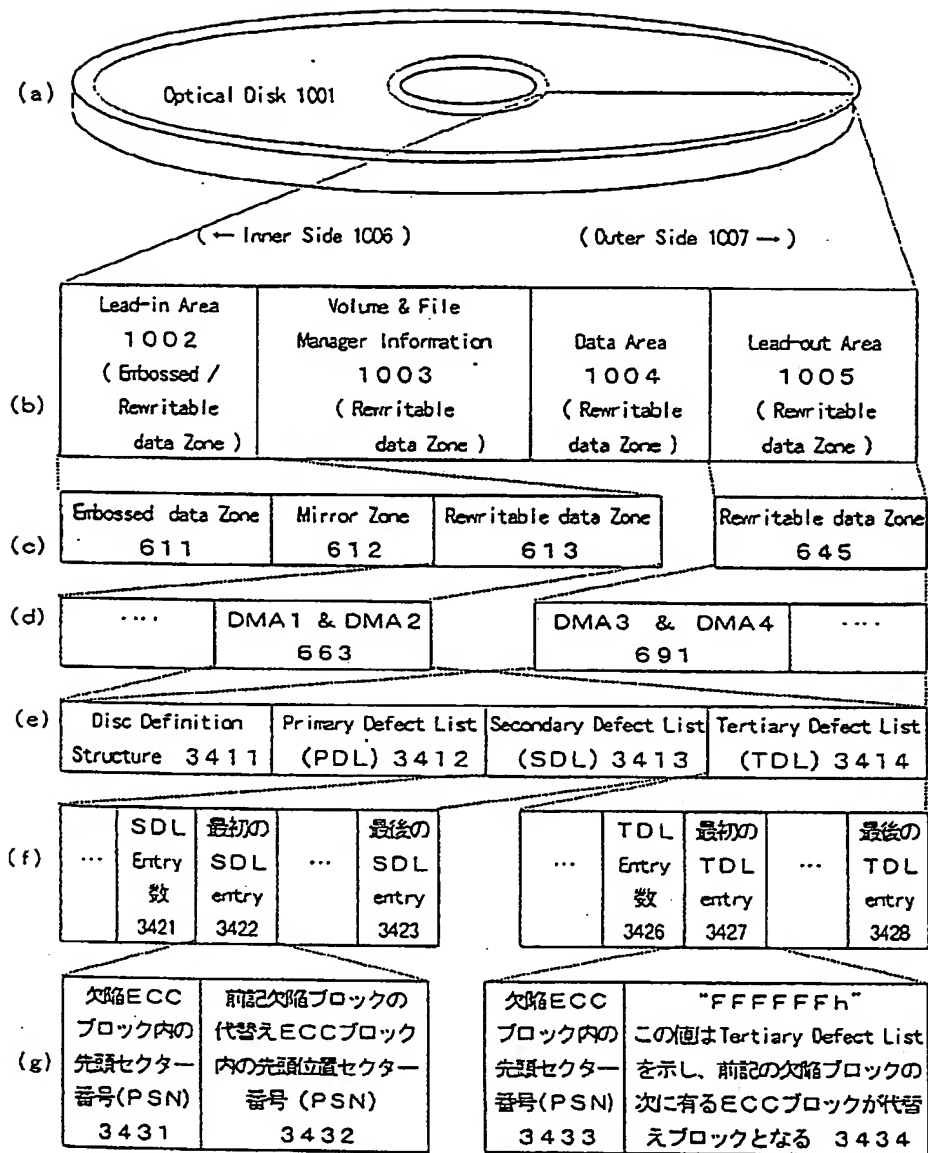
内先頭セクター の代替ECC

3433 ブロック 3463

—— 代替処理 3466 ——

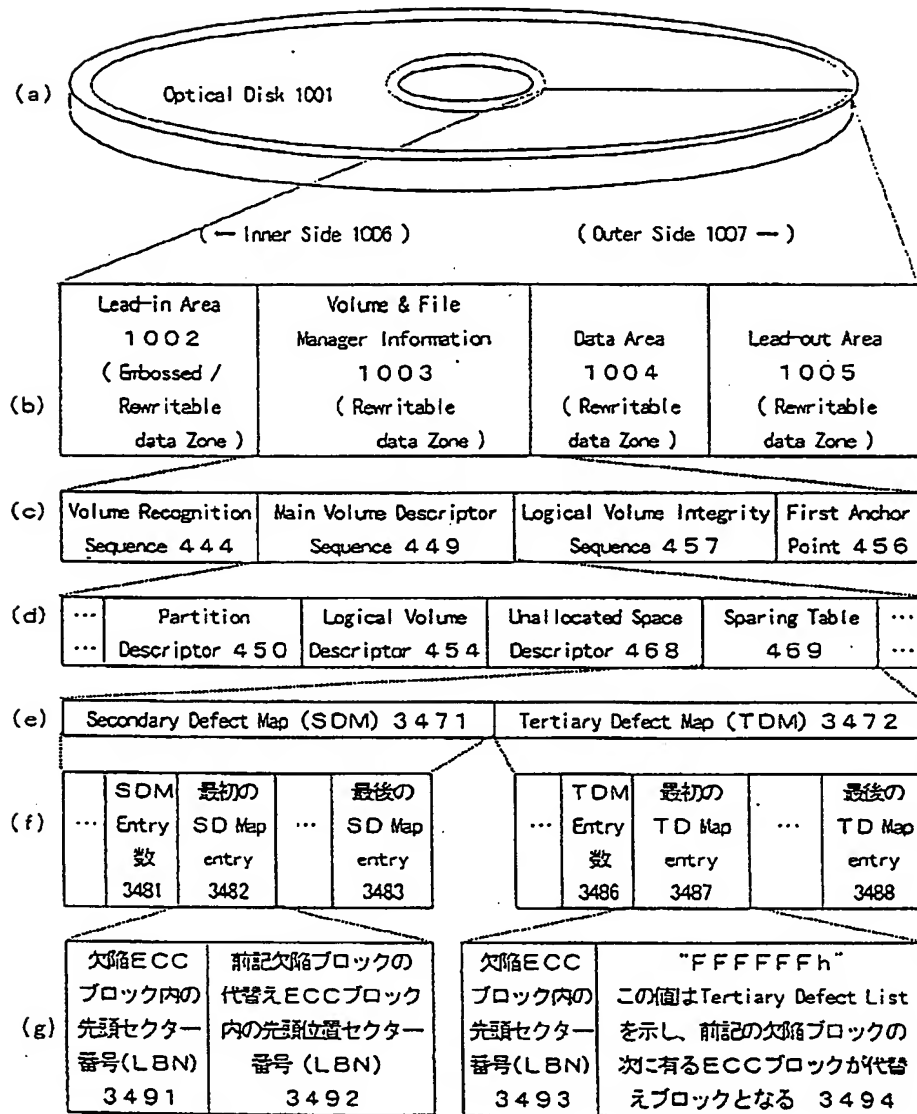
欠陥管理情報と情報記録媒体上に記録された欠陥/代替処理との関係に  
 ついての Skipping Replacement と Linear Replacement 間の比較

【図 3 4】



XX, XX-PS, LBN/ODD, LBN/ODD-PS,  
LBN/XXX, LBN/XXX-PS における情報磁気再生装置 (ODD3) 側が  
管理する情報磁気記録媒体上の欠陥管理情報のデータ構造

【図 3 5】



LBN/UDF、LBN/UDF-PS、LBN/UDF-00AFixにおける  
File System 2 ( UDF ) 側が管理する情報と記録媒体上の欠陥管理情報の  
データ構造

【図 36】

欠陥管理情報と情報記録媒体上に記録された欠陥/代替処理  
との関係についての Skipping Replacement と Linear Replacement 間の比較を

(α)

記録データ#1	記録データ#2	記録データ#3
---------	---------	---------

User Area 723														
PCデータファイル 3500									未記録領域 3497	代替専用ファイル 3501				未記録領域 3498
記録領域 3441	欠陥領域 3451		記録領域 3442						領域 3497	代替領域 3455		...	領域 3498	
記録データ#1	非記録 3457		記録データ#3				...		記録データ#2	...		...		
L	L		L	L		L	L		L		L		L	
B	B	...	B	B	...	B	B	...	B	...	B	...	B	...
N	N	...	N	N	...	N	N	...	N	...	N	...	N	...
a	a+1		a+16	a+17		a+32	a+33		a+48		f	f+15		g

(β)

└ 欠陥ECCブロック内の  
先頭セクタ番号(LBN)  
3491

└ 前記欠陥領域の代替ECC  
ブロック内先頭位置番号  
(LBN) 3492

└ 欠陥領域3451に対する代替処理 3495 ─┘

User Area 723										Spare Area 724	
記録領域 3443	欠陥領域 3452		代替領域 3456		記録領域 3444		...		非記録領域 3459		
記録データ#1	非記録 3458		記録データ#2		記録データ#3		...		映像情報非記録		
L	L		L	L		L	L		映像情報記録に対応 してLBNの設定を 行わない領域 3462		
B	B	...	B	B	...	B	B	...			
N	N	...	N	N	...	N	N	...			
a	a+1		a+16	a+17		a+32	a+33				

(γ)

└ 欠陥ブロック ┐ 前記の代替え  
内先頭LBN    ブロック先頭  
3493           LBN 3494

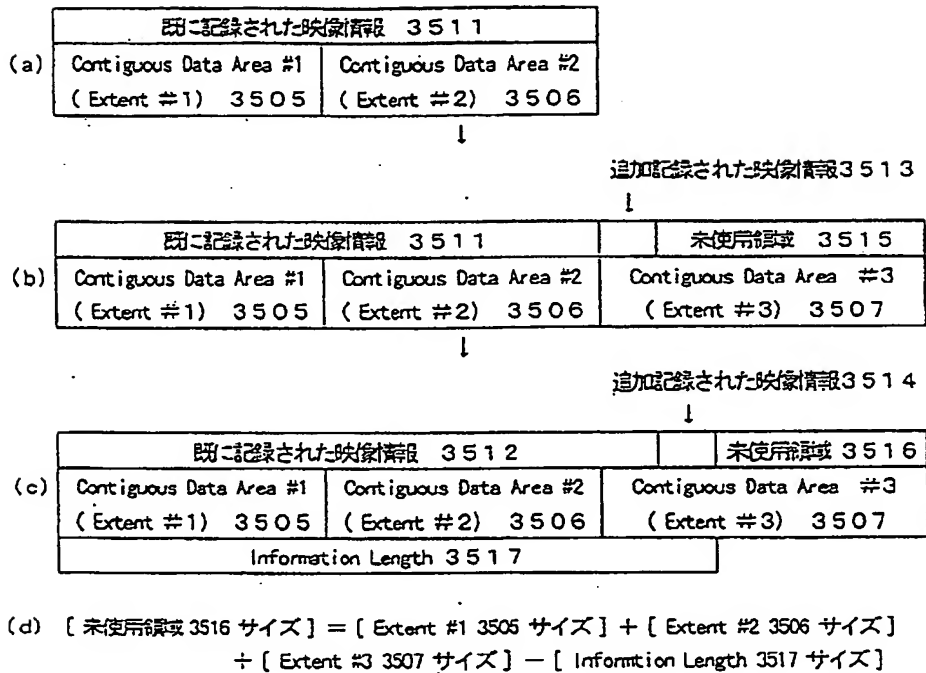
└ 代替処理 3466 ─┘

【図 37】

FS2側で管理する欠陥管理情報の記録方法に関する他の実施形態の一覧表

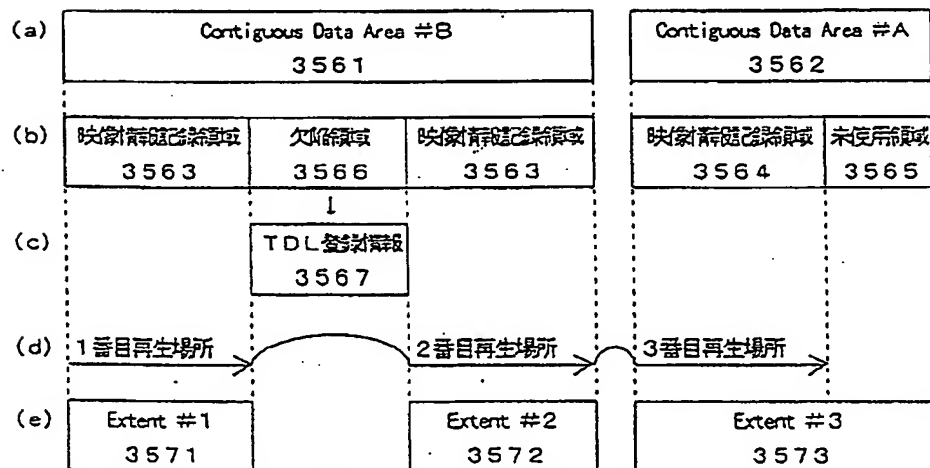
方式番号	具体的内容説明	Extent との関係	利点・効果
①	隠しファイルを作成し、そこに欠陥マップ情報を記述する		UDFドライブ変更で可能 変更箇所が少なくて済む
②	AV File に Long Allocation Descriptor を採用し、Implementationに欠陥フラグ設定	欠陥領域を別の Extent にする	UDF規格の外変更で可能 変更箇所が少なくて済む

【図 38】



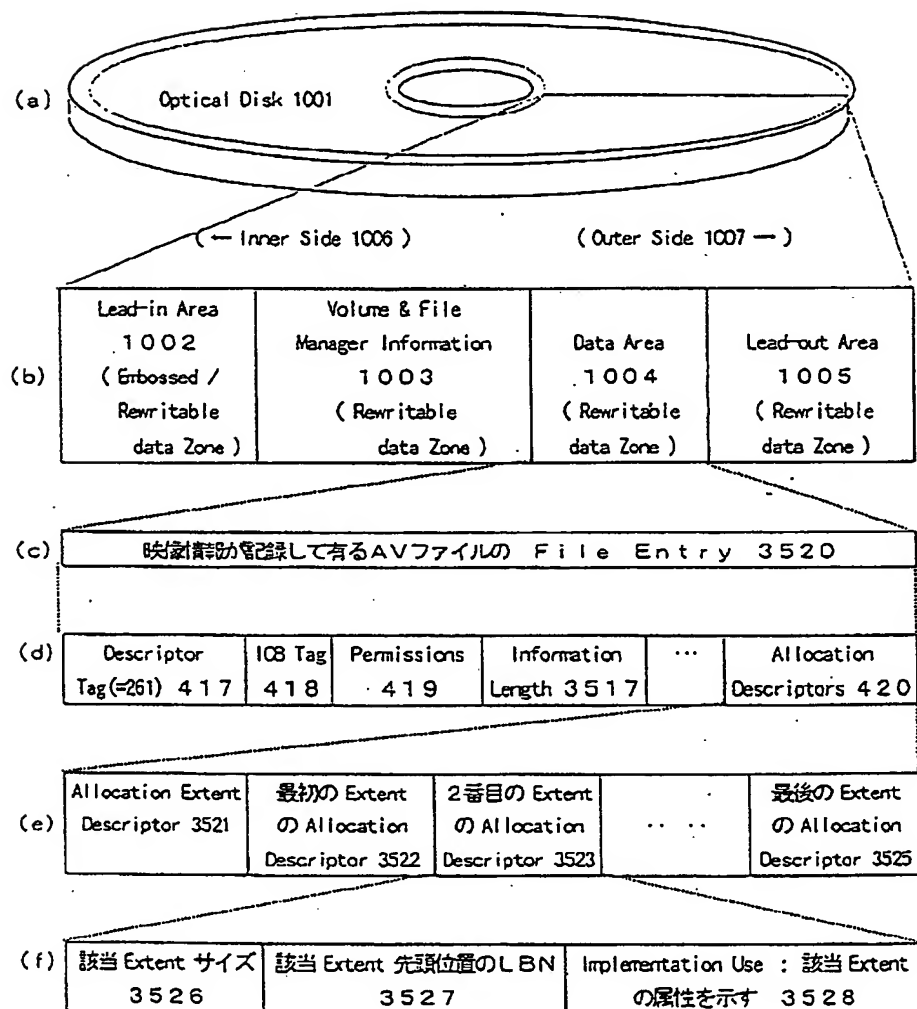
LBN/ODD、LBN/ODD-PS、LBN/UDF、  
LBN/UDF-PS、LBN/UDF-ODFix、LBN/XXX、LBN/XXX-PS  
における追加記録映像情報と Contiguous Data Area 内の未使用領域の関係

【図 41】



LBN/XXX における欠陥領域を避けた記録方法

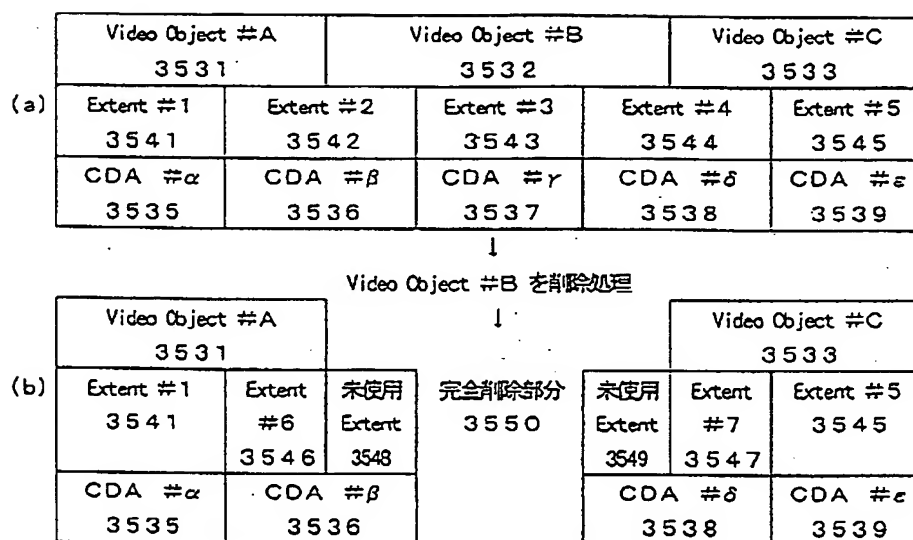
【図 39】



本発明実施例でのファイル毎に指定される Information Length の記録場所と  
各 Extent 毎の属性記述箇所 ( Implementation Use ) の記録場所



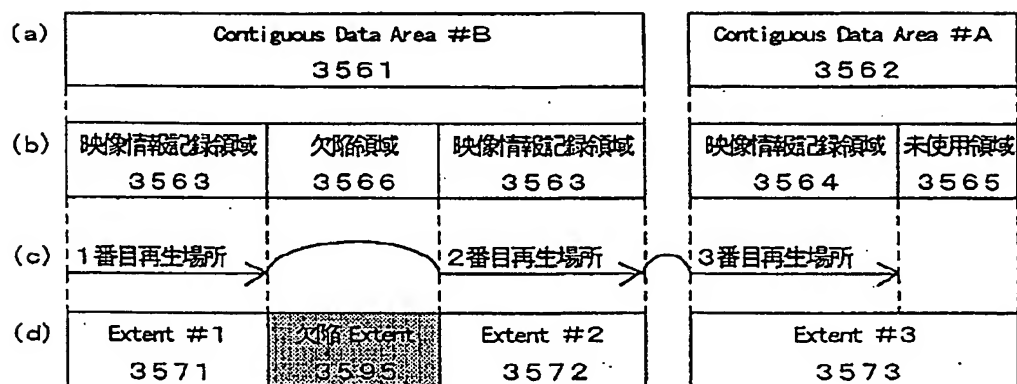
【図 40】



LBN/UDF-QAFix、LBN/UDF-PS、

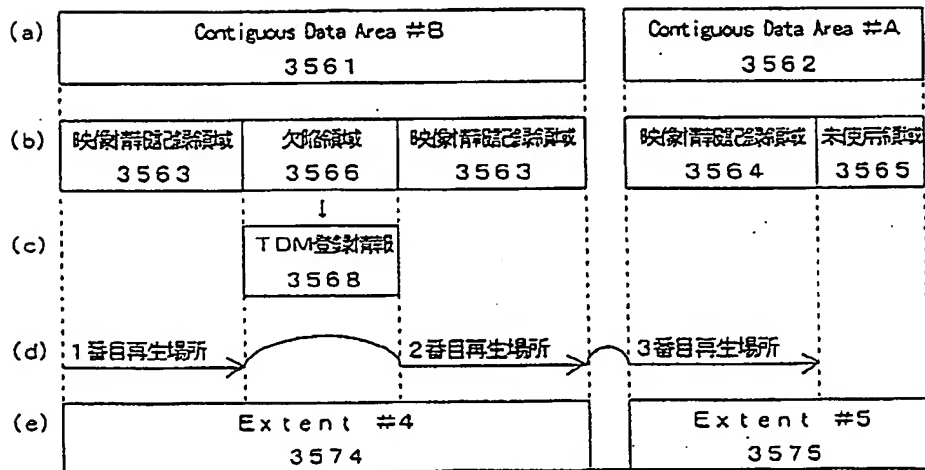
LBN/XXX-PS における AVファイル 内の部分削除処理方法に関する実施例

【図 42】



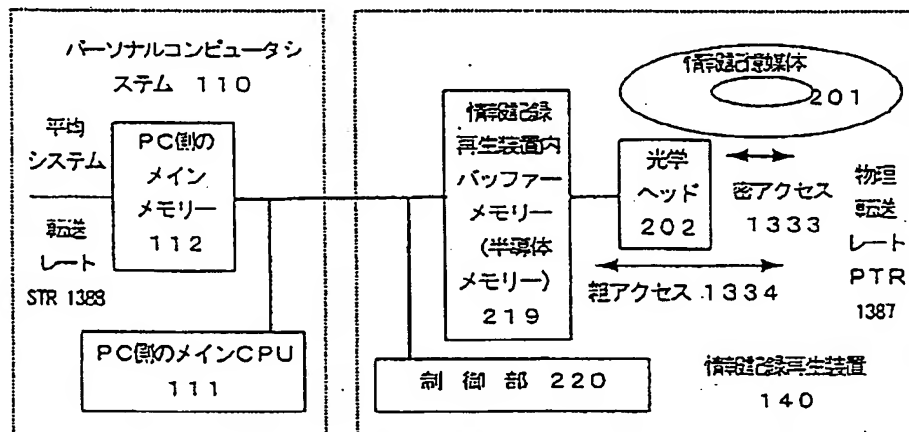
本発明における欠陥領域を避けた記録方法に関する他の実施形態図

【図 4 3】



LBN/UDF における欠陥領域を含めた記録方法

【図 4 4】



情報記録再生装置に対するコマンドインターフェースも考慮に入れた記録系のシステム概念モデル

【図 6 0】

- (E) ④ GETWRITE STATUS (a, c-a) の回答結果で得られた CDA #1 内の欠陥量に応じて CDA #3 に対して転送する映像情報量の調整を行う  
 ... 情報記録再生装置が CDA #2 内の記録処理を行っている間にコマンドを送る
- ⑨ DISCARD PRECEDING COMMAND (AV WRITE (g, r-g; h-1; p, q-1))
- ⑩ AV WRITE (g+j-i, r-g; h-1; p, q-1)

注) 上記の記録開始位置を "g - g+j-i" と後方にずらしている

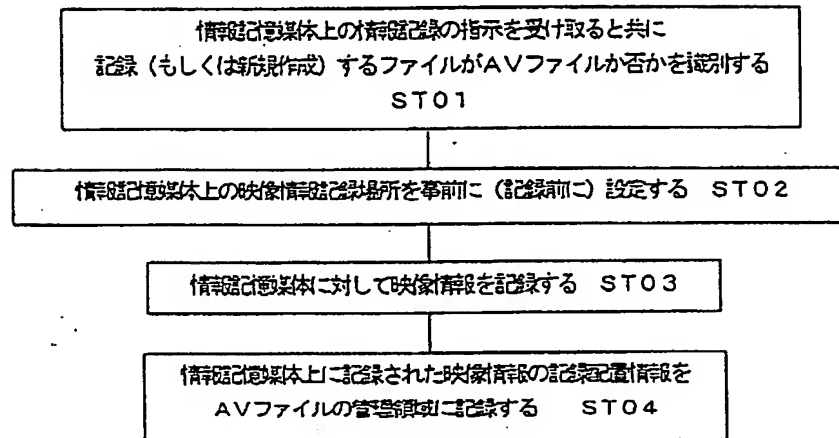
【図 45】

情報記録再生装置に対する従来の Write コマンドの問題点



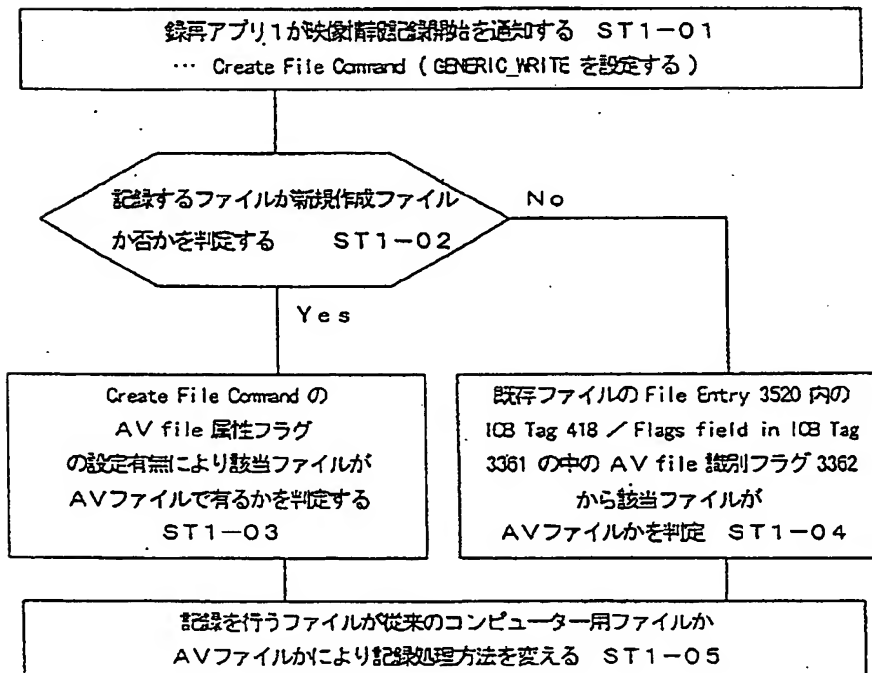
【図 46】

映像情報の記録記録手順を示すフローチャート



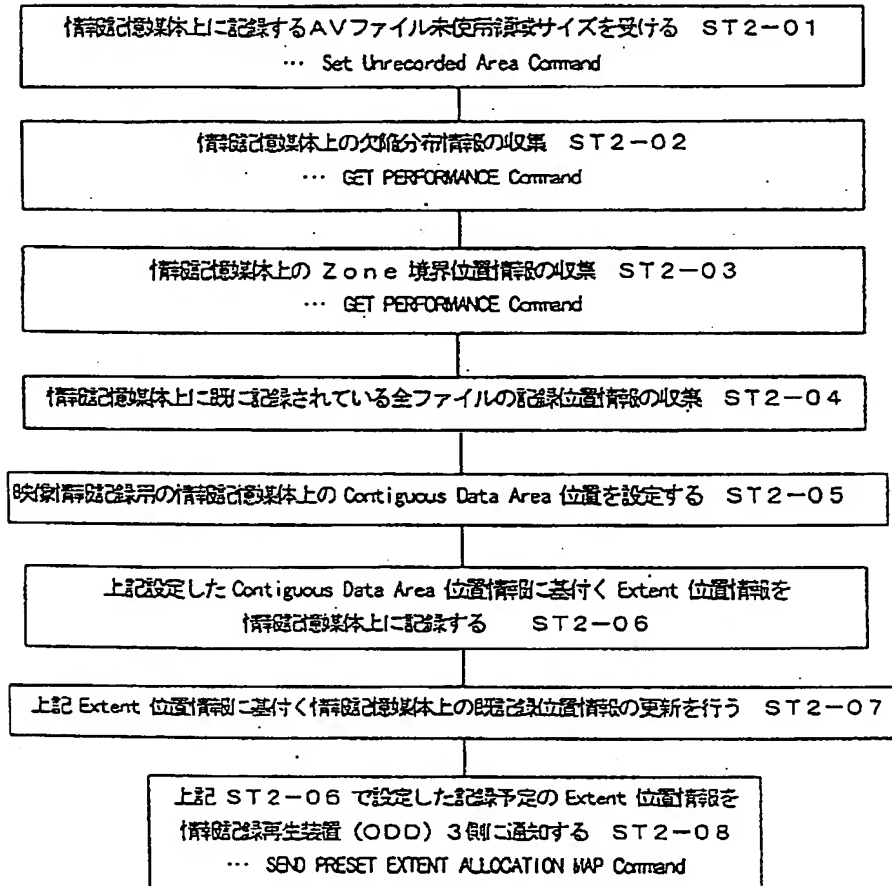
【図 47】

図 46 ST01 に示した記録手順内容に関する詳細フローチャート



【図 48】

図 46 ST02 に示した記録手順内容に関する詳細フローチャート



【図 56】

LBN/UDF、LBN/XXX に対応した情報記憶媒体への記録方法

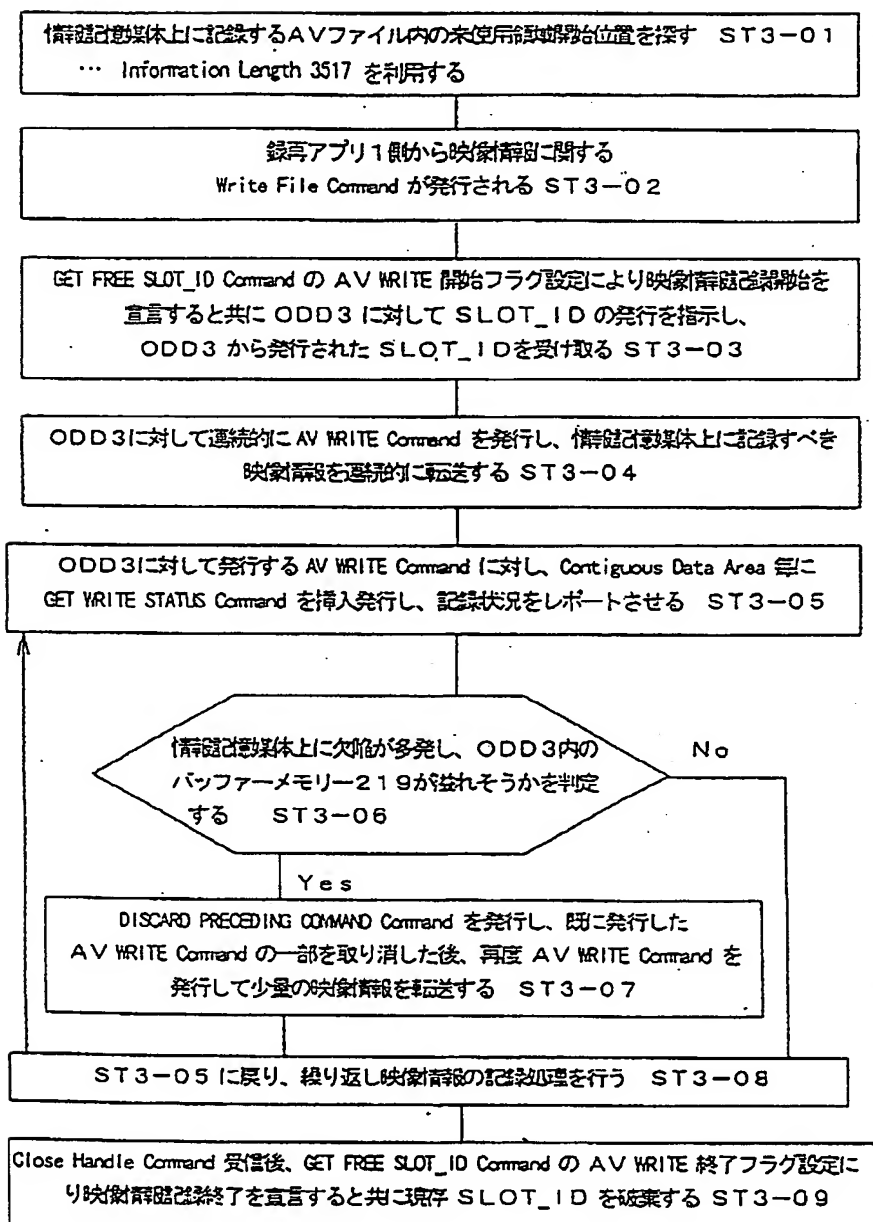
(A) 始めに情報記録再生装置に与える一連のコマンド内容

記号列: AV WRITE (開始LBN, サイズ, 該当 CDA 終了LBN; 次 CDA 開始LBN, 次 CDA 終了LBN)

- ① SEND PRESET EXTENT ALLOCATION MAP  
(a, c-a; d, f-d; g, ...)
- ② AV WRITE (a, b-a; c-1; d, f-1)
- ③ AV WRITE (b, c-b; c-1; d, f-1)
- ④ GET WRITE STATUS (a, c-a)
- ⑤ AV WRITE (d, e-d; f-1; g, h-1)
- ⑥ AV WRITE (e, f-1; f-1; g, h-1)
- ⑦ GET WRITE STATUS (d, f-d)
- ⑧ AV WRITE (g, r-g; h-1; p, q-1)

【図49】

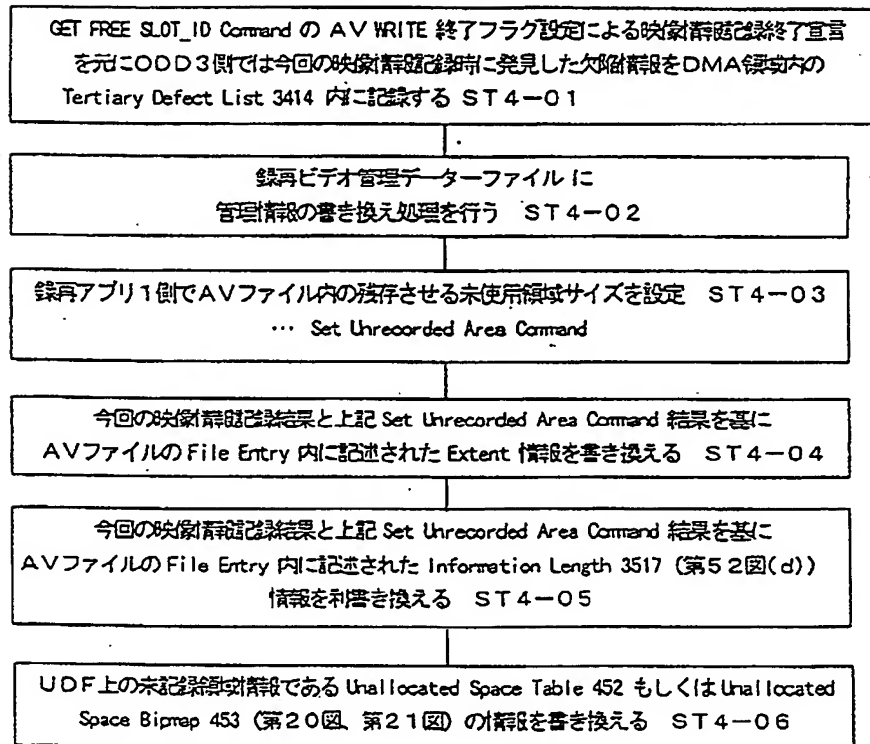
図46 ST03 に示した記録手順内容に関する詳細フローチャート



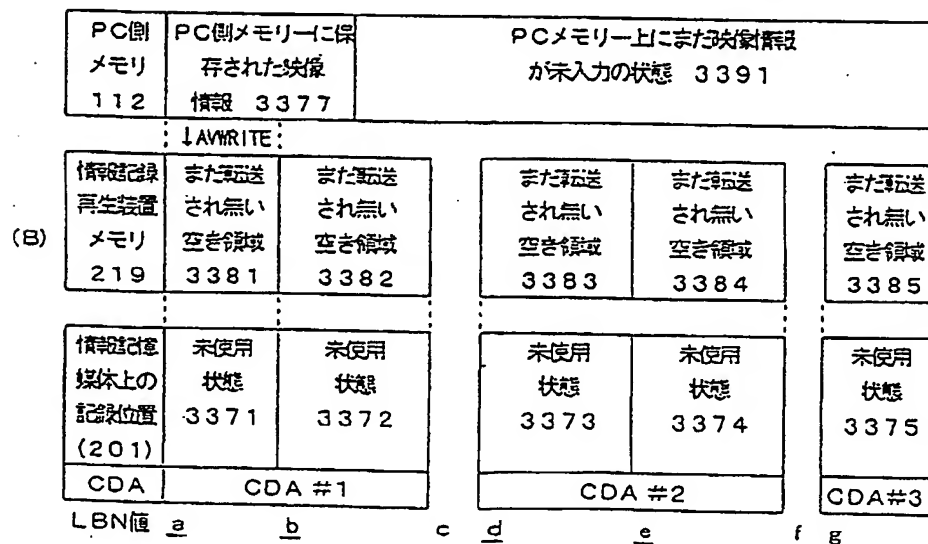


【図 50】

図 46 ST04 に示した記録手順内容に関する詳細フローチャート



【図 57】

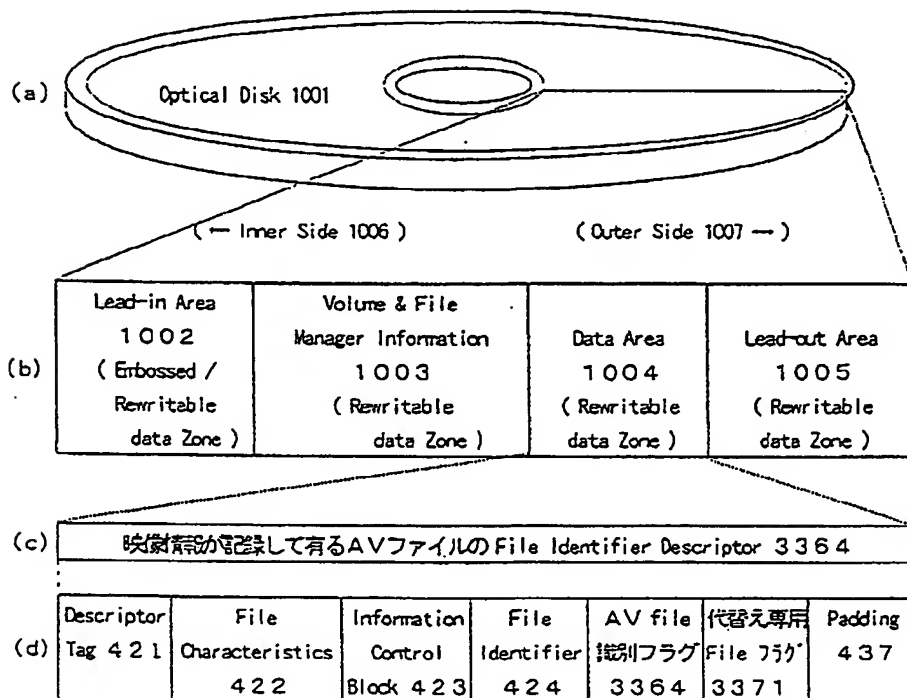


【図 5 1】

LBN/UDF、LBN/XXX において映像情報記録装置に  
使用する各種 API Command 内容一覧表

コマンド名 3401	コマンドの概要 3402	コマンドパラメータ 3403	戻り値 3404	コマンド種別 3405
Create File	ファイルオープン処理 ファイルの記録開始宣言 ファイルの再生開始宣言	既存のパラメータ に AV file 属性 フラグを追加する	既存の 戻り値を そのまま利用	既存コマンド に対し 一部内容追加
Set Unrecorded Area	AVファイル内の未使用 領域サイズを指定する	設定開始LBN値 未使用領域サイズ	情報受領完了 ・受領失敗	新規コマンド
Write File	ファイルの記録処理	既存パラメータ	既存の戻り値	既存コマンド
Read File	ファイルの再生処理	既存パラメータ	既存の戻り値	既存コマンド
Delete Part Of File	ファイル内の部分削除	削除開始ポインター 削除データサイズ	処理成功・失敗	新規コマンド
Close Handle	記録／再生処理の終了	既存パラメータ	既存の戻り値	既存コマンド
GetAVFreeSpaceSize	未記録領域サイズ調査	CDA設定条件	総未記録サイズ	新規コマンド
Change Order	ファイル内順番並び替え	変更前開始ポインタ 変更箇所サイズ 変更後開始ポインタ	処理成功・失敗	新規コマンド
AV Defragmentation	設定可能CDA領域拡大	CDA設定条件	処理成功・失敗	新規コマンド

【図 5 4】



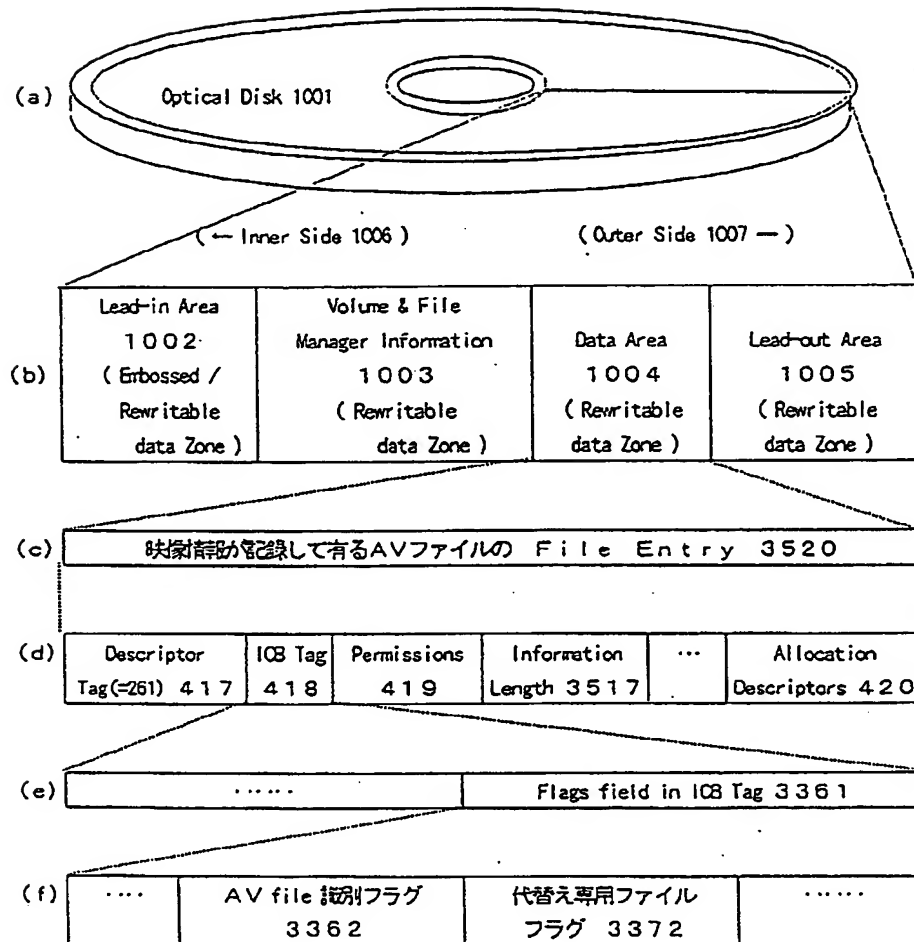
AVファイルの映像情報が記録して有る場所

【図 5 2】

LBN/UDF、LBN/XXX に対応した解読記録再生装置に対するコマンド一覧

コマンド名 3341	コマンドの概要 3342	コマンドパラメータ 3343	戻り値 (Status) 3344
AV WRITE	AV File に関する 映像解読処理 コマンド	記録開始位置 (LBN 指定又は Current Position)	コマンド受け取ったか  否かの情報  Accept / Not Accept
		データサイズ (セクタ数)	
		該当 Extent の終了位置	
		次の Extent の開始位置	
		次の Extent の終了位置	
		SLOT_ID (スロット ID)	
		AV WRITE 番号	
GET WRITE STATUS	現時点での解読記録再生装置内バッファメモリー 219 の余裕量 と LBN による指定範囲での各欠陥 ECC ブロック先頭位置の LBN 値を要求	指定範囲の開始 LBN 値	バッファメモリー 219 内の余裕量 (バイト数)
			欠陥 ECC ブロック数
		指定範囲のサイズ (セクタ数)	最初の ECC Block LBN
			2 番目 ECC Block LBN
			.....
DISCARD PRECEDING COMMAND	解読記録再生装置側に記録された先行コマンドを破棄 解読記録媒体上の欠陥量に合わせて転送データ量調整	削除する先行コマンド数	コマンド受け取ったか  否かの情報  Accept / Not Accept
		最初の削除コマンド番号	
		2 番目の削除コマンド番号	
		.....	
READ	AV File と PC File 兼用の再生処理コマンド	再生開始位置 (LBN)	データサイズ (セクタ数) 再生データ
		データサイズ (セクタ数)	
GET PERFORMANCE	解読記録媒体上の Zone 境界位置情報と DMA 情報 (LBN 換算要求) を要求	指定範囲の開始 LBN 値	指定範囲内の Zone 境界位置と DMA 情報 (LBN 換算後の値)
		指定範囲サイズ (セクタ数)	
SEND PRESET EXTENT ALLOCATION MAP	映像解読記録前情報記録再生装置から受け取った Zone 境界位置情報と DMA 情報を基に事前に設定した映像解読記録用の Extent の配置情報を通知	設定した Extent 数	コマンド受け取ったか  否かの情報  Accept / Not Accept
		最初の Extent 先頭位置	
		最初の Extent サイズ	
		2 番目の Extent 先頭位置	
		2 番目の Extent サイズ	
		.....	
GET FREE SLOT_ID	一通の AV WRITE 開始宣言 (0003 へ SLOT_ID 発行指示) と終了宣言 (SLOT_ID 解放)	AV WRITE 開始フラグ	0003 発行の SLOT_ID
		AV WRITE 終了フラグ	コマンド受け取ったか 否かの情報

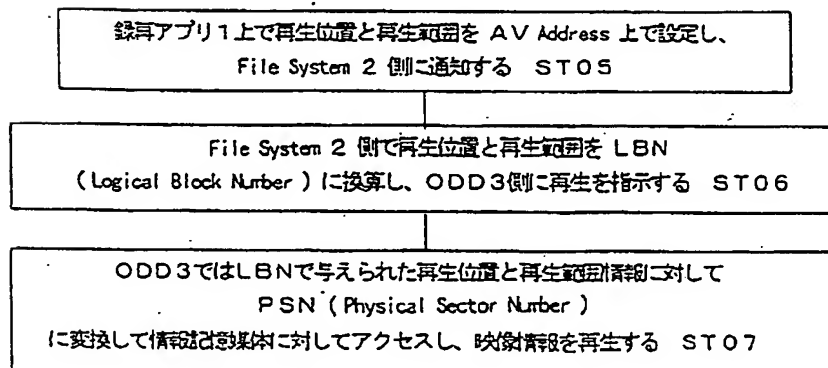
【図 5 3】



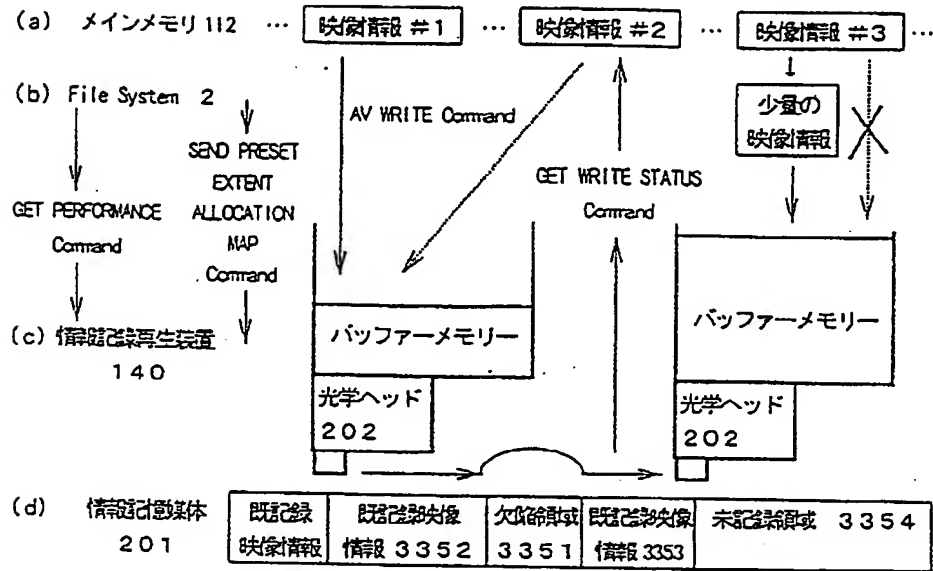
AVファイルの識別情報が記録して有る場所

【図 6 4】

映像情報の再生手順を示すフローチャート

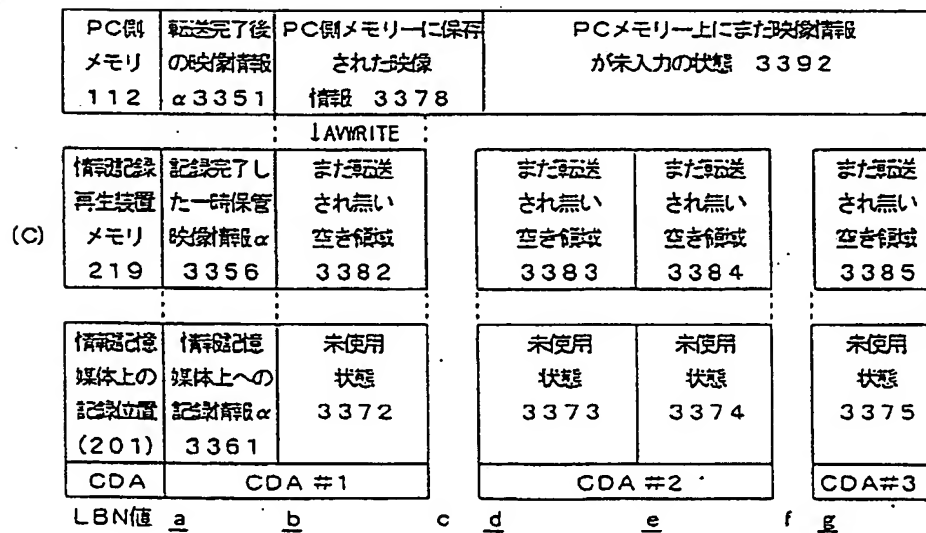


【図 5 5】

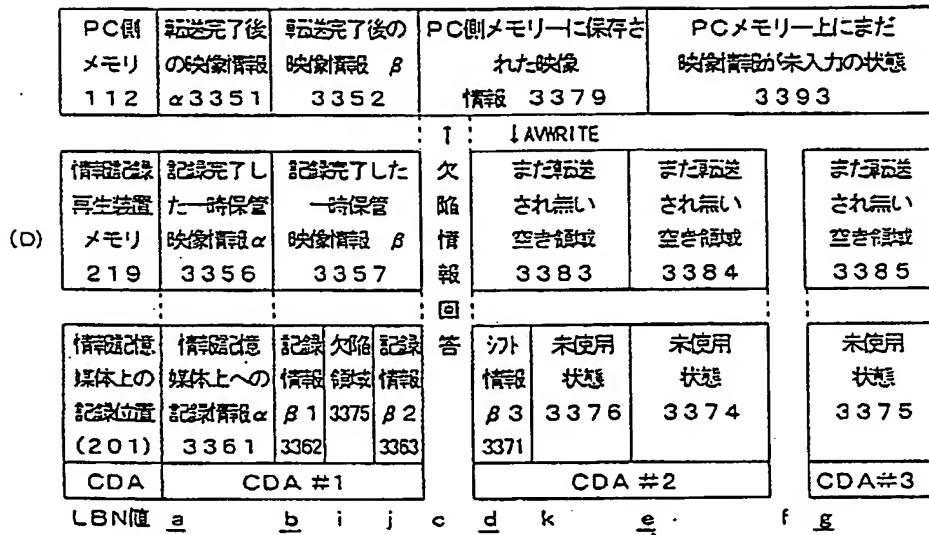


映像情報の連続記録方法

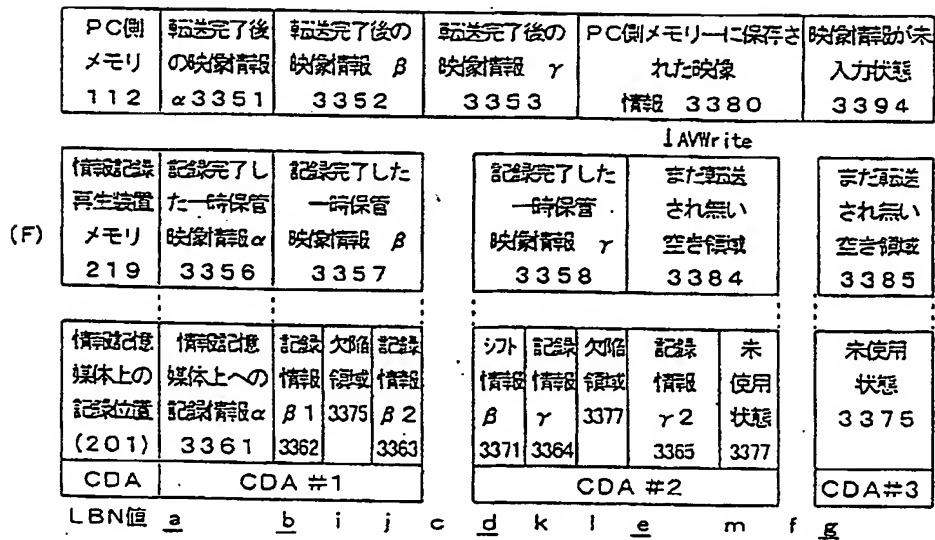
【図 5 8】



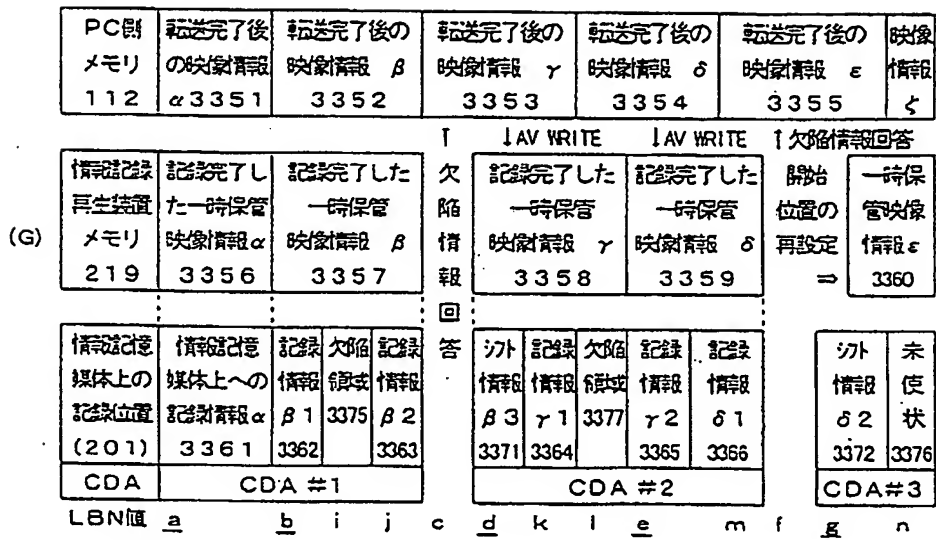
【図 59】



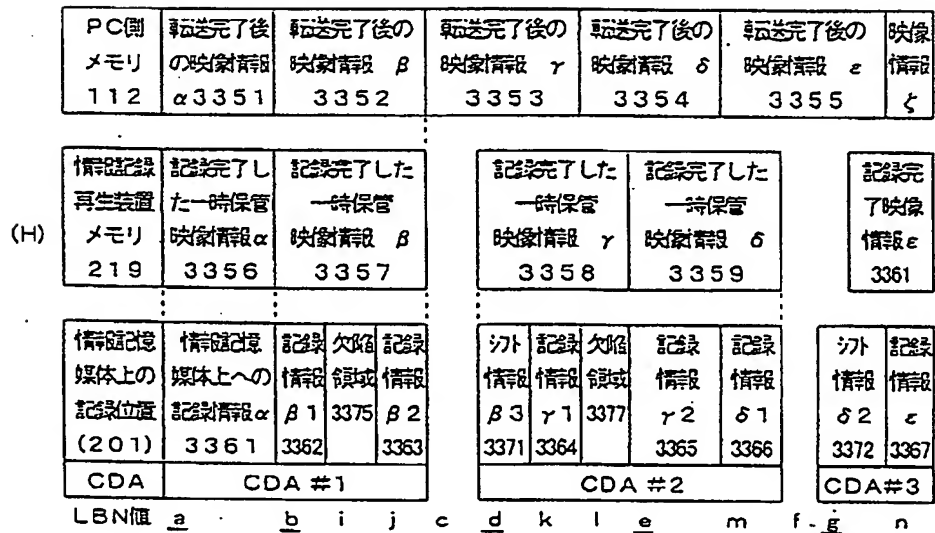
【図 61】



【図 6 2】

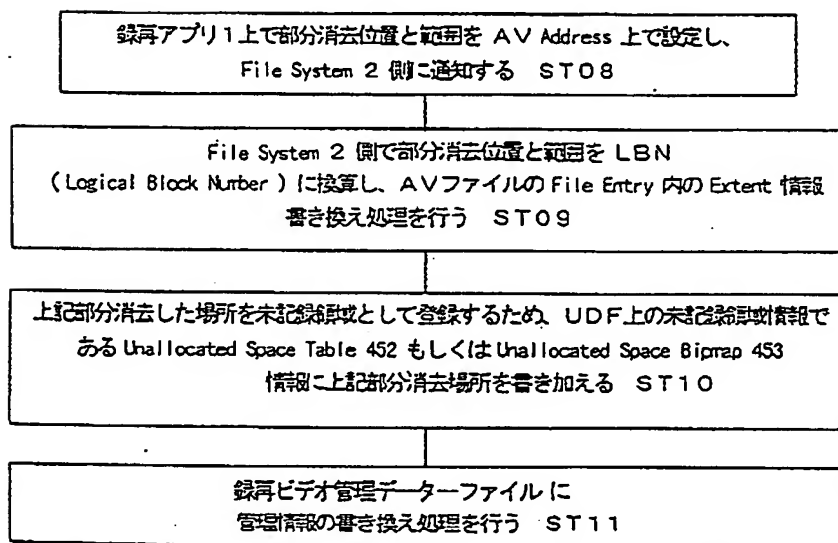


【図 6 3】



【図 65】

AVファイル内の部分消去手順を示すフローチャート





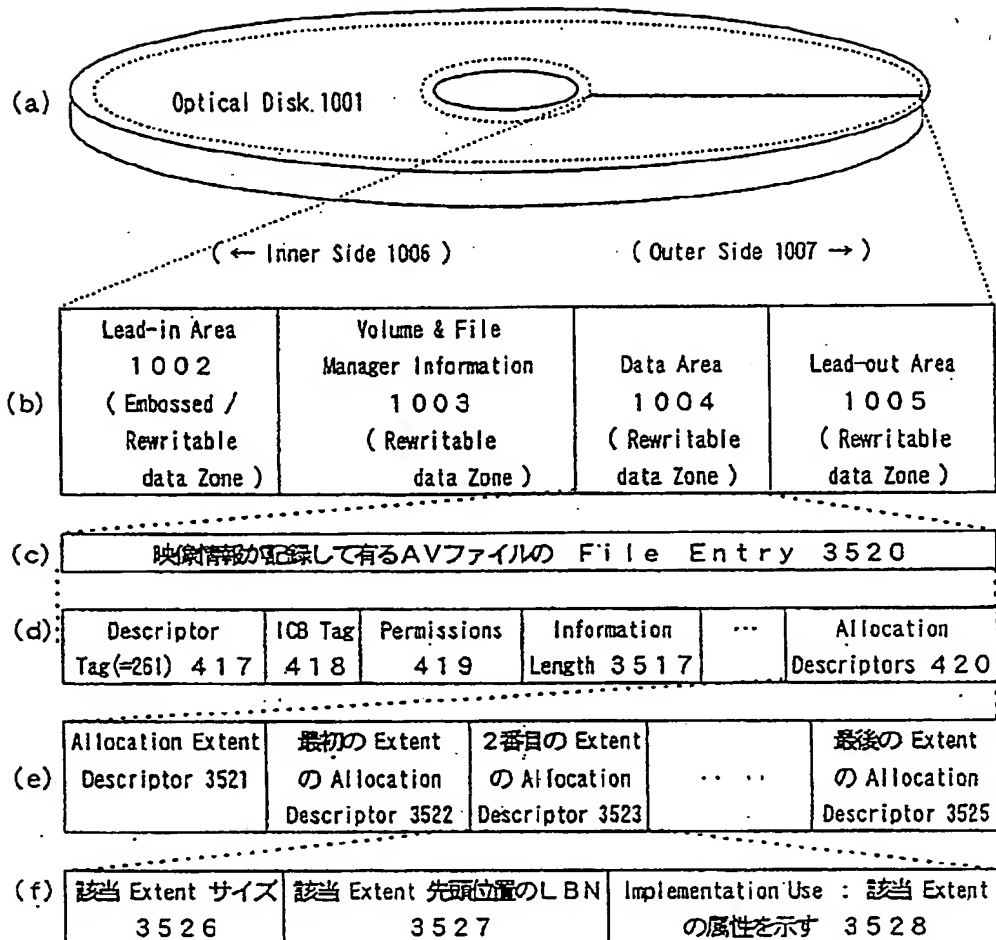
【図66】

## 映像情報記録方法を示した本発明の他の実施例説明図

AV File 3620																				
VOB #1 3616						VOB #1 3617						VOB #2 3618								
A		A				A		A				A		A						
V	...	V				V	...	V				V	...	V						
Ad		Ad				Ad		Ad				Ad		Ad						
0		a-1				a		a+c				a+c		a+c						
								-b				-b		-b+						
								-1						g-f						
														-1						
記録領域			非記録			記録領域			非記録			非記録			記録領域			非記録領域		
記録領域 Extent 3605			欠陥領域 Extent 3609			記録領域 Extent 3606			未使用 領域 Extent 3611			未使用 領域 Extent 3612			記録領域 Extent 3607			非記録領域 Extent 3613		
L		L	L			L		L		L		L		L	L		L			
B		B	B			B		B		B		B		B	B		B			
N	...	N	N	...		N	...	N	...	N	...	N	...	N	N	...	N			
h		h+a	h+a			h+b		h+c		h+d	h+e	h+f		h+g	h+g		h+j			
		-1				-1		-1		-1				-1			-1			
P		P	P			P		P		P	P		P	P	P		P			
S		S	S			S		S		S	S		S	S	S		S			
N	...	N	N	...		N	...	N	...	N	N	...	N	N	N	...	N			
k		k+a	k+a			k+b		k+c		k+d	k+e	k+f		k+g	k+g		k+j			
		-1				-1		-1		-1				-1			-1			
Contiguous Data Area # $\alpha$ 3601										Contiguous Data Area # $\beta$ 3602										
User Area 723																				

File Entry : AD(a,h: 記録), AD(b-a,h+a: 欠陥), AD(c-b,h+b: 記録), AD(d-c,h+c: 未使用),  
 AD(f-e,h+e: 未使用), AD(g-f,h+f: 記録), AD(j-g,h+g: 未使用)  
 Allocation Descriptorの記述内容 AD(Extentサイズ, Extent先頭位置: Extent属性)

【図67】



Implementation Use 3 5 2 8に記載される情報内容と Extent 属性の関係

- 0h : 記録領域の Extent を表す
- Ah : 未使用領域の Extent を表す
- Fh : 欠陥領域の Extent を表す

先の実施例における Extent 属性識別情報記録方法の説明図

フロントページの続き

Fターム(参考) 5B065 BA04 CC01 CC03  
5D044 AB05 AB07 BC06 CC04 DE03  
DE38 DE62 DE64 DE91  
5D090 AA01 BB04 CC01 CC04 FF27  
FF36 GG11 GG21 LL01